佐賀県文化財調査報告書第54集

下中杖遺跡

神埼郡三田川町所在

1980年3月

佐賀県教育委員会

下中杖遺跡

神埼郡三田川町所在

1980年3月

佐賀県教育委員会

下中杖遺跡ＳＥ202井戸跡出土木製鞍（前輪）

はじめに

近年、県内でも圃場整備事業が強力に推進されていますが、特に佐賀平野においては広大な面積がその対象となっています。この状況下で、平野部の水田下を発掘調査せねばならなくなりました。

従来、ほとんど手がついていない水田下の調査は思いもかけない成果を私たちに提供してくれます。神埼郡三田川町にある下中杖遺跡も例外ではありません。古代から中世にわたる掘立柱建物を中心とする集落の発見と、越州窯陶磁器、木製馬鞍などをはじめ貴重な遺物が出土しました。神埼郡は古代末期以来「神崎荘」と呼ばれる皇室領荘園として、中央にもよく知られていたところです。下中杖遺跡が「神崎荘」と何らかの深い関係をもつ集落であったらしいことが想起せられます。

ここに発掘調査報告書を刊行し、学術資料として、また重要な文化財を、県民の共有財産として大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

この調査にあたって文化庁、県中部農林事務所、三田川町土地改良課、同町教育委員会ならびに地元の方々の深いご理解と献身的なご協力に対し心からお礼申し上げます。

昭和55年3月

佐賀県教育委員会

教育長　古藤　浩

例　　言

1、本書は国庫補助事業として昭和52年度から53年度にかけて発掘調査を実施した下中杖遺跡の発掘調査報告書である。

2、調査は佐賀県教育委員会がこれにあたった。

3、本書の執筆はつぎのとおりである。

Ⅰ・Ⅱ	七　田　忠　昭
Ⅲ、1、(1)(2)	高　山　久美子
(3)～(8)	七　田　忠　昭
2、(1)(2)	高　山　久美子
(3)～(11)	七　田　忠　昭
Ⅳ	西　田　和　己
Ⅴ、1	高　山　久美子
2	七　田　忠　昭

4、遺構の実測は調査員がこれにあたり、遺物の実測には島孝子、藤原倫子、野口悦子、西村信子、永ノ間ひとみ、馬場悦子、古賀啓子、友清淑子、大島もと子、大石明子、高山久美子、七田忠昭があたった。

整図は山本タカ子、馬場悦子、藤原倫子、西村信子、友清淑子、高山久美子、東中川新子、七田忠昭がおこなった。

遺構写真撮影には七田忠昭が、遺物写真撮影には西田和己、川崎吉剛、高瀬哲郎、原口定があたった。

5、編集は七田忠昭が担当した。

凡　　例

1、遺構番号は調査区別、遺構別に付し、その前にＳＪ：甕棺墓、ＳＰ：土壙・木棺墓、ＳＲ：祭祀遺構、ＳＢ：建物、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土壙、ＳＤ：溝、ＳＡ：柵の分類記号を標記する。番号の100の位は調査区別で、1；Ａ区、2；Ｂ区、3；Ｃ区、4；Ｄ区、5；Ｆ区、6；Ｈ区である。

2、遺物実測図の個々の番号の下に出土遺構番号を記した。

3、挿図、本文中に用いた方位はすべて磁北である。

目　　次

Ⅰ．位置と環境…… 3
Ⅱ．発掘調査の経過…… 5
1、調査に至る経過…… 5
2、調査組織…… 5
3、調査の概要…… 6
(1)A・C・D・F・H区の調査…… 6
(2)B区の調査…… 8
Ⅲ．B区の調査…… 9
1、遺　　構…… 9
(1)墳　　墓…… 9
(2)祭祀遺構……13
(3)竪穴住居跡……14
(4)掘立柱建物跡……16
(5)井 戸 跡……20
(6)土　　壙……27
(7)溝　　跡……28
(8)その他の遺構……28
2、遺　　物……29
(1)埋葬に用いられた土器……29
(2)土壙墓、祭祀遺構出土の土器……32
(3)土 師 器……34
(4)黒色土器……42
(5)瓦　　器……43
(6)須 恵 器……44
(7)陶 磁 器……48
(8)その他の土器……54
(9)土 製 品……56
(10)石 製 品……56
(11)木 製 品……57
(12)金属製品……62
Ⅳ．B区以外の調査……64

1、D区の調査……64
2、A、F区の調査……64
3、C、H区の調査……65
4、SE 507 井戸跡と一括遺物……67
(1)遺　　構……67
(2)遺　　物……67
5、SE 607 井戸跡と一括遺物……70
(1)遺　　構……70
(2)遺　　物……70
V．総　　括……73
1、弥生時代の下中杖遺跡……73
2、古墳時代以降の下中杖遺跡……75

挿図目次

Fig 1　下中杖遺跡周辺地形図、遺跡分布図…… 2
2　下中杖遺跡調査区位置図…… 7
3　下中杖遺跡SB206竪穴住居跡実測図……14
4　下中杖遺跡SB209竪穴住居跡実測図……15
5　下中杖遺跡SB227建物跡実測図……17
6　下中杖遺跡SB219建物跡実測図……17
7　下中杖遺跡SB226建物跡実測図……18
8　下中杖遺跡SB225建物跡実測図……18
9　下中杖遺跡SB222建物跡実測図……19
10　下中杖遺跡SE201井戸跡実測図……21
11　下中杖遺跡SE202井戸跡実測図……22
12　下中杖遺跡SE215井戸跡実測図……22
13　下中杖遺跡SE228井戸跡実測図……23
14　下中杖遺跡SK206土壙実測図……27
15　下中杖遺跡SK227土壙実測図……27
16　下中杖遺跡SP218土壙墓実測図……29
17　下中杖遺跡B区出土甕棺実測図(1)……30
18　下中杖遺跡B区出土甕棺実測図(2)……31

Fig 19　下中杖遺跡Ｂ区祭祀遺構出土土器実測図……33
20　下中杖遺跡出土土師器実測図(1)……35
21　下中杖遺跡出土土師器実測図(2)……37
22　下中杖遺跡出土土師器実測図(3)……39
23　下中杖遺跡出土土師器実測図(4)……41
24　下中杖遺跡出土黒色土器、瓦器実測図……43
25　下中杖遺跡出土須恵器実測図(1)……45
26　下中杖遺跡出土須恵器実測図(2)……49
27　下中杖遺跡出土陶磁器実測図……51
28　下中杖遺跡出土土器実測図……55
29　下中杖遺跡出土土製品実測図……56
30　下中杖遺跡出土石製品実測図……57
31　下中杖遺跡ＳＥ202井戸跡出土鞍実測図……58
32　下中杖遺跡出土木製品実測図(1)……59
33　下中杖遺跡出土木製品実測図(2)……60
34　下中杖遺跡出土木製品(3)、金属製品実測図……61
35　下中杖遺跡Ｂ区出土銅銭拓影……63
36　下中杖遺跡ＳＥ507井戸跡実測図……67
37　下中杖遺跡ＳＥ507井戸跡出土土器、陶磁器実測図……69
38　下中杖遺跡ＳＥ607井戸跡実測図……70
39　下中杖遺跡ＳＥ607井戸跡出土土器、陶磁器実測図……71
40　下中杖遺跡Ｂ区主要遺構配置図……76

表　目　次

Tab 1　下中杖遺跡Ｂ区出土甕棺墓一覧表……12
2　下中杖遺跡Ｂ区出土土壙墓・木棺墓一覧表……12
3　下中杖遺跡Ｂ区出土竪穴住居跡一覧表……16
4　下中杖遺跡Ｂ区出土掘立柱建物跡一覧表……19
5　下中杖遺跡Ｂ区出土井戸跡一覧表……23
6　下中杖遺跡Ｂ区出土銅銭一覧表……62

図版目次

PL. 1…… 下中杖遺跡Ｂ区
2…… 下中杖遺跡Ｂ区甕棺墓、土壙墓、木棺墓
3…… 下中杖遺跡Ｂ区祭祀遺構
4…… 下中杖遺跡Ｂ区竪穴住居跡
5…… 下中杖遺跡Ｂ区井戸跡
6…… 下中杖遺跡Ｂ区溝、ＳＰ 218 土壙墓
7…… 下中杖遺跡Ｄ区・Ａ区・Ｆ区全景
8…… 下中杖遺跡Ｃ区・Ｈ区全景、ＳＥ 507 井戸・ＳＥ 607 井戸
9…… 下中杖遺跡Ｂ区出土甕棺
10…… 下中杖遺跡Ｂ区祭祀遺構出土土器
11…… 下中杖遺跡出土土師器（杯、碗）
12…… 下中杖遺跡出土土師器（壺、甕、鼎）
13…… 下中杖遺跡出土須恵器
14…… 下中杖遺跡出土陶磁器
15…… 下中杖遺跡出土陶磁器・土器
16…… 下中杖遺跡Ｂ区出土木製品
17…… 下中杖遺跡出土木製品・石製品・銅銭・青銅製箸

下中杖遺跡

1 雲仙寺廃寺跡
2 山田谷古墳群
3 山田蔵骨器出土地
4 山田古墳群
5 西石動古墳群
6 戦場ヶ谷遺跡
7 西石動銅戈鋒笵出土地
8 鎮西山南麓古墳群
9 屋形原古墳群
10 谷渡古墳群
11 大塚古墳
12 八幡社遺跡
13 天神尾古墳群
14 猿嶽古墳群
15 城山石棺遺跡
16 朝日古墳
17 朝日遺跡
18 帯隈山神籠石
19 熊本山舟形石棺
20 岩田遺跡
21 熊谷遺跡
22 四本黒木遺跡
23 二子遺跡
24 八子遺跡
25 三津永田遺跡
26 伊勢塚前方後円墳
27 下三津前方後円墳
28 志波屋開拓団地古墳群
29 辛上廃寺跡
30 松原遺跡
31 大塚遺跡
32 横田遺跡
33 二塚山遺跡群
34 堤土塁跡
35 切通遺跡
36 舟石遺跡
37 上地遺跡
38 ドンドン落遺跡
39 蓑原古墳
40 姫方遺跡
41 姫方前方後円墳
42 姫方原遺跡
43 目達原古墳群
44 西寒水遺跡
45 宝満宮前方後円墳
46 東尾銅剣出土遺跡
47 大塚古墳
48 北尾遺跡
49 樺の木遺跡
50 尾崎西分遺跡
51 伏部大石遺跡
52 利田遺跡群
53 川寄遺跡群
54 吉野ヶ里丘陵遺跡
55 二本黒木貝塚
56 塔の塚廃寺跡
57 **下中杖遺跡**
58 米多貝塚
59 姉川城址
60 本告城址
61 上黒井貝塚
62 西大石貝塚
63 東大石貝塚
64 姉貝塚
65 荒堅目貝塚
66 杏の木貝塚
67 高志神社貝塚
68 詫田西分貝塚
69 下藤貝塚
70 南里ヶ里貝塚
71 本分貝塚
72 かけ塚貝塚
73 石井貝塚
74 持丸1号貝塚
75 持丸2号貝塚
76 貴別当神社遺跡
77 下直鳥貝塚
78 柴尾遺跡
79 下神代貝塚
80 上地貝塚

Fig 1　下中杖遺跡周辺の遺跡と地形

I　位置と環境

下中杖遺跡は現在の神埼郡三田川町大字豆田字下中杖に存在する。三田川町は面積10.85km²の南北に細長い町で、その西部と東部を田手川と井柳川の二河川が南流する。これらは脊振山系にその源を発し、東脊振村、三田川町、上峰村、千代田町、三根町を通過し筑後川へと合流し、有明海へ注ぐ。上流では扇状地、中下流域では肥沃な沖積平野を形成し、佐賀平野東部の穀倉地帯を作り出している。

この地域は県内において特に遺跡の分布が密なところで、脊振山系より南方平野部へ突き出る丘陵上には縄文時代から古墳時代にかけての墓地群、また丘陵斜面や扇状地、平野部の微高地には弥生時代から古代、中世にかけての集落跡が数多く存在する。プレ縄文時代の遺跡はナイフ形石器を出土した三田川町二塚山[1]（東部工業団地内の旧小池周辺）など数ヵ所に過ぎないが、縄文時代になると東脊振村戦場ヶ谷[2]、寺ヶ里、上峰村屋形原、堤東方、堤西北方、切通北方、井手口など早期から晩期にかけて遺跡の数を増す。弥生時代では集落跡の調査はやっと端緒についたばかりであるが、特にこの地域の弥生墓地は豊富な副葬品を持つことから以前より注目されている。東脊振村、神埼町、三田川町へ延びる吉野ヶ里丘陵では北から上志波屋石棺[3]、上志波屋[4]、三津永田[5]、志波屋三角[6]、吉野ヶ里[7]、二本黒木[8]、東脊振村、三田川町にまたがる萩原丘陵では横田[9]、萩原[10]、上峰村から東脊振村、三田川町へ延びる二塚山丘陵では北から二塚山[11]、五本谷[12]、切通[13]、一本谷[14]などの遺跡が分布している。また銅戈鋳型を出土した東脊振村西石動[15]、4本の中広形銅矛を単独出土した三田川町桜馬場[16]などを含めて数多くの青銅器、鉄器、装身具の類が発見されているが、その豊富さと墓地の分布、在り方などは弥生時代における有力な集団がこの地域に存在したことを裏付けている。古墳時代になると中原町姫方[17]、姫方原[18]、上峰村五本谷などで方形周溝墓が出現するが、本格的な古墳は三田川町、上峰村にまたがる目達原古墳群[19]、東脊振村下三津、中原町姫方前方後円墳など中期古墳の築造をまたなければならない。また神埼町下朝日[20]、東脊振村西一本杉[21]などの古式の小円墳の存在も注意をひく。後期になると山麓部や丘陵上に群集墳が形成され、神埼町伊勢塚など前方後円墳も築造される。歴史時代になると東脊振村辛上廃寺[22]、上峰村塔の塚廃寺[23]、東脊振村霊仙寺[24]など古代から中世にかけての寺院跡が早くから知られているが、集落跡としては三田川町笞野など数ヵ所が知られているに過ぎない。

国鉄三田川駅より南東約1.5kmの下中杖集落一帯は二塚山丘陵、萩原丘陵が平野部にいどむ位置にあたり、遺跡は下中杖集落の西方及び東方に広がりをもつが、周辺の地形を考慮すれば、現在の集落が立地する地区に遺跡の中心部が存在する可能性がつよい。遺跡の北方及び東北方至近の距離にはそれぞれ上記の目達原古墳群、塔ノ塚廃寺などが存在しており、一帯は特に古代において発展した地域であったと考えられる。

（註）

(1) 七田忠志「原始社会の開始」『上峰村史』 1979

(2) 七田忠志「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」史前学雑誌6-2・4 1934

(3) 橋口達也「佐賀県脊振南麓における弥生社会の発展」九州考古学41～44 1971

(4)(6)(8) 佐賀県教育委員会「寺浦廃寺跡」佐賀県文化財調査報告書第34集 1976

(5) 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961

(7) 七田忠志「其の後の佐賀県戦場ヶ里遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」人類学雑誌6-4 1934

(9) 木下之治「考古学〈弥生時代〉――神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20-1 1967

(10) 高倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」考古学雑誌58-3 1972

(11)(12)佐賀県教育委員会「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 1979

(13) 金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961

(14)(15) 佐賀県立博物館「鏡・剣・玉」 1979

(16) 七田忠昭「文様ある銅矛について」九州考古学№52 1976

(17) 佐賀県教育委員会「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 1974

(18) 佐賀県教育委員会「姫方原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第33集 1975

(19) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史跡名勝天然紀念物調査報告第9集 1950

(20) 七田忠志「古代」『神埼町史』 1972

(21) 1979～1980佐賀県教育委員会調査

(22) 松尾禎作「東脊振村辛上廃寺址の調査」佐賀県史跡名勝天然紀念物調査報告第5集 1936

(23) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史跡名勝天然紀念物調査報告第7集 1940

(24) 東脊振村教育委員会「霊仙寺跡」東脊振村文化財調査報告書第3集 1979

II、発掘調査の経過

1、調査に至る経過

農業基盤整備事業は県内において最も大規模な公共事業の1つである。県は昭和52年度に1,400haの圃場整備事業を企画したが、特に佐賀平野においては広範囲にわたって実施された。三田川町でも20haの水田、畑地がその対象となったが、県教育委員会は施行に先だち、昭和52年5月、全域に試掘溝を設け、遺跡存在の有無及び範囲確認などの事前調査を実施した。その結果、下中杖集落の西側の水田、畑地、東側墓地付近の畑地に遺構の存在が確認された。当初の設計段階で破壊、掘削を受けるべき面積は、県教委と県中部農林事務所、三田川町土地改良課との数回にわたる協議により当初の計画を変更し、最小限に縮小され、約8,600㎡について発掘調査を実施することになった。

下中杖集落西方にはA、C、D、F、Hの調査区を設け、昭和52年8月26日から53年3月17日にかけて、工事の進展に伴いA、F区（水路予定地）からC、H、D区（削平される畑地）の順序で発掘作業を行った。またB区については県教委の調査能力を超えていたため昭和53年度へ持ち越しとなり、工事も1年間凍結された。B区の発掘調査は昭和53年4月25日から10月31日までの期間を費やした。

約1年2ヵ月を要した調査期間中は2度の酷暑と酷寒に耐えなければならず、危険を伴う井戸跡の発掘を100ヵ所以上行わなければならなかったが、調査員、発掘作業員すべての努力によって無事に終了することができた。

現地調査終了後直ちに整理作業を開始したが、遺物の水洗い、一部の復元を上峰村のプレハブ内で行い、後の復元作業、遺物実測図作成、現地調査記録の整理などは佐賀県文化財資料室において実施した。

2、調査組織

（事務局）

局　長	田中　寿義雄	佐賀県教育庁文化課課長	
次　長	武富　雅道	〃	課長補佐（52年度）
	川久保　松広	〃	〃　（53年度）
庶　務	片渕　正美	〃	庶務係長
会　計	大塚　博昭	〃	庶務係
	森　由紀子	〃	〃
	野口　茂美	〃	〃　（53年度）

（発掘調査員）

調査責任者	木下　巧	佐賀県教育庁文化課文化財調査第二係係長	
調査員	中島弘之	〃	文化財調査第二係
（担当）	七田忠昭	〃	〃
	高山久美子	〃	〃
調査補助員	木川雅樹		
	西田和己	(現)佐賀県教育庁文化課文化財調査第二係	
	森田孝志	(現)　〃	文化財調査第一係
	福田義彦	(現)　〃	〃
	山本タカ子	佐賀県文化財資料室	

（発掘作業員）

堤　ユキ、堤　イシ、大隈　一枝、野中マツヨ、堤　千恵子、矢動丸敏子、大隈ハルヨ、矢動丸五十三、岩橋　久子、伊藤　正子、大隈ツユ子、中島シマ子、伊藤　照子、内川千恵子、重松サエ子、重松　伸子、岩橋　久枝、前山　式部、綾部輝隆他

（協力関係機関）

佐賀県中部農林事務所、三田川町土地改良課、三田川町教育委員会、上峰村史編纂・執筆委員会、九州歴史資料館、三田川町下中杖区

3、調査の概要

(1)、A、C、D、F、H区の調査

昭和52年5月の範囲確認調査の結果に基づき、8月26日より遺跡が確認された地区について再び詳細な試掘を行い、施工担当部局の設計変更の資料とした。本格的な発掘調査を開始したのは9月5日からで、掘削工事との兼ね合いで、水路予定地であるA区、F区から始め、C区、H区、D区の順で作業を進行させた。

A区は集落のすぐ西側、標高6.18～6.24mの水田に設けた調査区で、周囲は設計変更によって現状を保つことができ、調査は幅約8m、長さ約54mの約440m²について実施した。

A区では弥生時代の甕棺墓、土壙墓、古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などを発掘し、多くの遺物を出土した。

F区は集落の西方、南北に走る、幹線水路予定地である水田で標高5.77～6.22m、幅12m、長さ約133m、面積約1,600m²の調査区である。

F区では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などが主要な遺構であるが、弥生土器を数十個も納めた土壙が2ヵ所発見され、またいくつかの井戸跡からは古代から中世にかけての土器、陶磁器

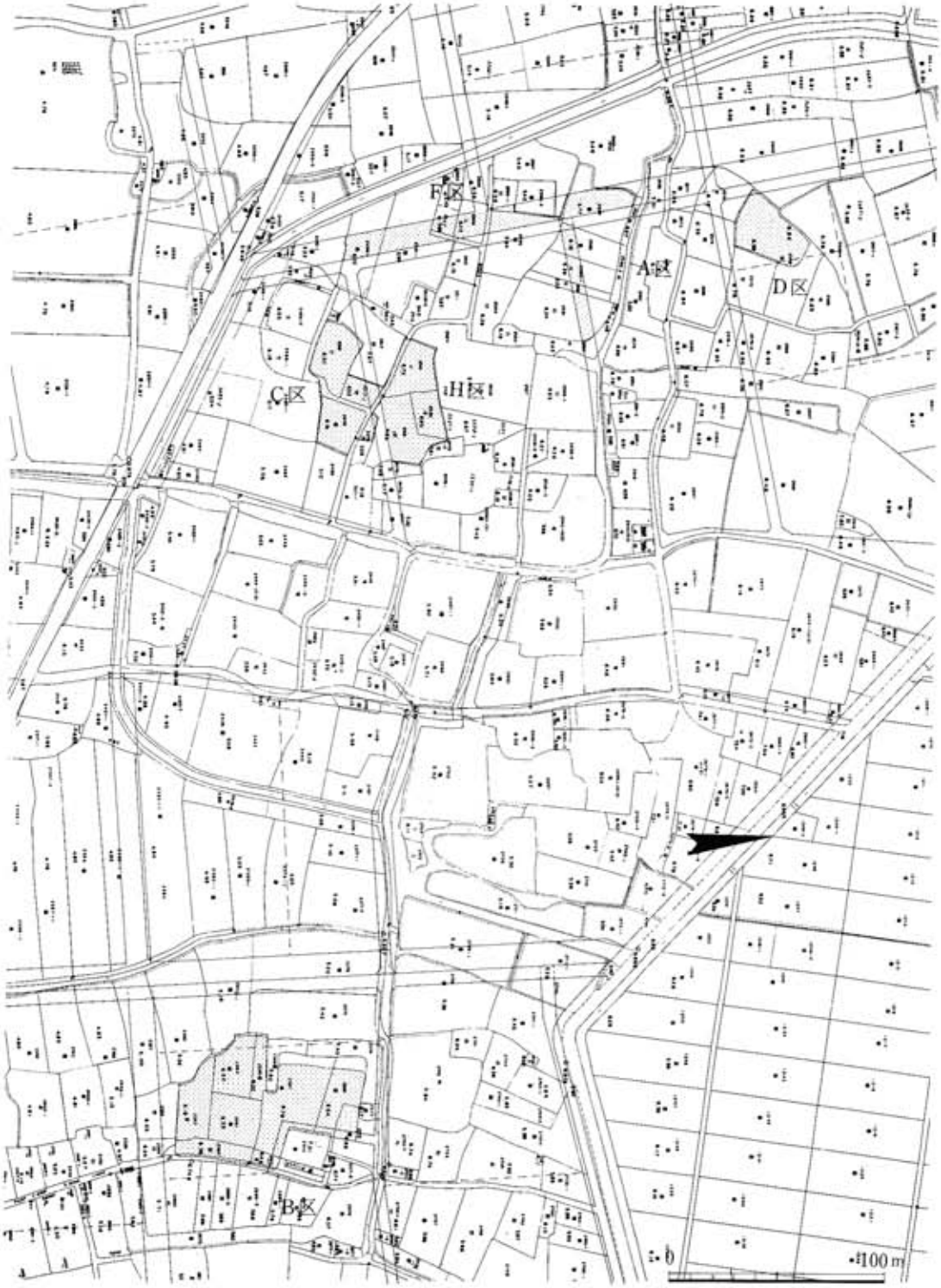


Fig 2　下中杖遺跡調査区位置図

を一括して出土した。

C区、H区は集落の西南方、水田よりやや高まりをもつ標高6.30～6.90mの畑地、雑木林で、面的に削平される部分全域約2,950㎡について調査を実施した。

これらの調査区からは弥生時代の竪穴、古代から中世、近世にわたる掘立柱建物、井戸跡、建物を囲むような溝跡、溝に沿う柵列などを発掘したが、C区では池状の遺構も発見できた。また主に井戸跡からは多数の遺物を出土したが、H区の井戸から出土した越州窯陶磁片、緑釉陶器片を含む一括土器群は注意をひく。

D区は集落の西北方にあたる標高6.34～6.58mの畑地で、調査区は設計変更により最小限の約550㎡におさえることができた。

D区でも古墳時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構が存在したが、弥生時代の甕棺墓も出土した。A区とD区のほぼ中央に位置する宅地の南側水田部分でも工事の際、甕棺墓の墓壙が確認でき、墓地の範囲はD区からA区にかけて広がっていたことは明白である。

(2)、B区の調査

B区は集落東方墓地周辺の水田面より高まった標高6.18～6.88mの畑地で、昭和53年4月から調査を実施した面積約3,060㎡の地区である。これまでの調査に較べ面的に発掘が実施でき、多くの成果をあげた。

検出した遺構としては弥生時代の甕棺墓、土壙・木棺墓、祭祀遺構、古墳時代の竪穴住居跡、井戸跡、土壙、奈良時代から室町時代にかけての掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙などが主なものだが、他の地区では例をみない大規模な掘立柱建物跡や建物に沿って、あるいは建物群を囲むようにめぐる溝跡の存在も注意をひく。

出土した遺物としては2基の井戸跡から一括して出土した越州窯陶磁器、白磁、緑釉陶器を多数含む土器群や、木製馬鞍の前輪、青銅製箸などは特に注目される。中世の輸入陶磁器も多く出土したが、他に木器、銅銭などの出土もみた。

Ⅲ、Ｂ区の調査

１、遺構（折り込み３）

調査区は西から入り込んでいる水田によって南部と北部に二分できる。南部の北東部には弥生時代の墳墓群、祭祀遺構が分布するが他の遺構は調査区全面にわたって分布している。

検出した遺構のうち主なものは、甕棺墓12基、土壙・木棺墓17基、祭祀遺構６基、竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡33棟以上、井戸跡35基、土壙約50基、溝跡27条、柵列３などであるが、調査区南部の中央部、調査区北部においては足の踏み場もない程度に遺構が密集している。

(1)墳墓（PL. 2）

Ｂ区南半部の北東寄りに弥生時代の墓域が形成されている。検出した墳墓は甕棺墓12基、土壙墓11基、木棺墓６基である。

これらは大きく３つのグループに分けることができる。第１群は北西部一帯に密集して形成されているグループで、甕棺墓９基、土壙墓５基より成る。そのなかでも甕棺墓は主に北西隅に、土壙墓、木棺墓は西側および東側に互いに切り合って構築されている。

墓域の東側を南北に横切るＳＤ201溝の東側にも墳墓が点在する。その北寄りの小群を第２群、南側の小群を第３群とする。

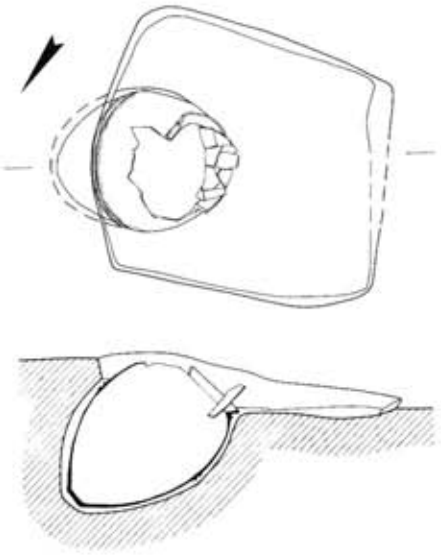
第２群は甕棺墓１基、土壙墓２基より成る。これらのうち、ＳＪ201甕棺墓は削平を受けて東側斜面に棺の口縁部が露出していた。また、ＳＰ201土壙墓の東半分も削平によって消失していた。

第３群は甕棺墓１基、土壙墓１基、木棺墓１基のグループである。墓域の南東部に位置する。

これらの墳墓をとりまくような配置状況で祭祀遺構と考えられる不整形の土壙を６ヵ所検出した。第１群の西側にはＳＲ204遺構、北側にはＳＲ205遺構、同じく第１群より南方向にやや離れてＳＲ202遺構、第２群の北西にＳＲ203遺構、第３群の北方にＳＲ206遺構、同じく第３群の南西方向にＳＲ201遺構である。これらのうち、古墳時代の所産であるＳＲ204遺構を除いて、ほかの５つの祭祀遺構からは、祭祀用と考えられる丹塗りを施した壺や高杯などが出土している。

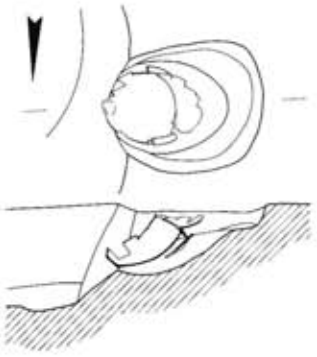
甕棺墓

調査した甕棺墓は成人用９基、小児用３基の合わせて12基である。そのうち、成人用と考えられる１基は棺がほとんど消失してその墓壙のみを残している。遺構の配置は、第1群北西部に７基がかたよって存在するほかは比較的分散している。これらの墳墓は後世の削平が墓壙底までおよんでおり、すべて破壊を受けている。特に上甕の保存状態が良くない。棺に使用された土器は弥生時代中期末から後期初頭の所産と考えられる。副葬品や人骨は出土していない。



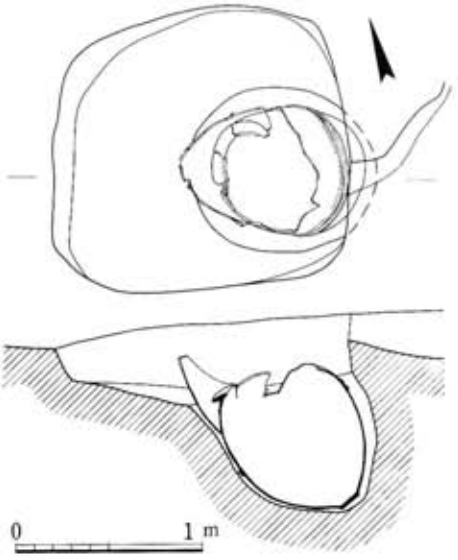
ＳＪ203甕棺墓

第３群に位置するただ１基の成人用複式甕棺墓である。平面が1.57ｍ×1.41ｍの正方形に近い墓壙の東側を斜め下方に掘り込み、大甕をすっぽり埋置している。上部には胴上半部を打ち欠いた小型の甕を用いる挿入式のものであるが、下甕に比して上甕が小さい。傾斜角42.5°、主軸方位Ｓ－W54°。



ＳＪ208甕棺墓

第１群中央部に位置する小児用複式甕棺墓である。墓壙は0.78ｍ×0.68ｍの平面隅丸長方形で、その東側を斜め下方に堀り込み、棺を埋置している。上下とも同形の小甕を用いる接口式のもので、その接口部には一枚の扁平な板石を敷いている。墓壙東側はＳＪ206甕棺墓と切り合っているが、それより古い時期のものである。傾斜角44.5°、主軸方位Ｓ－W84°。



ＳＪ210甕棺墓

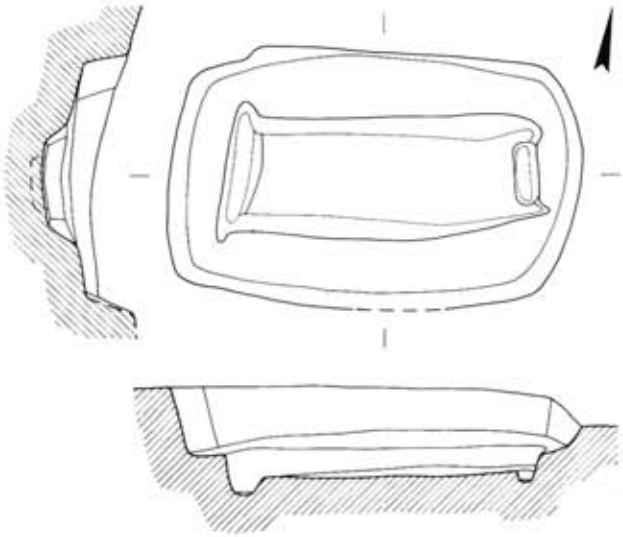
第１群の北西部に位置する成人用複式甕棺墓である。墓壙の南壁をＳＤ210溝に壊されている。墓壙は1.57ｍ×1.48ｍの平面隅丸方形で、その東側をやや斜め下方に掘り下げ、大型の甕を埋置している。上部には口縁部を打ち欠いた大甕を用いる覆口式のものである。墓壙の北西部をＳＪ211甕棺墓と切り合うが、それより新しい。傾斜角49.5°、主軸方位Ｎ－W74.5°。

土壙墓・木棺墓

土壙墓は全部で11基検出した。その大半の８基が第１群に属する。第２群には２基、第３群には１基存在する。

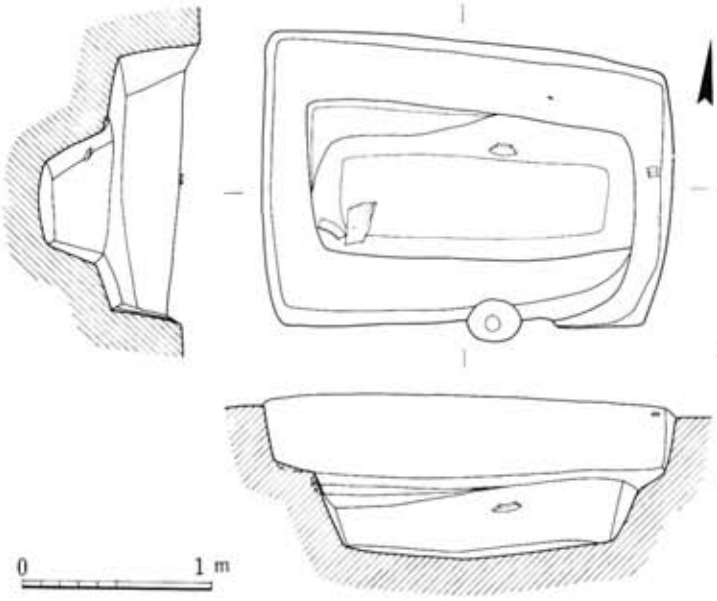
木棺墓は全部で６基検出した。第１群に５基、第３群に１基属する。当初、墓壙を検出した時点では土壙墓であろうと考えられていたが、棺を掘り上げた段階で６基の墳墓に木棺埋設の痕跡を認めたのである。しかし、板材、目張り粘土などは残存していない。

副葬品などの遺物は、ＳＰ204土壙墓から土器の破片が数点出土したのみである。



ＳＰ203木棺墓

第３群に属する木棺墓である。2.16ｍ×1.36ｍ、深さ0.34ｍの平面隅丸長方形の墓壙中央に棺を有する。棺の東側小口には約0.6ｍ×0.16ｍ、深さ約0.12ｍの平面長楕円形の掘り込みが認められた。また西側小口にもこれと同様の掘り込みがあるが棺の幅より狭い。しかし、小口の両角には、木棺の側板のための掘り込みと思われる0.1ｍぐらいの溝を有している。この平面形状から推測すると、両側板で両小口板を挟み込んで木棺を組み立て、外側を埋めもどす形式のものであったと考えられる。棺の規模は長さ1.36ｍ、幅0.46ｍを測る。東側がわずかに幅広く、頭位であろう。主軸方向Ｎ－Ｅ78.5°。



ＳＰ204土壙墓

墓域の最も南東に位置し、第３群に属する成人用土壙墓である。2.14ｍ×1.48ｍの平面隅丸長方形の墓壙中央に1.7ｍ×0.78ｍ、深さ0.5ｍの平面隅丸長方形の棺を掘り込んでいる。棺底はやや舟底形をなす。頭位にあたる棺上部に扁平な板石１枚と高杯の口縁部片が残存する。本来、数枚の石蓋があったものと考えられる。主軸方位Ｓ－Ｗ85°、最もしっかりしたつくりの土壙墓である。

Tab. 1　下中杖遺跡B区出土甕棺墓一覧表

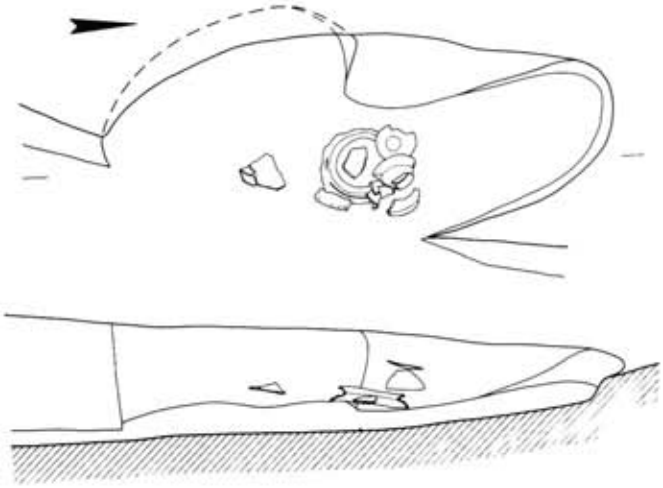
遺構番号	甕棺型式	器形 上・下	墓壙 cm 長×幅×深	方位	傾斜	備考	時期
SJ201	挿入式	壺・甕		N−E87°	47.5°		後期初頭
SJ202	接口式(小児)	甕・甕		S−E35°	60.5°		中期後半
SJ203	挿入式	甕・甕	157×141	S−W54°	42.5°		後期初頭
SJ204	接口式	甕・甕	×156	N−W86°	48.5°		中期後半
SJ205	覆口式	甕・甕	×154	N−W68.5°	51.5°		
SJ206	覆口式	甕・甕	193×148	N−W88°	49.5°	SJ208甕棺墓より新	後期初頭
SJ207	?	・甕	149× 94	S−W81°	?	破壊 SP 207土壙墓より古	
SJ208	接口式(小児)	甕・甕	78× 68	S−W84°	44.5°	SJ206甕棺墓より古 棺接口部に敷石	中期後半
SJ209	覆口式	甕・甕	168×	N−W87°	46°	棺接口部に河原石	
SJ210	覆口式	甕・甕	157×148	N−W74.5°	49.5°	SJ211甕棺墓より新	後期初頭
SJ211	覆口式	甕・甕	120× 73	S−W66°	47.5°	SJ210甕棺墓より古	中期後半
SJ212	接口式(小児)	甕・甕	×120	N−W84.5°	49.5°		中期後半

Tab. 2　下中杖遺跡B区出土土壙墓・木棺墓一覧表

遺構番号	型式	墓壙 cm 長×幅×深	棺 cm 長×幅×深	方位	備考
SP 201	失蓋	122×33	52×27	S−W87°	棺頭位上部に粘土残存
SP 202	失蓋	246× 102×25	158×48×38	S−W74°	
SP 203	木棺墓	216× 136×34	136×46	N−E78.5°	
SP 204	石蓋	214× 148×43	170×78×50	S−W85°	棺内より高杯片出土　中期後半
SP 205	木棺墓	252× 162×20	186×88	N−E9.5°	
SP 206	木棺墓	230× 142×37	180×66	南北	
SP 207	石蓋	160×28	230×70	東西	SJ 207甕棺墓より新
SP 208	木棺墓	164×18	230×72	東西	
SP 209	失蓋	124	136×64	S−W53°	
SP 210	失蓋	218× 134×24	188×66×25	N−E70°	
SP 211	失蓋	198× 116×31	148×68	N−E60°	
SP 212	失蓋	184× 100	148×70		
SP 213	失蓋	162× 132×33	×58		
SP 214	失蓋	238× 116×25	178×56	S−W18°	
SP 215	木棺墓	224× 176×29	220×60	S−W20°	
SP 216	木棺墓	160× 160×30	104×56	N−W82.5°	
SP 217	失蓋	242× 134×44	184×76	S−W 4°	

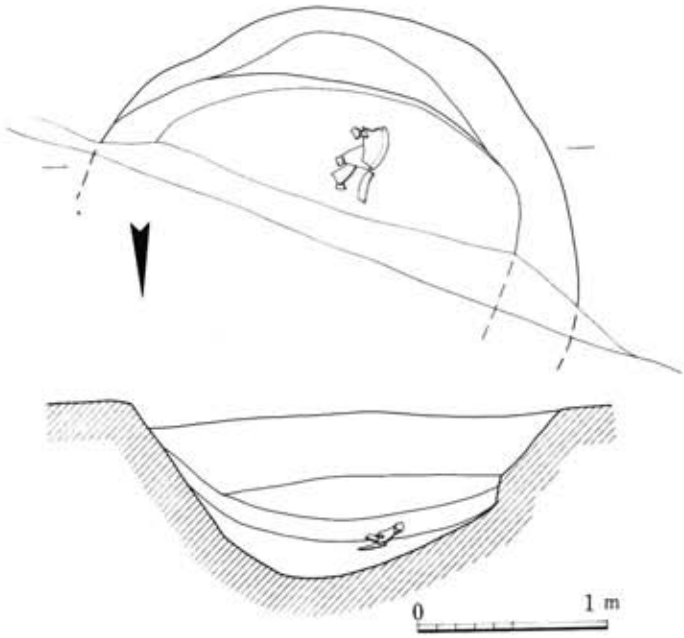
(2)祭祀遺構（PL. 3）

祭祀遺構と考えられるものは、第１群に３ヵ所、第２群に１ヵ所、第３群に２ヵ所検出した。ほとんどが円形および楕円形を基調とした平面形をもつ土壙で、墳墓群をとりまくような位置にある。



ＳＲ202祭祀遺構

第１墳墓群の南方約8.0ｍの地点に位置する。長径2.68ｍ、短径約0.6ｍの平面長楕円形の土壙で、深さは土壙中央部で約0.6ｍ、南側で0.5ｍを測る。また土壙南西部は西側に約0.2ｍえぐり込まれており、そこから甕形土器の口縁部片が出土した。土壙内には底より黒褐色粘質土が厚く堆積している。土壙の上部にはＳＢ208住居跡が構築され、土壙の東側も後世のＳＤ 204溝によって破壊を受けている。出土した遺物は高杯形土器、壺形土器、甕形土器、鉢形土器など多種におよぶが量は少ない。それらは土壙のほぼ中央部に整然と据えられた状態で、土壙底より0.2～0.3ｍ浮いて出土した。



ＳＲ205祭祀遺構

第１墳墓群中央部の北方に位置する。土壙の北半分は調査区外のため、完掘していないが、調査した南半分から推定すれば径約３ｍ、深さ約0.8～0.9ｍの平面円形もしくは楕円形状の大きな土壙と考えられる。土壙底中央部から丹塗りを施した甕形土器が１個体分破壊された状態で出土した。

(3)竪穴住居跡

B区のほぼ全域にわたって14軒検出した。調査区南西部に分布するものは、特に上面の削平がひどく、全体を把握することが困難であった。奈良時代に属するSB214竪穴住居跡を除けばすべて古墳時代に属するものである。住居跡の平面形態は長方形のものが多く、正方形や正方形に近い長方形のものもある。4本柱で主柱を構成するものが多い。竪穴の面積は27～29m²、20～23m²、15m²以下の3群に分かれるが、SB214竪穴住居は7.3m²と極端に小さく、住居とは別の用途も考慮すべきである。棟方向は、長辺および現存壁の方位が5°～45°東へ振れるものと35°～90°西へ振れる2群に分かれるが、4辺のうちのどちらかの壁の方位はほぼ45°以内に納まる。

SB206竪穴住居（Fig. 3. PL. 4）

南半部の西北隅に位置する。北側隅は水田によりカットされているが、全体の構造は復元できる。南東壁の長さ5.32m、南西壁の推定長5.20mの正方形に近い平面形の竪穴住居跡で、床面の

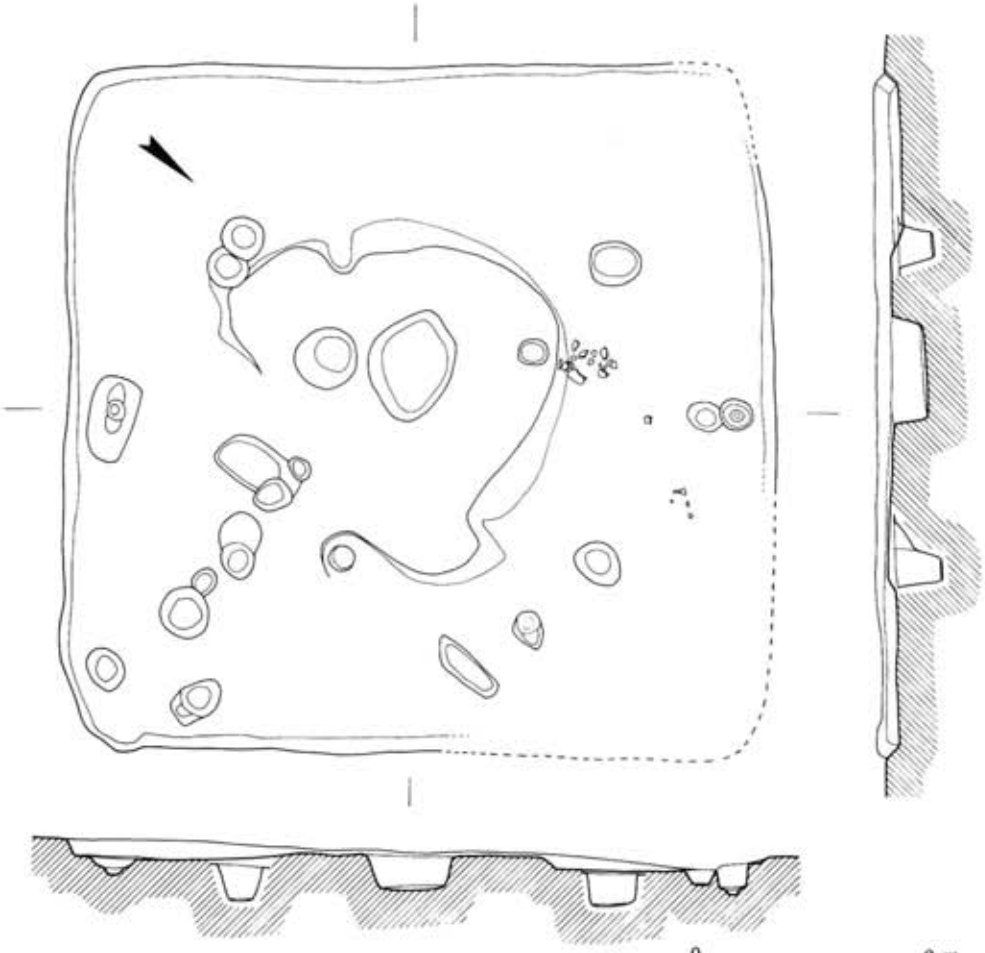


Fig 3　下中杖遺跡SB206竪穴住居跡実測図　0　2 m

深さは調査時で10～15cmであった。床面中央部に径約2.80m、高さ約15cmの円形に近い高まりの部分をもち、そのほぼ中央に90cm×70cm、深さ約30cmの楕円形の掘り込みを検出したが、内部は灰を多量に含む黒色土となっていた。主柱穴は4個検出した。いずれも径28～38cm、床面よりの深さ30～35cmで平面円形や円形に近い楕円形をなす。柱間は南東、北西側で約2.50m、南西、北東側で約2.90m。また床面の南東および北西壁近くの中央部に径約30cm、床面よりの深さ10～15cmの小柱穴が存在し、この建物の構造の一部と考えられる。推定床面積は27.7m²、長軸の方位N－W38.5°。

遺物としては中央部高まりのすぐ北西下および北部床面において、土師器杯ＡＩ、土師器高杯Ｂを出土したが、ＳＢ206竪穴住居跡上に切り込んだ部分からは土師器杯ＤＩＩa、土師器甕ＢＩＩb、土師質土器鉢などを出土した。

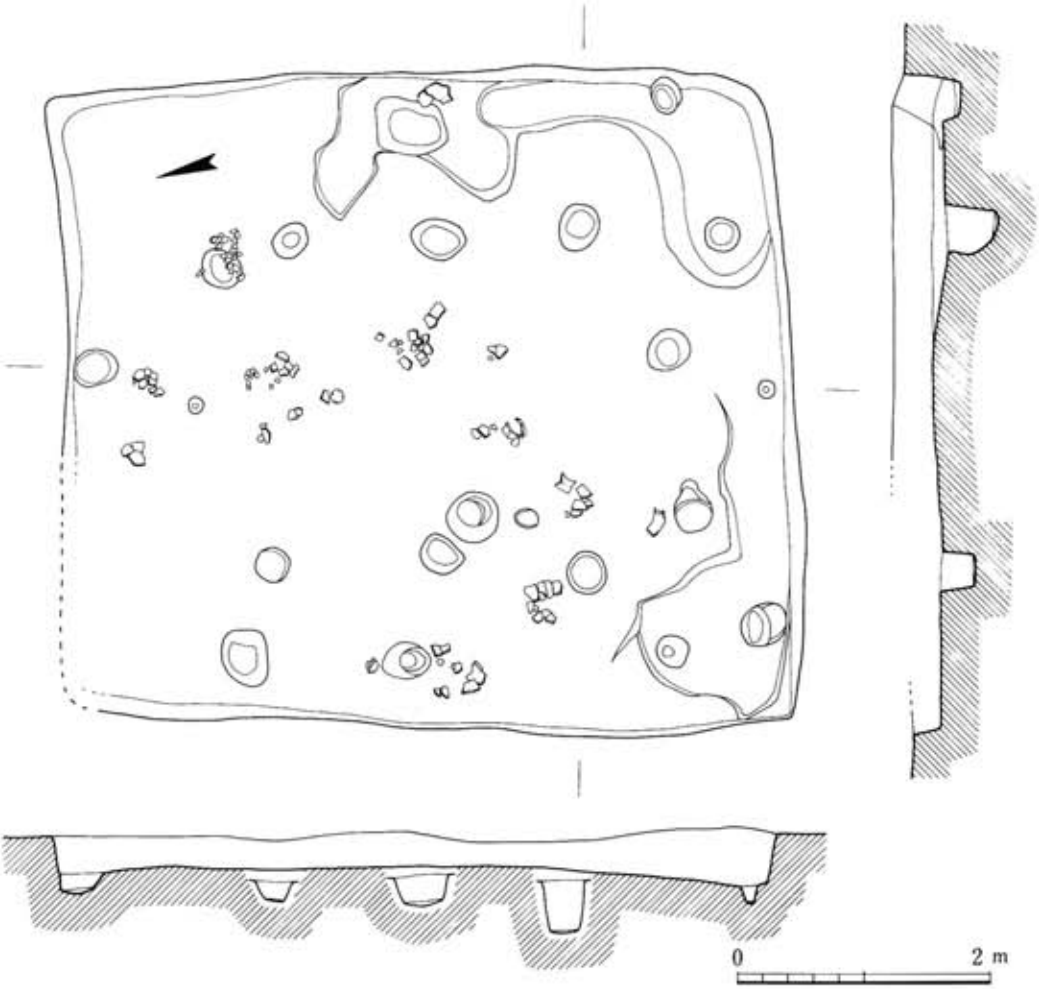


Fig 4　下中杖遺跡ＳＢ209竪穴住居跡実測図

ＳＢ209竪穴住居（Fig. 4. PL. 4）

北半部の中央南部に位置する。西北隅コーナーをＳＥ225井戸によって壊されている。東壁、南壁の長さはそれぞれ5.70m、5.00mで、西壁、北壁の長さも復元すればそれぞれ東壁、南壁長と同じと考えられる平面長方形をなす竪穴住居跡である。床面の深さは調査時で約20～40cmであるが東南隅および南部西寄りの部分には床面よりさらに約10～15cmの掘り込みがある。主柱穴は４個で径約30～40cmで平面円形や円形に近い楕円形をなすが、床面からの深さは20～45cmと一定していない。竪穴の平面形は南北に長い長方形であるが、柱穴の配置は東西に長い長方形をなし、柱間は長・短それぞれ2.65m、2.40mとなっている。推定床面積28.5m²、長軸の方位Ｎ－Ｅ13°。

遺物は床面およびやや上位に散乱するが、中央部、中央北部、西部南寄りの部分で特にまとまって多くの須恵器と土師器を出した。須恵器は杯Ａ、蓋ＡＩ$_c$、高杯Ａ$_b$、甕Ｃ$_a$で、土師器は杯ＡＩ、ＡII$_a$、ＡII$_b$、壺Ｂ、甕ＢII$_a$、手捏土器である。また混入として小杯ＡＩ$_a$がある。

Tab. 3　下中杖遺跡Ｂ区出土竪穴住居跡一覧表

遺構番号	平面形	長軸方位	規　模（m）	現存壁高（m）	面積（m²）	出　土　遺　物	備　考
SB201	長方形	N−W87°	5.02＋α×4.08	0.20	−	（土師器）杯Ａ・Ｂ・甕・壺・甑・手捏土器（砥石）	
SB202	長方形	N−E89°	5.14×3.90	0.10	20.0	（土師器）甑	
SB203	−	N−E70°	4.00＋α×4.24	0.25	−	（土師器）杯Ａ・Ｂ・甕Ａ・壺・甑・手捏土器（須恵器）蓋ＡＩ$_a$・杯ＢII・鏡	
SB204	長方形	N−W35°	6.06×4.70	0.13	28.5	（土師器）杯・甕・甑（須恵器）蓋・杯・壺・甕（砥石）	主柱４
SB205	−	N−W54°	5.60＋α×──	0.21	−		
SB206	正方形に近い長方形	N−W38.5°	5.32×5.20	0.15	27.7	（土師器）杯ＡＩ・高杯Ｂ	主柱４・中央に炉？
SB207	正方形	N−E28°	4.68×4.56	0.12	21.3		主柱４
SB208	正方形に近い長方形	N−W77°	4.71×4.43	0.20	20.9	（土師器）杯Ａ・高杯Ａ・甕Ａ・壺・甑（須恵器）高杯Ａ$_a$・鏡（砥石）（鉄刀？片）	主柱４
SB209	長方形	N−E13°	5.70×5.00	0.40	28.5	（土師器）杯ＡＩ・ＡII$_a$・ＡII$_b$・甕ＢII$_a$・壺Ｂ・手捏土器（須恵器）蓋ＡＩ$_c$・杯Ａ・高杯Ａ$_b$・甕Ｃ$_a$（砥石）	主柱４
SB210	−	N−W59°	4.60×──	0.29	−	（土師器）甕・甑	北東壁にカマド
SB211	正方形	N−E6.5°	3.30×3.26	0.28	10.8	（土師器）杯Ａ・甕（須恵器）杯Ｃ	
SB212	長方形	N−E43°	4.32×3.54	0.28	15.3	（土師器）杯Ａ・甕・甑	
SB213	−	N−W81°	5.36×──	0.13	−	（土師器）杯Ａ・Ｂ・甕ＢIII$_b$・壺	
SB214	長方形	N−E９°	3.06×2.40	0.21	7.3	（土師器）杯・甕（須恵器）杯・（鉄刀子?片）	

(4)掘立柱建物跡

調査区南半部で21棟、北半部で12棟検出した。しかし夥しい数の柱穴群は上記の33棟以上の掘立柱建物の存在を物語っている。規模別には１間×１間……10棟、２間×１間……15棟、２間×２間……３棟、３間×１間……１棟、３間×２間……２棟、不明……２棟である。これらのうち２間×２間の２棟はいずれも総柱で倉庫と考えられる。また庇がつく建物が２棟ある。

ＳＢ219建物は２間×１間の身舎に南庇がつき、ＳＢ222建物は３間×２間の身舎に隅欠きの２面疵（東と南）がつく。柱間はＳＢ244建物の4.5ｍを除くと1.05～2.7ｍの間であり、1.35～2.55ｍの間が最も用いられている。面積は１間×１間のものが1.8～6.1㎡で、２間×１間のものは3.5～12.2㎡であるが９㎡前後に集中する。倉庫と考えられる２棟はいずれも9.7㎡である。規模の大きな建物としては72㎡のＳＢ222建物、28.4㎡のＳＢ225建物、26㎡のＳＢ220建物があげられ、遺跡の中で中心的な建物となる。次に棟方向について述べると、すべてが東西棟か南北棟であり、それぞれの正確な方位は前者がＮ－Ｅ84°～Ｎ－Ｗ70°、後者がＮ－Ｗ0.5°～Ｎ－Ｅ16°である。

柱穴内からの遺物の出土はきわめて少量かつ小片であったが、それらの検討により時期の上限がある程度判明した。平安時代の建物としてはＳＢ222・227・234建物が、鎌倉時代の建物としてＳＢ225・226・228建物があり、室町時代の建物としてはＳＢ223建物が考えられる。これら時期がほぼ明らかな建物について棟方向をみると、平安時代のものはすべて東西棟で、鎌倉・室町時代のものはほとんど南北棟となっていることは注意をひく。

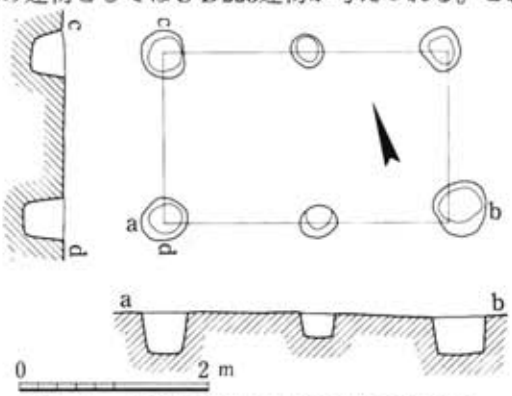


Fig 5　下中杖遺跡ＳＢ227建物跡実測図

ＳＢ227建物（Fig. 5）

調査区最北部西寄りに位置する。２間×１間の東西棟建物である。桁行2.10ｍ、柱間は1.05ｍの等間隔である。梁行1.65ｍ。６個の柱穴のうち四隅の４個が規模が大きく径46～56㎝、深さ28～44㎝となっているのに対して、中間の柱穴２個は径約35㎝、深さ18～26㎝と小規模になっている。棟方向はＮ－Ｗ75°。

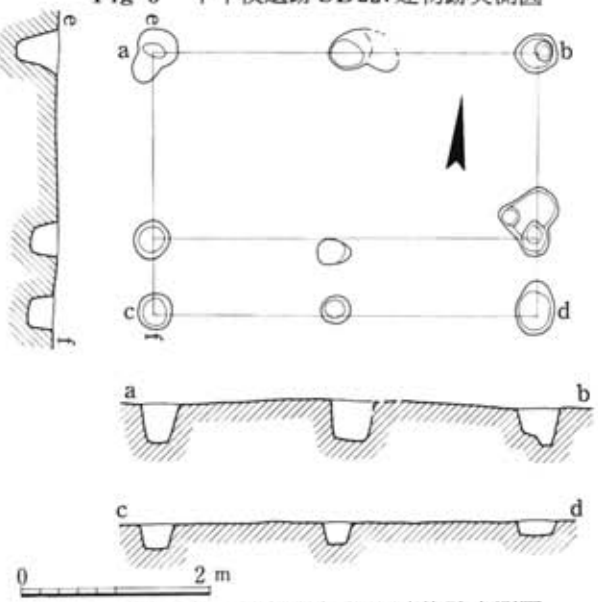


Fig 6　下中杖遺跡219建物跡実測図

ＳＢ219建物（Fig. 6）

調査区南半部北西寄りに位置する。身舎の規模が２間×１間、南庇つきの東西棟建物である。身舎の桁行3.90ｍ、柱間は等間隔、梁行1.95ｍ、庇0.75ｍとなっている。柱穴は９個で、径約40㎝、深さ約30～40㎝と小規模なものであるが、南側通り中間柱穴と庇中間柱

穴は径約30cmとさらに小さくなっている。棟方向はN－E84°。

ＳＢ226建物（Fig. 7）

調査区北半部中央西寄りに位置する。２間×２間、９個の総柱からなる倉庫と考えられる建物である。規模は3.60ｍ×2.70ｍと南北方向に長いが、南北側通り柱間1.95ｍ、1.65ｍと等間隔にならない。柱穴は径約50～55cm、深さ45～75cmとやや規模が大きい。柱痕が確認できるものがいくつかあったが、その径は14～18cmとなっている。棟方向はN－E14°。

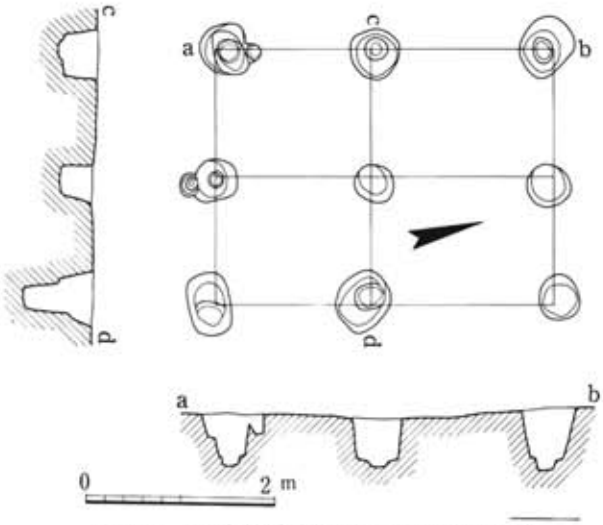


Fig 7　下中杖遺跡ＳＢ226建物跡実測図

ＳＢ225建物（Fig. 8）

調査区北半部中央西寄り、ＳＢ226建物と重複する建物である。３間×２間の南北棟建物で、規模は桁行6.75ｍ、梁行4.20ｍで柱間はすべて等間隔となっている。柱穴は径45～65cm、深さ約70cmのものがほとんどだが、南側中間梁柱は径36cm、深さ30cmと小規模である。柱痕が確認できる柱穴がいくつかあり、その径は12～14cmとなっている。棟方向はN－E15.5°。

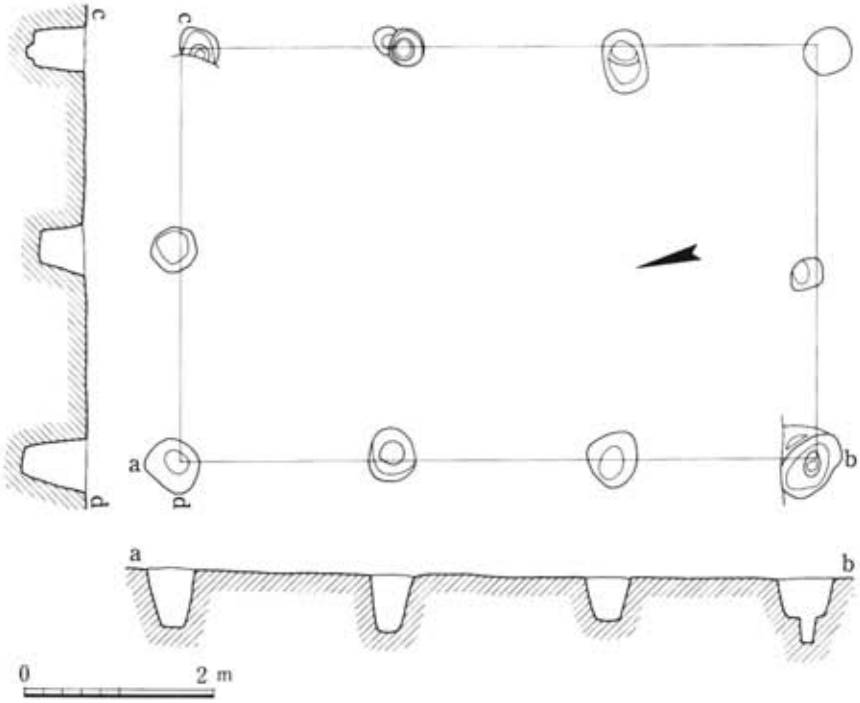


Fig 8　下中杖遺跡ＳＢ225建物跡実測図

ＳＢ222建物（Fig. 9）

調査区北半部の南西部に位置する。身舎の規模が３間×２間、南と北側に庇をもつ東西棟建

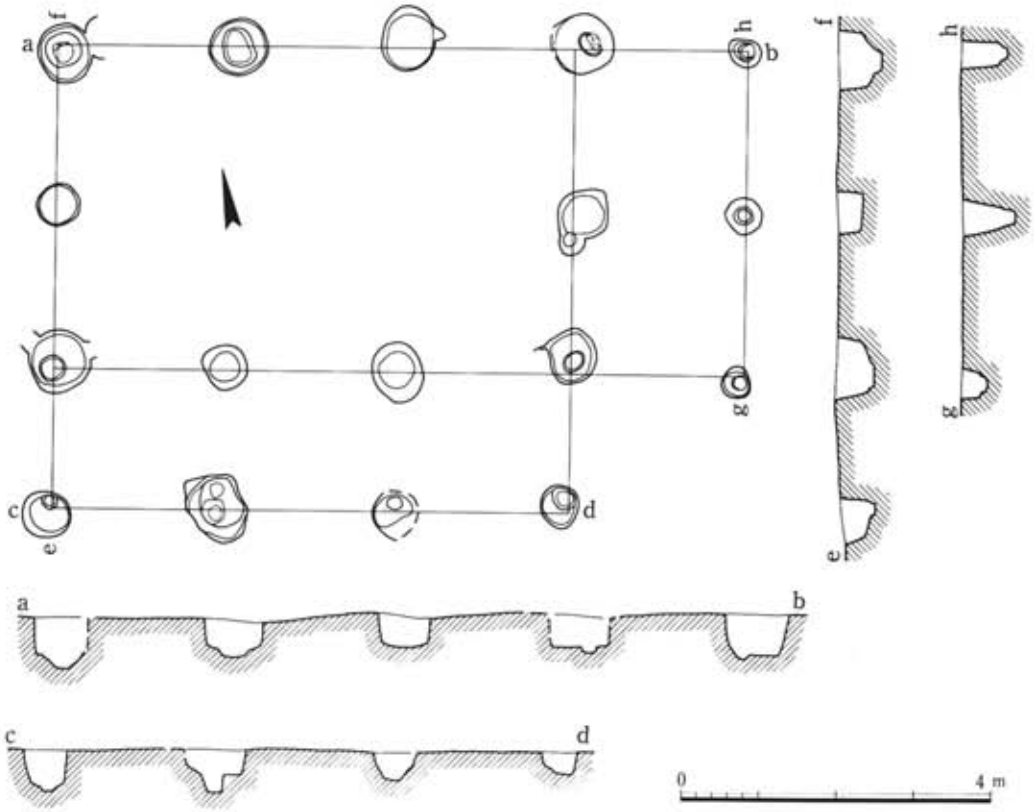


Fig 9　下中杖遺跡SB222建物跡実測図

物である。身舎の桁行6.75m、梁行4.20m、それぞれの柱間は等間隔となっている。東庇と南庇の幅はそれぞれ2.25m、1.80mとなっている。身舎を構成する柱穴は径55～80cm、深さ45～75cmと大規模なものとなっているが、庇の柱穴は南庇のものが径約60cm、東庇のものが径約40cmと小規模になっている。柱痕が確認できるものがいくつかあり、その径は16～22cmとなっている。棟方向N－W79.5°。

Tab. 4　下中杖遺跡B区出土掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規模 桁行×梁行（間）	柱間(m) 桁行	柱間(m) 梁行	総面積(m²)	備考
SB215	N－E90°	1×1	2.55	2.40	6.1	
SB216	N－W80°	2×1	2.25	1.80	8.1	
SB217	N－W71°	3×1	2.10	1.35	8.5	
SB218	N－W0.5°	2×2	1.80	1.35	9.7	総柱
SB219	N－E84°	2×1	1.95	1.95	10.5	南庇0.75m
SB220	N－W85°	2×2	2.55	2.55	26.0	
SB221	N－W84°	2×1	2.10	2.25	9.5	

SB222	N−W79.5°	3×2	2.25	2.10	72.0	隅欠き二面庇 南庇1.80m、東庇2.25m
SB223	N−E11°	2×1	2.40+1.65	2.40	9.7	
SB224	N−W82°	2×1	2.10	1.95	8.2	
SB225	N−E15.5°	3×2	2.25	2.10	28.4	
SB226	N−E14°	2×2	1.95+1.65	1.35	9.7	総柱
SB227	N−W75°	2×1	1.05	1.65	3.5	
SB228	N−W84°	1×1	2.25	1.95	4.4	
SB229	N−E8°	2×1	2.70	2.25	12.2	
SB230	N−W78°	1×1	1.95	1.35	2.6	
SB231	N−E16°	2×1	2.40	1.65	7.9	
SB232	N−E3°	2×1	2.40+2.10	2.10	9.5	
SB233	N−E84°	2×1	1.95	1.50	5.9	
SB234	N−W83°	1×1	1.65	1.65	2.7	
SB235	N−E88°	1×1	1.35	1.35	1.8	
SB236	N−E2°	1×1	2.40	1.95	4.7	
SB237	N−E89.5°	2×1	2.55+1.80	1.50	6.5	
SB238	N−W87°	1×1	1.80	1.80	3.2	
SB239	N−E7.5°	1×1	1.50	1.35	2.0	
SB240	N−E90°	1×1	1.80	1.20	2.2	
SB241	N−E7°	1×1	2.55	2.40	6.1	
SB242	N−E90°	2×1	2.10	1.95	8.2	
SB243	N−W82°	2×1	1.95	2.25	8.8	
SB244	N−W89°	(5+α)×1	2.70	4.50	60.8+α	
SB245	N−W70°	1×1	1.95	1.95	3.8	
SB246	N−E11°	2×1	2.25	2.55	11.5	
SB247	N−E14°	3×−	1.95	−	−	

(5)井戸跡

調査区の面積のわりに、井戸跡は35ヵ所と多い。このことは集落が古墳時代から中世にかけて長期にわたって存続された結果である。平面はほとんどが円形を基調とする形態であり、断面形は一段掘りと二段掘りに大別できるが、中には三段掘りのものも存在する。なお井戸枠が遺存するものはなく、枠に使用された木材すら出土しなかった。

SE201井戸 (Fig. 10. PL. 5)

調査区最南端に位置する。二段掘りに近い素掘りの井戸で、平面は円形で径2.4〜2.5m、深さ1.16m。一段目の壁は傾斜しているが二段目はやや立上がっている。さらに底面中央南西寄りの部分に浅いくぼみがある。このくぼみの内部および周辺に20cm大の河原石3個が存在する。

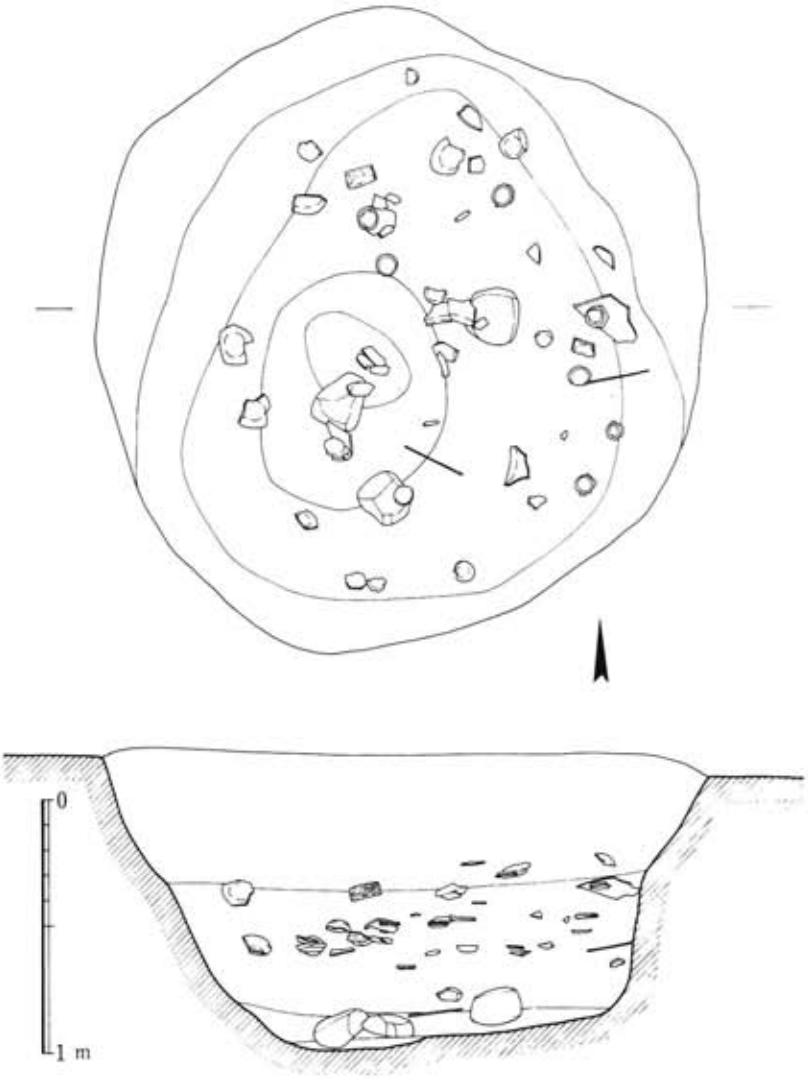


Fig 10　下中杖遺跡SE201井戸跡実測図

遺物は中位の深さの部分から全面にひろがった状態で出土した。土師器杯CI$_a$、CI$_b$、CII、DI、DII$_b$、DIII、甕BIII$_a$、脚付皿、黒色土器杯AII$_b$、須恵器甕、青磁碗A$_a$、B、C、青磁皿A、C、水注、白磁碗A$_a$、緑釉陶器片、木炭片、青銅製箸、土錘などである。

SE202井戸

(Fig. 11. PL. 5)

調査区南部ほぼ中央に位置する。素掘りの一段掘りの井戸で、上面の平面形は円形で径1.50～1.64m、深さは1.58mで壁はほぼ垂直に掘られている。底部はほぼ平面になっている。埋土はレンズ状に堆積する。

遺物の出土量は多く、上位から底面全体にわたって分布しているが特に下位に集中して出土した。土師器には杯CI$_a$、CI$_b$、CI$_c$、CIII、DII$_a$、DII$_b$、甕BI$_b$、BII$_b$、BII$_c$、BIII$_a$、BIII$_b$、脚付皿、黒色土器には碗AII$_b$、B$_a$、土師器杯CI$_b$、CI$_c$と同形態のA類の杯がある。須恵器には甕C$_b$、陶磁器には水注と考えられる青磁片、白磁碗A$_b$、壺と考えられる緑釉陶器がある。木製品として馬鞍（前輪）、砧、糸車などを出土し、また2～3才の牛の指骨10以上、胸椎片1、1～2才の鹿の指骨3以上、脛骨・焼骨片それぞれ1、肩甲骨片2などを出土した。

SE215井戸（Fig. 12. PL. 5）

調査区南半部ほぼ中央に位置する。SB207竪穴住居跡に切り込んで掘られている。素掘りの

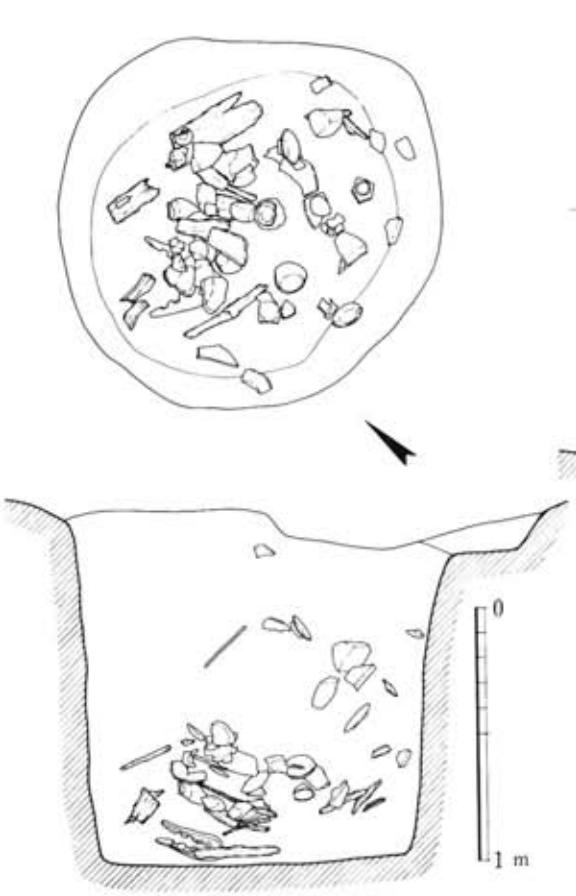


Fig 11　下中杖遺跡SE202井戸跡実測図

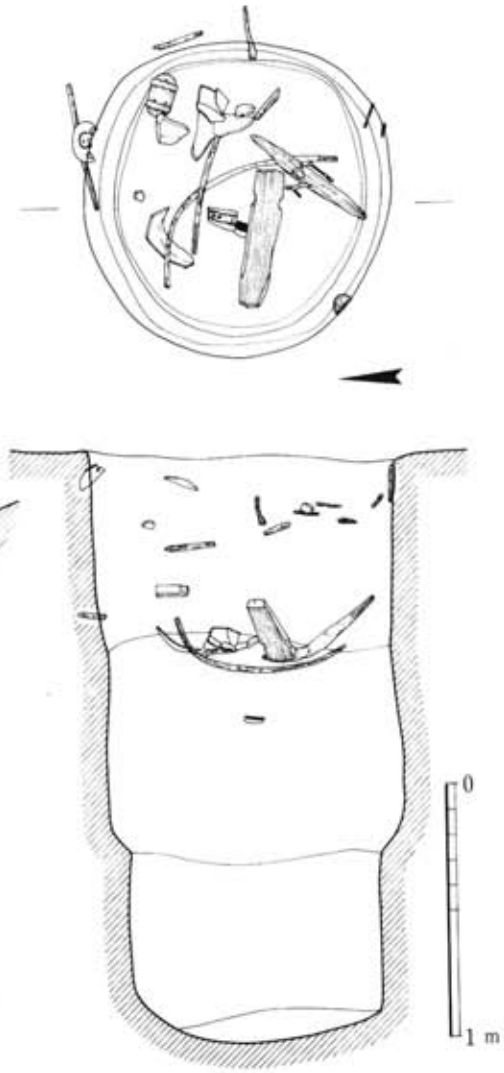


Fig 12　下中杖遺跡SE215井戸跡実測図

二段掘りの井戸で、平面は円形で径1.20m、底面までの深さ2.43mと径のわりには壁は垂直に深く掘り込んでいる。二段目は径1.00m、深さ0.80m。

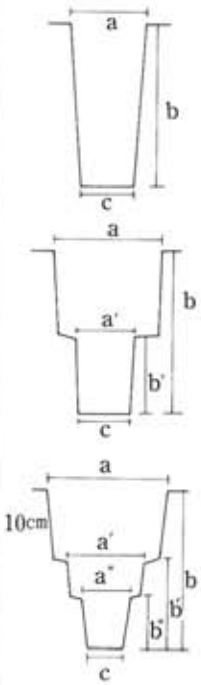
遺物は主に一段目の下位、二段目の上半位に集中して出土した。上部からは漆器椀、手桶の底、多くの木片、下部からは加工を加えた木製品、下駄、櫛、土師質の火舎、陶器碗などを出土した。

ＳＥ228井戸（Fig. 13. PL. 5）

調査区北半部西北隅に位置する。素掘りの二段掘りの井戸で、平面形は円形に近い楕円形で長径1.63m、短径1.40m、深さ1.19m。一段目、二段目とも壁は斜めに掘られており、二段目は長径1.00m、深さ0.45m掘り込まれている。

遺物は二段目の掘り込みの中から、土師器を出土した。杯ＡⅡ$_a$、ＡⅡ$_b$、ＡⅡ$_c$、甕ＡⅠ$_c$、ＡⅡ$_b$などである。

Tab. 5　下中杖遺跡B区
出土井戸跡一覧表

遺構番号	法　量（m）
平面形態 掘り方	

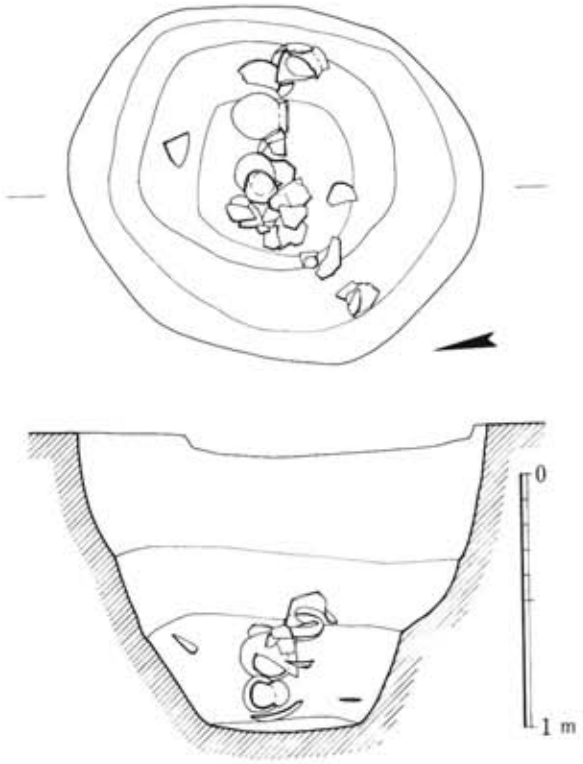


Fig13　下中杖遺跡ＳＥ228井戸跡実測図

遺構番号	法　量（m）	断面図(1/200)	出　土　遺　物
SE 201 円　形 二段掘	a 2.40 b 1.20 a' 1.80～2.10 b' 0.64 c 1.30		(土師器)杯CⅠa・CⅠb・CⅡ・碗AⅠ・AⅢ・甕 甕BⅢa・脚付皿 (里色土器)碗AⅡa (須恵器)甕 (陶磁器)青磁碗Aa・B・C 青磁皿A・C・水注 白磁碗Aa・緑釉水注 (青銅製箸)(土錘)
SE 202 円　形 一段掘	a 1.50～1.64 b 1.58 c 1.10～1.34		(土師器)杯CⅠa・CⅠb・CⅠc・CⅢ・碗AⅠ・ AⅡa・AⅡb・甕BⅠb・BⅡb・BⅡc・BⅢa・BⅢb (黒色土器)碗AⅠ・AⅡb・Ba (須恵器)甕Cb・皿Ac (陶磁器)青磁水注・白磁碗Ab・緑釉水注？ (木製品)馬鞍・砧・糸巻 (獣骨)
SE 203 楕円形 二段掘	a 1.56～1.82 b 2.68 a' 1.05～1.07 b' 0.97 c 0.94		
SE 204 楕円形 二段掘	a 2.54～3.12 b 3.14 a' 1.32～1.62 b' 1.30 c 1.16～1.40		(土師器)小杯AⅡc (陶器)

SE 205 円　形 一段掘	a 1.05～1.15 b 2.55 c 0.76		
SE 206 円　形 二段掘	a 1.70 b 1.38 a′ 1.10 b′ 0.77 c 0.63～0.74		(土師器)杯・甕BⅣ・小皿A (陶磁器)青磁碗A_b
SE 207 楕円形 二段掘	a 1.22～1.43 b 1.67 a′ 0.98～1.15 b′ 0.95 c 0.70～0.92		(土師器)杯・高杯・甕 (須恵器)蓋・甕C_b
SE 208 楕円形 一段掘？	a 1.35～1.60 b 2.75 c 0.57		(陶磁器)青磁碗G (土師質土器)羽釜
SE 209 円　形 二段掘	a 1.00 b 1.25 a′ 0.45 b′ 0.10 c 0.37		
SE 210 楕円形 二段掘	a 1.40～1.60 b 1.35 a′ 0.78～0.85 b′ 0.61 c 0.50		(土師器)杯CI_c・碗DII_a・甕 (黒色土器)碗A
SE 211 楕円形 二段掘	a 2.25～2.52 b 1.76 a′ 1.15～1.57 b′ 0.49 c 0.83～1.58		(土師器)杯CI_e・甕 (陶磁器)白磁碗BⅠ
SE 212 楕円形 二段掘	a 1.50～1.75 b 1.80 a′ 1.05 b′ 0.60 c 1.00		(土師器)甕BⅣ (黒色土器)碗B_b
SE 213 楕円形 二段掘	a 1.00～1.26 b 1.31 a′ 0.87 b′ 0.28 c 0.74		(土師器)杯A・高杯・甕 (須恵器)蓋C
SE 214 円　形 二段掘	a 1.25～1.33 b 1.30 a′ 1.04 b′ 0.43 c 0.93		
SE 215 円　形 二段掘	a 1.20 b 2.43 a′ 1.00 b′ 0.80 c 0.98		(土師質土器)火舎 (陶器)碗 (木製品)漆器碗・下駄・櫛・曲げ物底など
SE 216 円　形 二段掘	a 2.00 b 2.38 a′ 1.12～1.26 b′ 1.24 c 0.90～1.08		(土師器)杯・小杯AI_c・AII_a (土師質土器)鉢・火舎

SE 217 円　形 一段掘	a　1.20～1.30 b　2.03 c　0.70		(土師器) (須恵器)杯・蓋
SE 218 円　形 二段掘	a　1.10～1.23 b　1.55 a'　0.75～0.90 b'　1.07 c　0.63～0.69		(土師質土器)鉢
SE 219 円　形 二段掘	a　2.00 b　2.55 a'　0.95 b'　1.61 c　0.65		
SE 220 二段掘	a　(2.00) b　2.10 a'　1.10～1.23 b'　0.98 c　0.56		(土師質土器)鉢
SE 221 楕円形 二段掘	a　1.83～2.40 b　1.78 a'　1.40 b'　0.74 c　1.00		
SE 222 円　形 一段掘	a　1.30 b　2.70 c　1.15		(木製品)漆器碗・鍬状木器など
SE 223 楕円形 三段掘	a　2.00～2.33 b　1.82 a'　1.60～1.70 b'　0.64 a"　0.95～1.03 b"　0.71 c　0.62～0.71		(青磁)碗F
SE 224 円　形 二段掘	a　1.20 b　2.87 a'　0.96 b'　1.50 c　0.84		
SE 225 楕円形 二段掘	a　1.73～1.92 b　2.25 a'　1.30 b'　1.35 c　0.85～0.96		

SE 226 円　形 二段掘	a 2.40～2.55 b 2.55 a′ 1.20 b′ 1.33 c 1.03		(土師器)杯・碗D II$_b$・甕 (須恵器)壺？
SE 227 円形？ 二段掘	a 1.40 b 1.23 a′ 0.61 b′ 0.34 c 0.36		
SE 228 楕円形 二段掘	a 1.40～1.63 b 1.22 a′ 0.87～1.00 b′ 0.45 c 0.62		(土師器)杯・甕
SE 229 円　形 一段掘	a 1.00～1.04 b 1.12 c 0.57～0.68		(土師器)杯・甕
SE 230 楕円形 一段掘	a 1.10～1.46 b 2.34 c 0.35		(土師器)小杯A I$_b$ (土師質土器)鉢・火舎 (木製品)
SE 231 円形？ 二段掘	a 1.94 b 1.57 a′ 0.88～1.14 b′ 0.41 c 0.84～1.06		(瓦器)碗A III
SE 232 楕円形 二段掘	a 1.14～1.32 b 2.41 a′ 0.84～1.00 b′ 1.52 c 0.80～0.96		
SE 233 楕円形 一段掘？	a 0.84～1.04 b 1.90 c 0.54		
SE 234 円形に近い楕円形 一段掘	a 1.82～2.08 b 0.79 c 1.40～1.68		
SE 235 楕円形 一段掘	a 2.00～2.48 b 1.10 c 1.80～2.34		

(6)土壙

調査区全域にわたって分布する。不整形な平面形態のものがほとんどだが、円形に近いもの、長方形に近いものも存在する。古墳時代から中世にわたるものである。長方形で深いものは後に述べるＳＰ218土壙墓の形態に類似しており、中世の土壙墓である可能性もある。

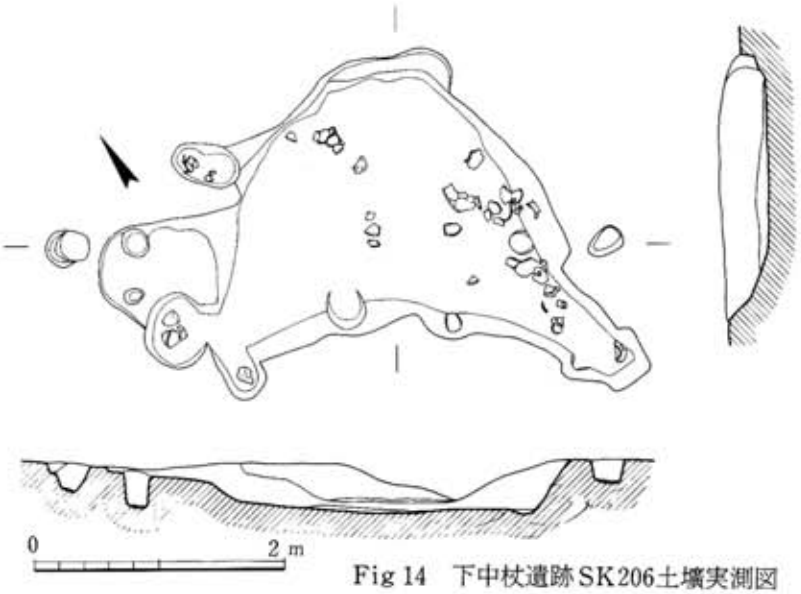


Fig 14　下中杖遺跡SK206土壙実測図

ＳＫ206土壙（Fig. 14）

調査区南部ほぼ中央に位置する。長辺4.40ｍ、高さ2.0ｍの平面二等辺三角形に近い不整形な土壙である。側壁は内側へゆるやかに傾斜し、底面は平坦になっており、調査時での深さ約40cm。

遺物は底面についたものはなく、すべて５～10cm浮いた状態で出土した。須恵器と土師器である。須恵器には蓋ＤＩ$_a$、ＤＩ$_b$、皿Ａ$_b$、Ｂ$_a$、Ｂ$_b$、壺Ｂがあり、土師器としては甑が出土した。

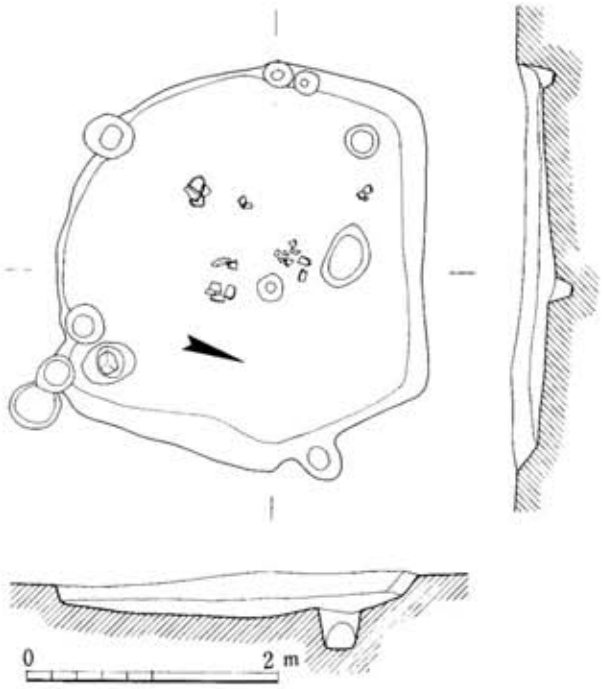


Fig 15　下中杖遺跡SK227土壙実測図

ＳＫ227土壙（Fig. 15）

調査区南部中央、ＳＫ206土壙のすぐ西北方に位置する。北側の壁は直線になっているが、全体として円形に近い平面形をなす土壙である。東西径3.25m、南北径2.90m、深さ約0.35m。壁は内側へゆるやかに傾斜し底面になるが、底面は中央部が深くなり平面にはならない。

遺物は中央部に集中して出土したが、底面にはついておらず10～15cm浮いた状況であった。須恵器には蓋ＤＩ$_a$、杯ＥＩ、ＥII$_a$、高杯、皿Ａ$_b$、壺C、甕などがあり、土師器には杯ＡＩ、ＡII$_a$、甕ＢIII$_b$、甑などがある。

(7)溝跡（ＰＬ．６）

調査区全域で27条の溝・溝状遺構を検出した。

調査区南半部の東側に沿って幅を広げながら南北に延びるＳＤ201溝は最大規模のもので調査時での長さ44m、北端は現在の墓地下に没しているが、幅2.7m、深さ0.78m、南端部は西側へ幅を増し、幅7.3m、深さ0.82mとなっており、その断面形は傾斜をもつ壁から底面は平らになる。溝内部からは青磁皿Ｂ、陶器茶碗、土師器杯、須恵器鉢、土師質土器鉢などを出土した。

調査区南端に位置するＳＤ228溝はＳＤ203溝と連続するもので調査時での長さ９ｍ。両溝ともに底は西方に寄るに従って深みを増す。幅2.5m、深さ1.17mで、ＳＤ203溝から水が落ちる部分の底面には12～25cm大の河原石が約15個敷かれている。壁は傾斜をもって掘られ底面は狭い平面となっている。河原石に混じって石臼片、西寄りの部分から須恵器の杯ＢＩ、甕C$_b$などを出土した。

ＳＤ204溝は調査区南半部ほぼ中央を東西方向に走り、その東端で直角に北方へ屈曲する。南東コーナーから北方へ19m、西方へ21m、東西方向溝のほぼ中央に幅0.7mの陸橋があり、さらに西方へ17m続き調査区外に消滅している。幅0.6～1.30m、深さ0.54～0.75mで、断面Ｕ字形をなすが、底が平面となる部分もある。溝内からは土師器杯、土師質の鉢、須恵器壺、甕、土師質の火舎、石臼などを出土した。

ＳＤ227溝とＳＤ226、ＳＤ223溝は同時に営まれたものである。ＳＤ227溝はほぼ東西方向で、東にゆくに従って幅を増す。長さ12mで東方で墓地下に没する。東端での幅2.0m、深さ1.18m、西端での幅0.6m、深さ0.56mである。溝内からは青磁碗ＦＩ、ＦII、皿Ｄ、白磁皿Ａ、Ｂ、土師器杯、銅銭６枚などを出土した。銅銭は洪武通寶５、世高通寶１枚である。ＳＤ226溝はＳＤ227溝の西端やや東寄りの部分から北方へ約５ｍの長さで、幅0.6～0.9m、深さ0.3～0.35mと規模は小さい。ＳＤ226溝の北端の東側より北方へ4.5m延び、東方へ垂直に向きを変えて10.5ｍ続き、墓地下に没するSD226溝と幅、深さともに同規模である。これら三条の溝で、内部のＳＢ231建物などの建物群を囲むものと考えられる。

(8)その他の遺構

上記各遺構の他に柵状の遺構、土壙墓などが存在する。

柵状のものは調査区北半部において南北方向のもの（ＳＡ201、ＳＡ202）と東西方向のもの（ＳＡ203）の３列を検出した。ＳＡ201柵は北半部ほぼ中央に位置し4個の柱穴よりなり、総長は6.75m。柱間は2.25mの等間隔である。方向はN—W７°。ＳＡ202柵は調査区最北端に位置する６個の柱穴よりなる柵で、柱間は2.40mの等間隔で総長12.00mとなる。方向はN—W78°。ＳＡ203柵は北半部南部中央に位置する３個の柱穴よりなる柵で、柱間は2.55mの等間隔で総長5.10mとなる。方向N－E13°。

調査区北半部中央西寄りに位置するＳＰ218土壙墓（Fig. 16. PL. 6）からは多数の銅銭を出土した。壙は東西方向に長い平面長方形で、側辺の長さ1.40m、小口の長さは西側で0.83m、東側で0.88m、深さは0.34m。南と西の壁は垂直であるが北と東は傾斜をつけて掘られている。床は平面をなす。主軸の方向はN－W89°。南東部床面から銅銭が出土したが、うちわけは洪武通寶28、永楽通寶４、宣徳通寶１、大中通寶１、朝鮮通寶１、世高通寶１の計36枚である。

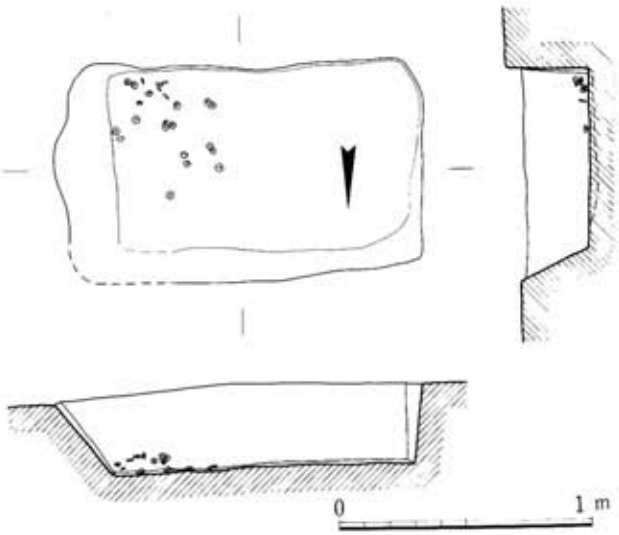


Fig 16　下中杖遺跡ＳＰ218土壙墓実測図

２、遺物

Ｂ区より出土した遺物は土器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品などである。遺構別にみると井戸、竪穴住居跡、土壙、溝の順で出土量が多い。土器は弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質土器、瓦質土器などがあり、陶磁器としては青磁、白磁、褐釉陶器などの輸入陶磁器、緑釉陶器、唐津焼などの国産陶磁器がある。土器、陶磁器の出土量はＢ区以外の特にＦ・Ｃ・Ｈ区において多いが、整理作業の都合で、一部分を紹介するにとどめ、Ｂ区出土のものを中心に述べる。

(1)　埋葬に用いられた土器（Fig.17. 18 PL.9）

検出した12基の甕棺墓はすべて合せ口の複式棺墓である。棺に用いられた土器は、消失した１基を除いて総数22個体分出土した。そのうち、壺形土器が１個体のみあり、そのほかはすべて甕形土器である。

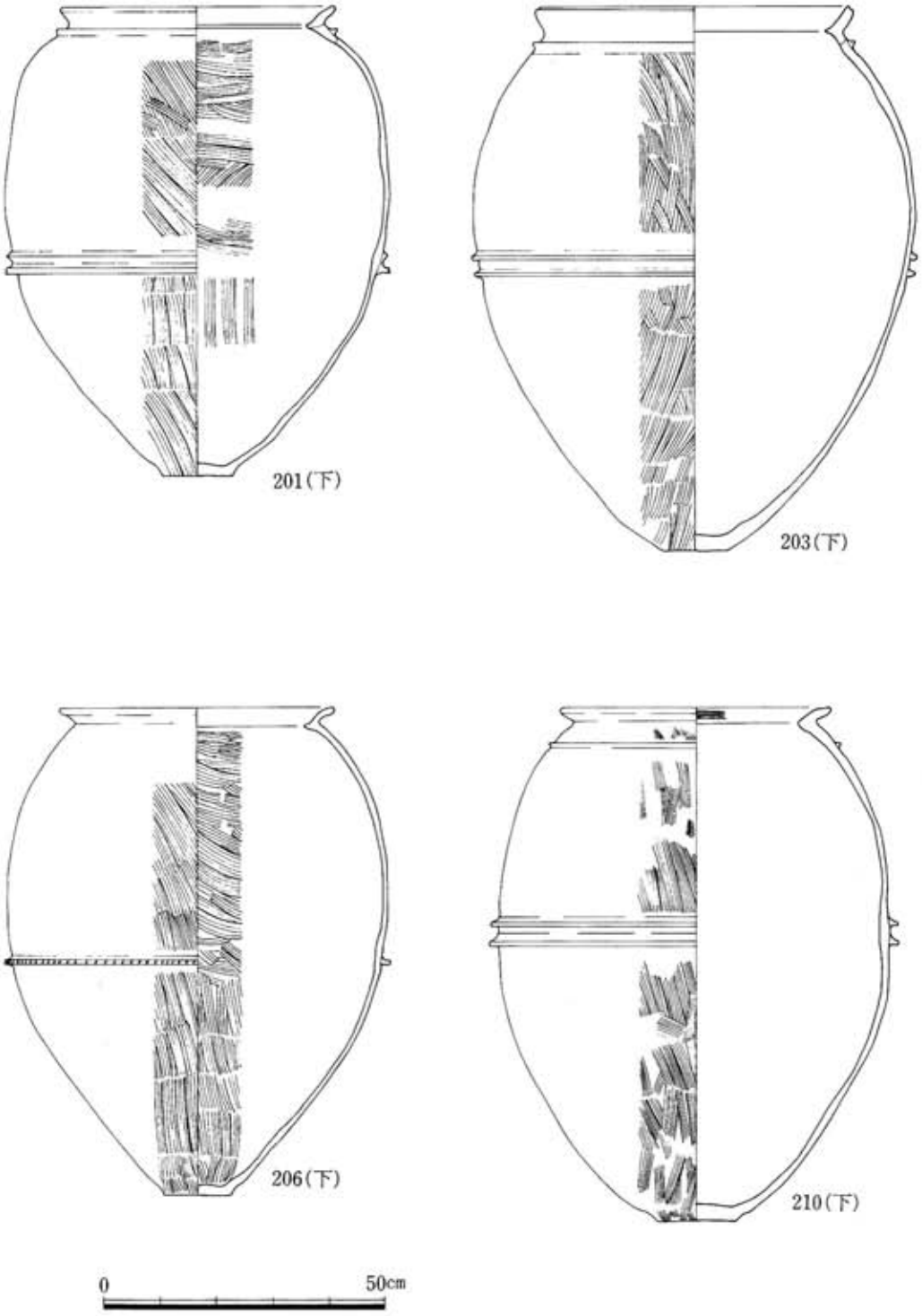


Fig 17　下中杖遺跡B区出土甕棺実測図　(1)

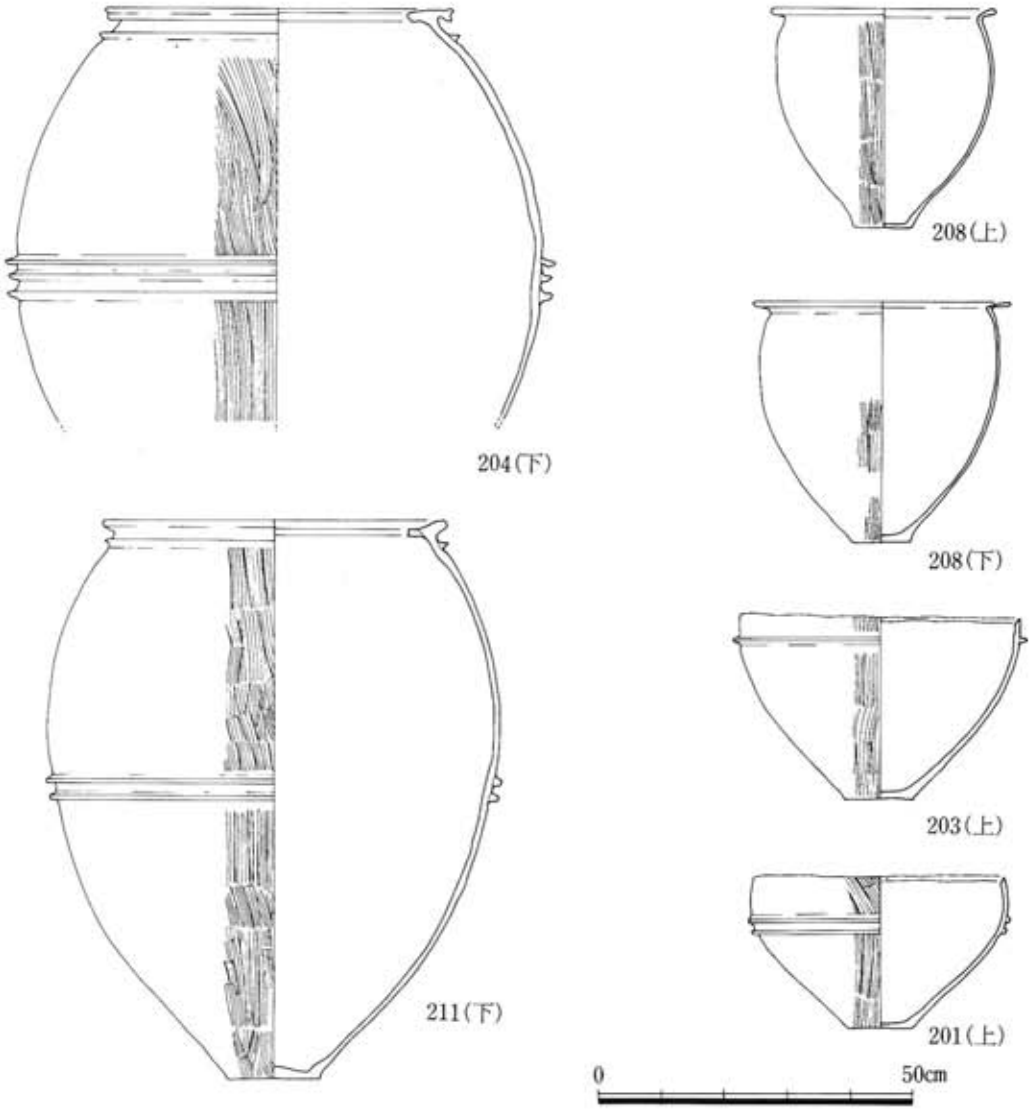


Fig 18　下中杖遺跡B区出土甕棺実測図(2)

甕形土器のなかで大型の主なものは6個体ある。そのうち、ＳＪ204下甕、ＳＪ211下甕は幅広いＴ字形口縁をもち、口縁部下には断面三角形の突帯をめぐらす。器体胴部の突帯は、ＳＪ211下甕が断面コ字形のものを2条、ＳＪ204下甕が断面鍔状のものを3条と、いずれも頑丈で安定感のある器体である。器面の調整はハケ目を施す。ＳＪ201、ＳＪ203、ＳＪ206、ＳＪ210の各下甕はいずれも胴の張る卵形の器体である。口縁部は逆Ｌ字形をなし、内側へも鋭く突出する。口縁部下に断面三角形突帯を0～2条、器体中位および下位に断面コ字形突帯を1～2条めぐらす。特例としてＳＪ201下甕の胴部突帯は、2条のうち上位のものが断面三角形である。

底部は厚い平底である。器面は外面のみ、もしくは内外面ともハケ目調整を行う。ＳＪ203上甕は中型のもので器体胴部の断面コ字形突帯より上部を打ち欠いている。器面はハケ目調整。小児棺に使用された土器は、ＳＪ208に代表されるように上下ともほとんど同形の甕形のものである。逆Ｌ字形口縁をもついちじく形の器体をなす。ＳＪ202、ＳＪ212の棺もＳＪ208のものとほぼ同形である。ＳＪ201甕棺墓から１個体出土した壺形土器は口頸部を打ち欠いて甕棺に使用したものと考えられる。丸味をもつ器体は上位で内傾する。器体最大径部に２条の断面コ字形突帯をめぐらす。底部は径の大きい平底である。器高24.0cm、上位突帯部径41.5cm。

(2)土壙墓、祭祀遺構出土の土器（Fig. 19 PL. 10）

ＳＰ204土壙墓からは高杯の口縁部片が出土し、古墳時代の１ヵ所を含む６ヵ所の祭祀遺構からは、いくらかの土器が出土した。

ＳＰ204土壙墓出土の土器（８）

高杯の口縁部である。ヨコナデ調整の後内外面に丹塗りを施す。胎土は茶褐色で多くの砂粒を含む。復元口外径30.0cm。

ＳＲ201遺構出土の土器（17）

小型の甕形土器で底部を欠失する。いちじく形の器体に外側への突出の強いＴ字形口縁がつくが、口縁端部は下方へやや垂れ下がっている。口縁部下に１条、胴部に２条の断面複合山形突帯をめぐらす。口縁部、突帯部はヨコナデ、外面はナデて平滑に仕上げ、口縁部上面から器体外面にかけて丹を塗っている。胎土は赤褐色で砂粒を少量含む。現在高25.0cm、口縁外径37.8cm。

ＳＲ202遺構出土の土器（７、９、12、16）

高杯形土器１、壺形土器１、鉢形土器１、甕形土器１が出土した。

９の杯部は外側へ強く突出する平坦口縁をもち、口縁部下に断面三角形突帯を１条めぐらす、比較的浅いものである。脚下半部を欠失する。口縁部、突帯部はヨコナデ、杯部内外面ともナデ、脚部外面はヘラミガキを施す。胎土は茶褐色で小砂粒を含む。杯部内外面、脚部は丹塗りである。現在高13.4cm、口縁外径29.0cm。12は胴下半部を欠失する。胴の張る器体に短く外反する口縁部がつく。口縁部から肩部にかけてヨコナデ、胴部外面はハケ目調整、内面はナデ調整を行う。胎土は茶褐色で多くの砂粒を含む。口縁外径18.4cm、胴部最大径30.4cm。７は碗形の器体に平底がつく。口縁部はヨコナデ、器体内外面は縦方向のハケ目調整を行う。胎土は茶褐色で多くの砂粒を含む。器高9.3cm、口縁径18.8cm。16はく字状口縁をもつ大型甕で、肩部以下を打ち欠いている。口縁部直下には断面三角形突帯を１条めぐらす。口縁部、突帯部はヨコナデ、体部内外面はナデ調整である。胎土は茶褐色で多くの砂粒を含む。口縁外径33.6cm。

ＳＲ203遺構出土の土器（６、13）

壺形土器１、鉢形土器１が出土した。

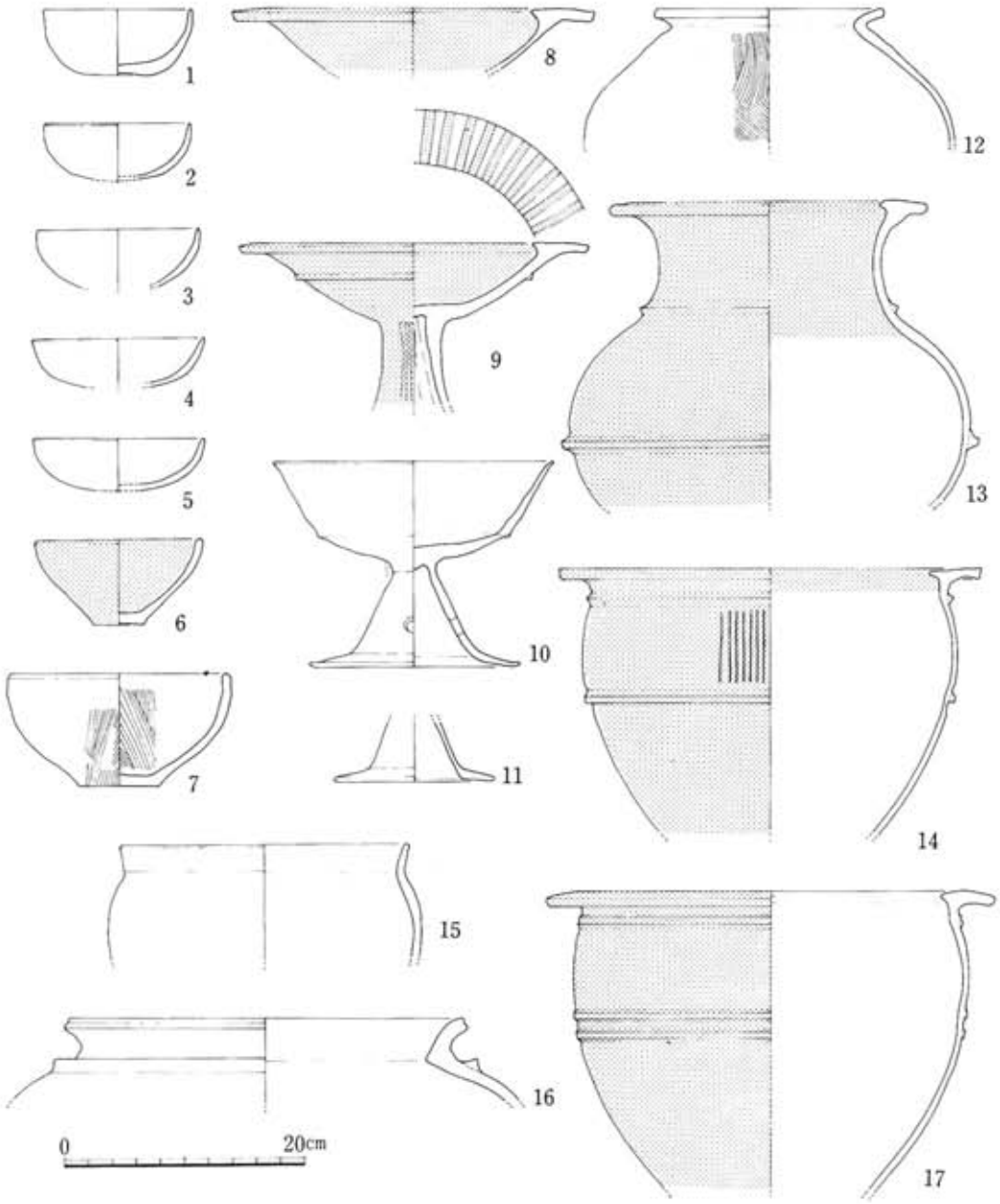


Fig 19　下中杖遺跡B区祭祀遺構出土土器実測図

13は逆L字形口縁をなす広口壺で、器体は球形に近い。頸部と肩部の境に断面三角形突帯を1条、胴部最大径部に断面コ字形突帯を1条めぐらす。胴下半部から底部を欠失する。口縁部、突帯部はヨコナデ、器体内外面はナデて平滑に仕上げ、赤色顔料を塗彩している。胎土は茶褐色で多くの砂粒を含む。現在高24.8cm、口縁外径26.2cm。胴部突帯部径32.4cm。6は器体内外

面ともナデ調整を行うが、両面とも丹塗りを施す。胎土は茶褐色で大粒の砂粒を含む。器高7.0cm、口縁径14.2cm。

ＳＲ204遺構出土の土器（１～５、10、11、15）

杯５個体分、高杯形土器２個体分、甕形土器１個体分、支脚２個体分出土した。

杯はいずれも口縁部のみの小破片であり、復元器高５cm内外、口縁径12.3～14.6cmになる。底部外面の調整はヘラケズリを行うもの（２）とハケ目を施すもの（４、５）、ナデつけているもの（１、３）がある。10は横倒しの状態で出土した高杯形土器である。杯上半部は大きく広がり、口縁端部でわずかに外反する。杯上半部と杯下半部の接合部に明瞭な段をつくっている。脚部は外方に大きく開き、その裾部は長くのびる。端部でやや上方に跳ね上がる。脚下半部には四方に円形の透孔を穿っている。大きく深みのある杯部に低く安定した脚部のつく形状を示している。口縁部と脚裾部をヨコナデ、器体内外面をナデて平滑に仕上げている。杯部内面に赤色顔料を塗彩した痕跡がわずかに残る。胎土は赤褐色で砂粒をほとんど含まない良質のものである。器高17.0cm、口縁径23.2cm、脚裾部径17.3cm。15は甕の口縁部である。短く外反する口頸部は肩の張らない胴部へと続く。口頸部はヨコナデ調整、胴部外面にはハケ目の痕跡が残る。胎土は茶褐色で大粒の砂粒を含む。復元口径24.0cm。

ＳＲ205遺構出土の土器（14）

外側へ強く突出する平坦なＴ字形口縁をもつ小型の甕形土器である。口縁部下に断面三角形突帯を１条、胴部に下方へ垂れ下がった断面コ字形突帯を１条めぐらす。底部を欠失する。口縁部、突帯部はヨコナデ、器体外面はナデて平滑に仕上げ、口縁部上面と体部突帯間に暗文を施す。さらに、外面には丹を塗彩している。胎土は赤褐色で砂粒をあまり含まない。現在高22.0cm、口縁外径34.8cm。

(3)土師器（Fig. 20～23 PL.11.12）

土師器には杯ＡＩ、杯ＡII$_a$、杯ＡII$_b$、杯ＡII$_c$、杯ＢＩ、杯ＢII$_a$、杯BII$_b$、杯CＩ$_a$、杯CＩ$_b$、杯CＩ$_c$、杯CＩ$_d$、杯CII、杯CIII、杯CIV$_a$、杯CIV$_b$、碗ＡＩ、碗ＡII$_a$、碗ＡII$_b$、碗AIII、小杯ＡＩ$_a$、小杯ＡＩ$_b$、小杯ＡＩ$_c$、小杯ＡII$_a$、小杯ＡII$_c$、小皿Ａ、小皿ＢＩ、小皿BII、小皿Ｃ、小皿Ｄ、小皿Ｅ、脚付皿、高杯Ａ、高杯Ｂ、壺Ａ、壺Ｂ、壺ＣＩ、壺CII、甕ＡＩ$_a$、甕ＡＩ$_b$、甕ＡＩ$_c$、甕ＡII$_a$、甕ＡII$_b$、甕AIII$_a$、甕AIII$_b$、甕ＢＩ$_a$、甕ＢＩ$_b$、甕BII$_a$、甕BII$_b$、甕BII$_c$、甕BIII$_a$、甕BIII$_b$、甕BIV、手捏土器などがある。杯Ａ・Ｂ、壺、甕Ａ類は赤褐色～灰黄褐色で胎土中に砂粒を含むものが多く、他は淡黄褐色～灰黄褐色で細かい砂粒を少量含むものが多い。

杯Ａ（１～11）　丸底に内彎する口縁部がつく。口径に対して器高が高く碗形をなす。法量によりＡＩとＡIIに分類でき、口縁部の相違によりＡIIはＡII$_a$、ＡII$_b$、ＡII$_c$に細分できる。

杯ＡＩ（１、２）は口径10.1～11.9cm、器高5.5～6.0cm。底部から体部は内外面ともヘラケズリの後ナデ、口縁部内外はヨコナデ。口縁端部は丸くおさめ、杯ＡII$_a$は口径13.9～15.4cm、器

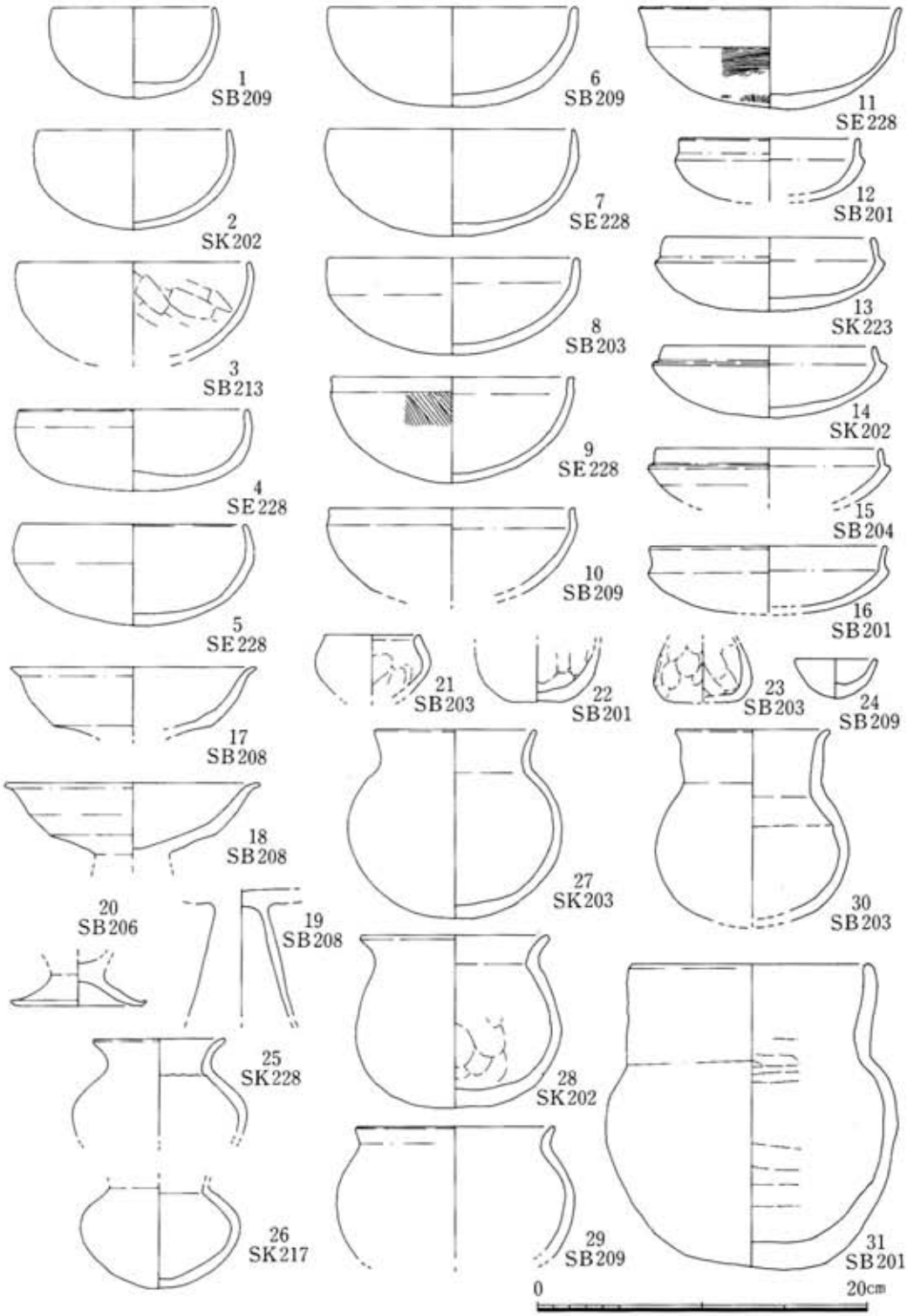


Fig 20　下中杖遺跡出土土師器実測図　(1)

高は5.0～6.5cmあるが、5.0cmの4を除けば5.8cm以上ある。体部はわずかに内彎するが、口縁部は内傾するものと直立するものに分けられ、強いヨコナデで体部と口縁部の境に不明瞭ながら稜をもつものもある。口縁端は丸い。底部から体部は内外面ともヘラケズリの後ナデている。口縁部はヨコナデ。4は内外面に赤色顔料を塗布する。杯AII$_b$（9、10）、杯AII$_c$（11）はAII類のうち体部と口縁部との境に稜をもち、口縁部がわずかに外反するものである。口径14.8～15.9cm、器高6.0～6.3cm。9は底部から体部下半の外面はヘラケズリ、体部上半はハケ目、口縁部ヨコナデ、内面ナデで口縁端部は平坦となっている。11は底部から体部はハケ目だが、ナデにより部分的にハケ目を消している。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、口縁部が大きく、外反するもので蓋の可能性もある。9は外面に赤色顔料を塗布する。

杯B（12～16）　須恵器の杯を模したと考えられる立ち上がりをもつ類である。法量により杯BI、杯BIIに分類できる。

杯BI（12）は口径11.0cm、器高3.9cm。立ち上がり部は直立する。杯BII（13～16）は口径12.9～14.5cm、器高約4.0～4.5cm。立ち上がりが内傾するもの（13～15）を杯BII$_a$、わずかに外反するもの（16）を杯BII$_b$と細分できるが、杯BII$_b$は蓋の可能性もある。13、14は内外面に赤色顔料を塗布する。

杯C（49～75）　平底に直線的に開く体部をもつ一群である。規格性をもつ法量と形態により杯CI、CII、CIII、CIVに分類できる。すべてロクロによって整形している。

杯CI（49～63）は形態の相違により杯CI$_a$、CI$_b$、CI$_c$、CI$_d$に細分できる。杯CI$_a$（49～54）は平底に直線的に大きく外に開く体部をもち、底部と体部との境は明瞭である。口径12.4～13.9cm、底径6.8～8.4cm、器高3.1～3.9cm。底部外面はヘラ切り離し、ヘラ切り離しのあとナデ、板状圧痕がついたもの（51）などがある。杯CI$_b$（55～58）は凹凸の多い平底にわずかに内彎しながら大きく外へ開く体部がつくが、底部と体部との境は外面に段をもち明瞭となる。底部外面はヘラ切り離し。板状圧痕がつくもの（55）もある。口径12.2～12.7cm、底径6.8～7.7cm、器高3.3～3.7cm。杯CI$_c$（59～61）は平底と直線的に大きく外に開く体部の境が丸味をもつもので、口縁部は丸く、わずかに肥厚する。底部外面はヘラ切り離しで、59、61は板状圧痕がつく。口径13.0～13.2cm、底径7.0～7.7cm、器高3.4～4.1cm。杯CI$_d$（62）は平底から大きく丸味をもちながら上方に開き、口縁部は肥厚し外反する。底部外面ヘラ切り離し、口径13.3cm、器高4.4cm。CI$_e$（63）は丸底に近い平底となり、底部と体部の境はなくなる。丸く大きく外に開く体部から口縁部はわずかに外反する。体部下半から底部にかけての外面にはヘラケズリの痕跡がある。口径15.5cm、器高4.2cm。杯CII（64、65）は杯CI$_a$の体部がさらに外へ開く形態のもので器高が低くなり皿状となる。技法的には杯CI$_a$と同じであるが板状圧痕をもつものはない。口径15.1～15.2cm、底径7.9～8.5cm、器高2.3～2.7cm、全体的に器壁は薄い。杯CIII（66～68）は杯CIIが小型となった皿状のもので、体部の長さの比率が減少する。底部

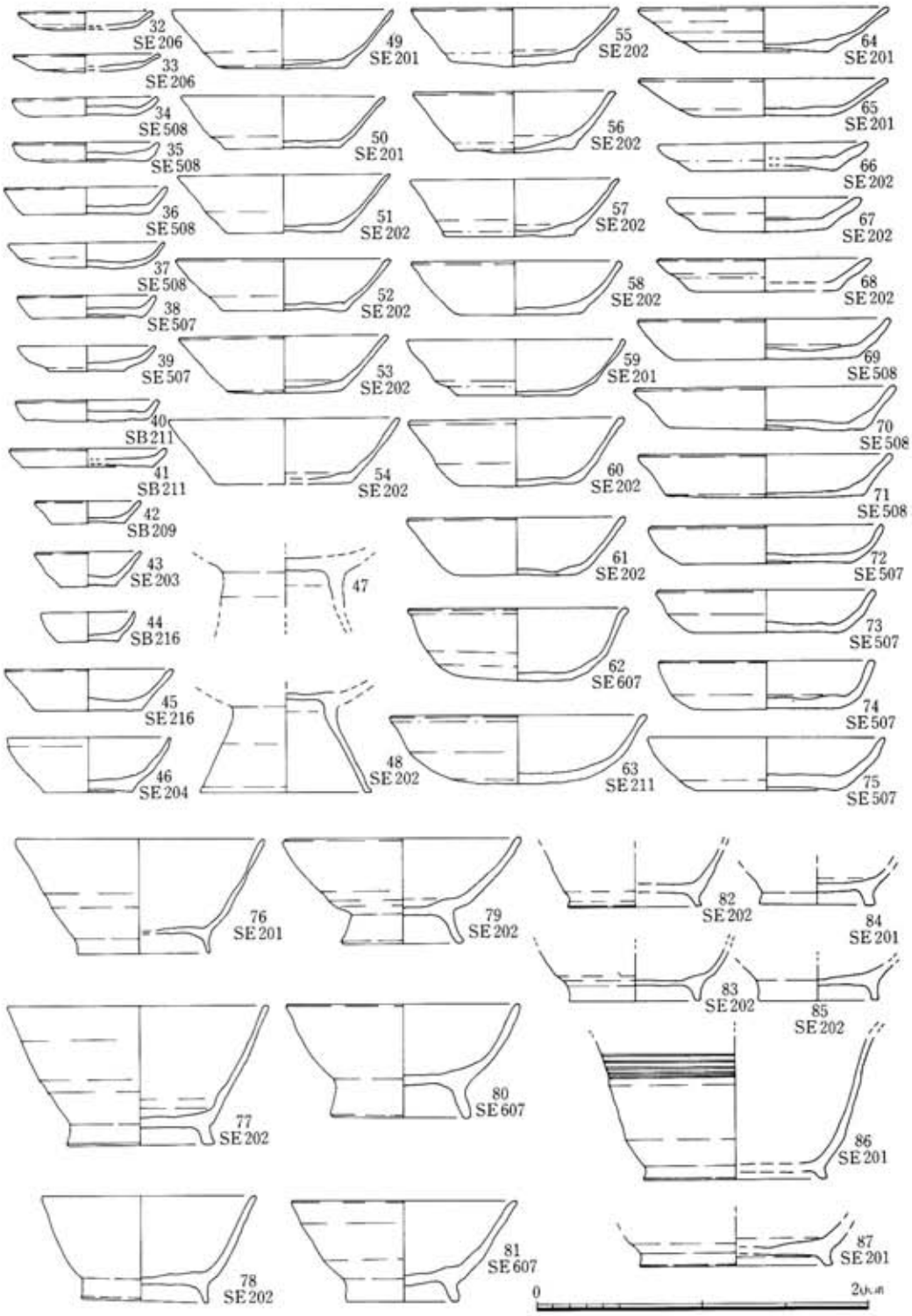


Fig 21　下中杖遺跡出土土師器実測図　(2)

外面はヘラ切り離しの後ナデている。口径11.7～12.9cm、底径7.7～8.8cm、器高1.6～2.0cm。器壁は厚く、口縁部は外側が肥厚する。杯CIV（69～75）は径の大きい平底に短く開く口縁部がつくもので、口縁部の形態によって杯CIV$_a$とCIV$_b$に細分できる。杯CIV$_a$（69～71）は口縁部が直線的に外に開き底部と口縁部境は明瞭である。口径15.2～15.8cm、底径11.0～11.8cm、器高2.5～2.6cm。底部外面は糸切り痕で、板状圧痕がつく。内面は指で不定方向にナデつけている。杯CIV$_b$（72～75）は口縁部が内彎しながら開くもので、底部と口縁部の境は丸くなり不明瞭である。口径13.0～14.3cm、器高2.3～3.2cmで杯CIV$_a$に較べ口径が少さくなっている。抜法的には杯CIV$_a$と同一である。

碗A（76～87）　高台がつく碗形の杯である。ロクロにより整形されている。主に法量、杯部の形態により碗AI、AII$_a$、AII$_b$、AIIIに細分できる。

碗AI（76、77）は直線的に長く上方へ開く体部をもち、底部との屈曲部に高台を貼り付けたものである。高台はわずかに外側へ開く。口径15.2～16.1cm、高台径8.1～9.1cm、器高7.0～8.4cm。77は口縁端部と高台端部を比較的平坦に仕上げている。76は器面が風化して調整痕が確認できないが、77は体部外面下位はヘラケズリ、底部外面にはヘラ切り離し痕の上に板状圧痕が残る。碗AII$_a$（78）は口径13.1cm、高台径7.8cm、器高6.4cmと小型になる。体部は直線的であるが、碗AIに較べ短く、底部と体部との境は高台の外側に明瞭となる。底部外面はヘラ切り離し後ナデ。碗AII$_b$（79～81）は丸味をもち、やや内彎する杯部に高い外開きの高台をつけたもので、口径13.7～14.4cm、高台径7.0～8.5cm、器高6.1～6.9cm、底部外面はヘラ切り離しで、板状圧痕が残るもの（79）もある。碗AIII（86、87）は大型の碗とも言える杯で、径の大きい平底から体部はわずかに内彎しながら上方へ開き、口縁部は外反する。底部と体部との境に低く外へ開く高台をもつ。86は体部上位外面に5条の狭い沈線を施す。高台径は11.0～11.6cmで、86は口径17.5cm以上、器高9.5cm以上になる。

小杯A（42～46）　上げ底気味の平底に直線的に開く体部をもつ小型の杯で、ロクロにより整形されており底部外面には糸切り離し痕が残る。法量により小杯AIとAIIに分類できる。

小杯AIは小杯の中で小型のもので、体部、口縁部の形態により小杯AI$_a$、AI$_b$、AI$_c$に細分できる。小杯AI$_a$(42)は直線的に開く短い口縁部がつくもので、口径6.6cm、底径4.4cm、器高1.4cm。小杯AI$_a$(43)は直線的に開く体部が長いもので、口径6.6cm、底径3.4cm、器高2.1cm。小杯AI$_c$(44)は体部が内彎しながら上方に開くもので、口径5.8cm、底径3.8cm、器高1.7cm。小杯AII$_a$（45）は小杯AI$_a$が大型になったもので、口径10.3cm、底径6.4cm、器高2.5cm。小杯AII$_c$は小杯AI$_c$が大型になったもので、口径10.0cm、底径5.4cm、器高3.3cm。

小皿A（32、33）　丸味をもつ平底に大きく開く短い口縁部がつく。口径8.4～9.0cm、器高1.0～1.1cm。器壁は薄い。2個体とも磨耗しており技法は不明であるが、底部外面はヘラ切りと思われる。

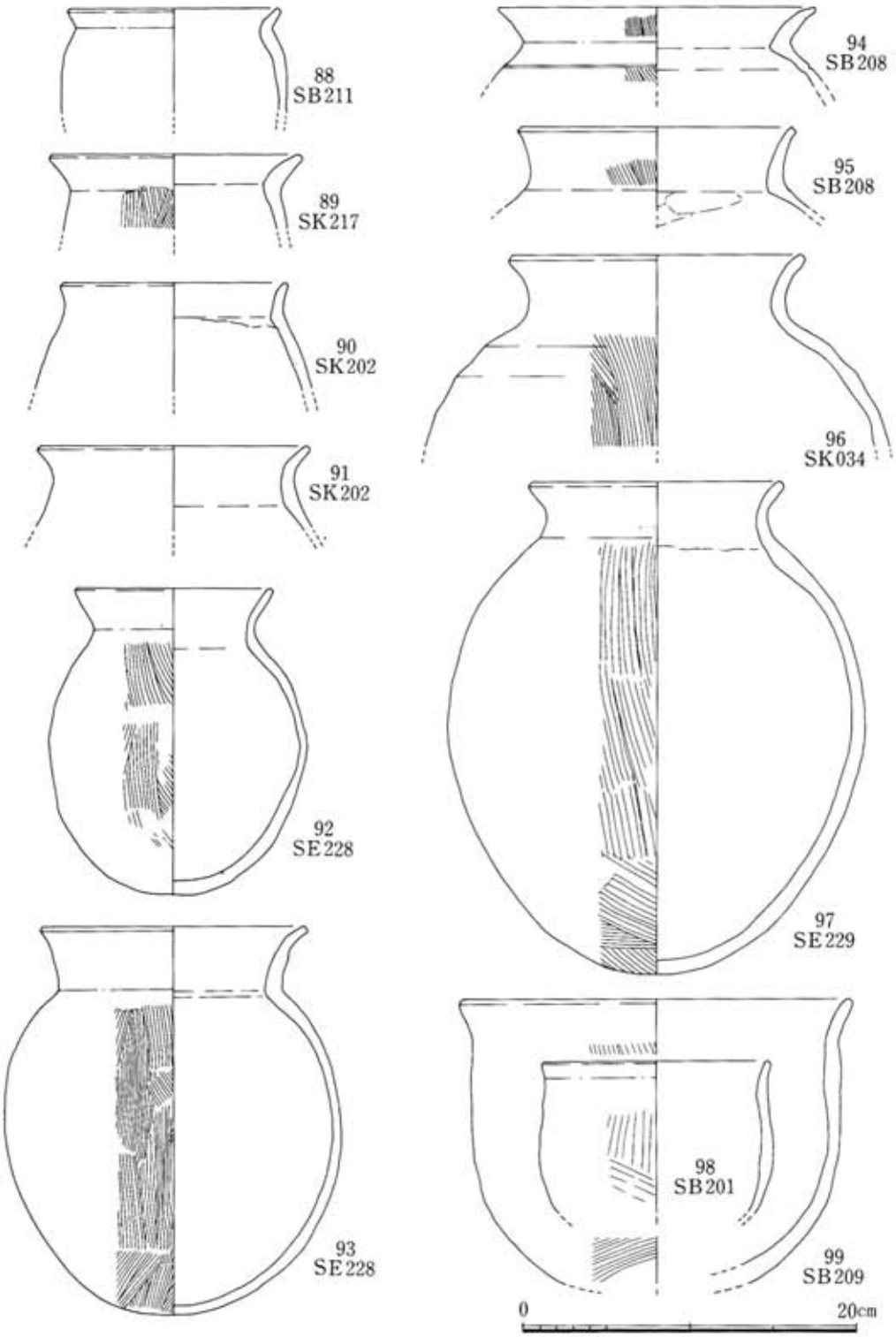


Fig 22　下中杖遺跡出土土師器実測図　(3)

小皿B（34～36）　わずかに上げ底気味の平底に短く開く口縁部がつく。ロクロ整形により、底部外面には糸切り痕が残る。法量により小皿BⅠとBⅡに分類できる。小皿BⅠ（34、35）は口径9.0cm、器高1.1～1.2cmで底部と口縁部との境は不明瞭である。小皿BⅡ（36）は口径10.0cm、器高1.6cmと大型のものである。

小皿C（37）　底部から体部にかけて丸味をもち、口縁部がわずかに外反する。口径9.6cm、器高1.6cm。糸切り底。

小皿D（39）　平底と体部の境はくびれ、口縁部はわずかに屈曲する。口径8.4cm、底径4.7cm、器高1.6cm。糸切り底。

小皿E（38、40、41）　上げ底気味の平底に短い口縁部がつくもので、底部と口縁部との境に稜をもつ。口径8.5～8.8cm、底径6.7～7.4cm、器高1.3～1.4cm。糸切り底。

脚付皿（47、48）　破片であるため全体は復元しえない。48は脚裾部径10.4cm、脚高5.1cm、ロクロナデによる。

高杯A（17～19）　杯部は下位で屈曲して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸い。口径15.2～15.7cm、杯部高約4.4cm、脚部はおそらく19のような高いものが付くと考える。内外面ともヘラミガキで、17には赤色顔料が塗布されている。

高杯B（20）　大きく開く低い脚のつく小型の高杯である。裾部は外反している。裾部径8.4cm、脚部高1.6cm、脚部外面ヘラミガキ。

壺A（25、26）　底部は丸底で、器体上位に肩部をもち、外反する口縁部がつく小型の壺である。口径は約7.0～8.0cm、肩部径9.8～10.8cm。内外面ともナデ、口縁部ヨコナデ。26の内部にセメント状の堅い物質が付着している。

壺B（27～29）　丸底で器体は球形に近く、外反する短い口縁部がつく。体部と口縁部の境に明瞭な稜をもたない。27は口径9.9cm、器高11.5cm、口縁部ヨコナデ、他はナデ。28は最大径部が下位にさがる。口縁部ヨコナデ、底部から体部外面はヘラケズリ後ナデ、内面は体部上半ナデ、下半から底部には指頭圧痕が残る。

壺C（30、31）　球状に近い体部にほぼ直立する頸部、口縁部をもつ壺で、法量により壺CⅠ、CⅡに分類できる。

壺CⅠ（30）は底部を欠くが、球形に近い体部から直立する頸部上端にわずかに外反する口縁をもつ。口径9.4cm、復元器高12cm。内外面ともナデ調整。壺CⅡ（31）は平底気味の丸底で体部上位に最大径をもつ。頸部はほぼ直立し、口縁端部は丸くわずかに内彎する。口径15.0cm、器高18.4cm。口頸部ヨコナデ、外面はハケ目調整の後ナデ、内面は底部は指押さえ、体部はヘラケズリ。

甕A（88～97）　底部は丸底で、器体は卵形で長く、頸部はすぼまる。口縁部はヨコナデ、体部は外面ハケ目調整、内面はヘラケズリ。法量により甕AⅠ、AⅡ、AⅢに分類できる。甕AⅠ、

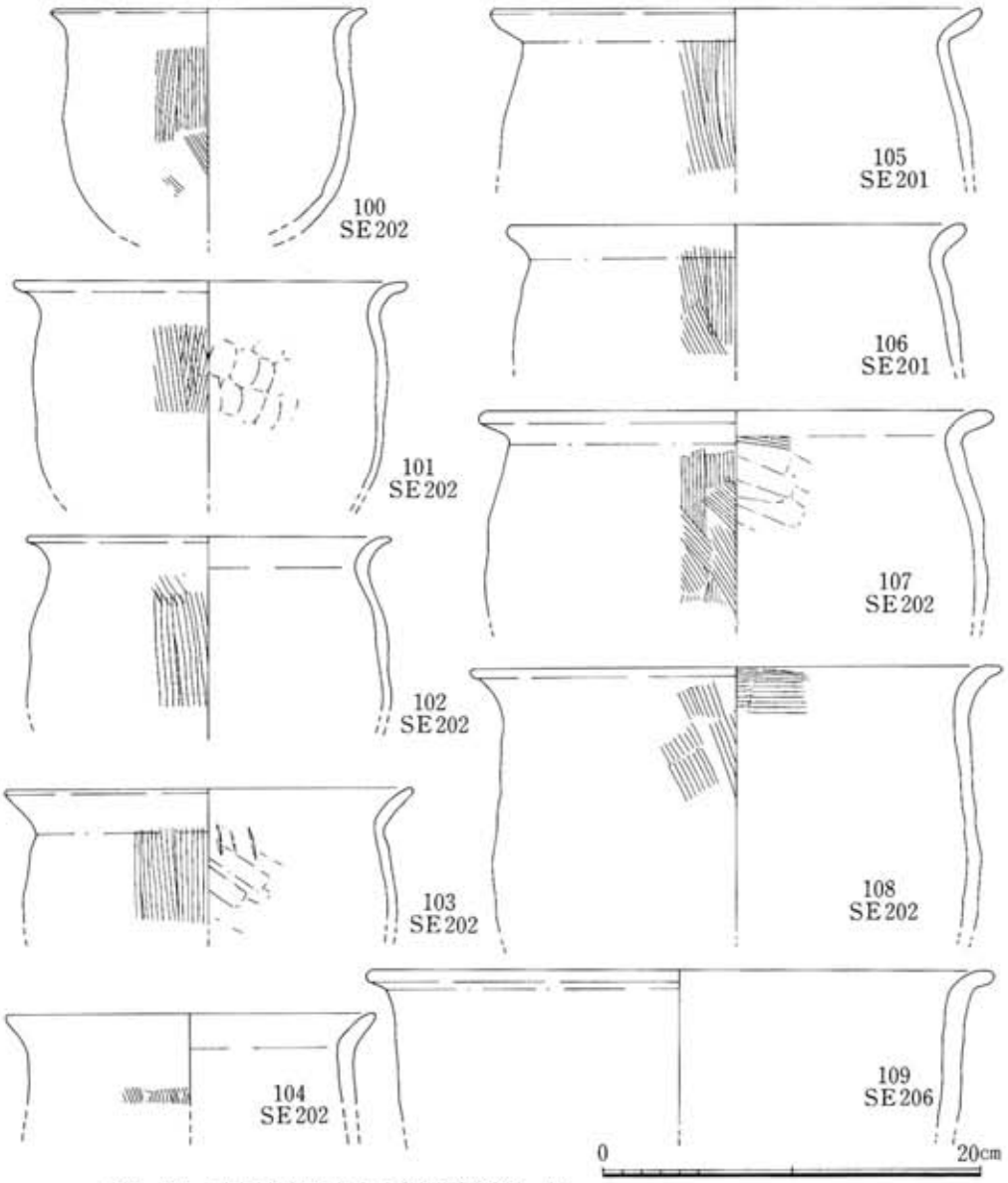


Fig 23　下中杖遺跡出土土師器実測図　(4)

AⅡは甕AⅢと較べると胴径に比して口頸部が広い。

甕AⅠは、小型の甕で口縁部の形態により甕AⅠ$_a$、AⅠ$_b$、AⅠ$_c$に細分できる。甕AI$_a$(88)は外反する短い口縁部がつくもので、内側に稜をもつ。口径13.0cm。甕AⅠ$_b$(89)は口縁部がく字形に外反するもので、口径15.3cm。甕AⅠ$_c$(92)の大きく開く口縁部は直線的である。口径12.0cm、器高18.3cm。甕AⅡは中型の甕で、口縁部の形態により甕AⅡ$_a$、AⅡ$_b$に細分できる。甕AⅡ$_a$(90)はあまり肩の張らない体部に直立する口縁部がつくもので、先端はわずかに外反する。口径13.8cm。甕AⅡ$_b$(91、93)は卵形の器体に大きく外反する口縁部がつき、その境の内面に

は不明瞭な稜をもつ。93は口径16.2cm、器高23.2cm。甕AIIIは大型の甕で口縁部の形態により甕AIII$_a$、AIII$_b$に細分できる。甕AIII$_a$（94、95）はく字形に外反する口縁部をもつが、体部と口縁部の境の内側に明瞭な稜をもつ。95の口縁端部は平坦になっている。口径16.6～19cm、体部外面のハケ目は口縁部にまで及ぶ。甕AIII$_b$（96、97）は最大径部を体部中位より上にもつ卵形の器体に、丸味をもって大きく外反する口縁部がつくもので、体部と口縁部の境に明瞭な稜をもたない。97は口径15.2cm、器高29.4cmで、96はさらに大型となる。

甕B（98～109）　平坦な丸底からやや内傾する鉢形の体部をもち、頸部があまりくびれず、外反する口縁部がつくもので、口縁部の形態、法量により甕BI$_a$、BI$_b$、BII$_a$、BII$_b$、BII$_c$、BIII$_a$、BIII$_b$、BIVに細分できる。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ目調整、内面はほとんどがヘラケズリ。底部より体部にかけて煤が付着している。

甕BI$_a$（98）は丸底から内彎しながら直立する体部にわずかに外へ屈曲する口縁部をもつ。口径13.7cm、復元高約11cm。甕BII$_a$（99）は甕BI$_a$の大型品で口径23.5cm、復元器高約18cm。甕BI$_b$（100）は丸底から体部は内彎しながら上位でわずかに内傾し、丸味をもって外反する口縁部がつく。口径16.9cm、復元器高約13cm。甕BII$_b$（101、102）は甕BI$_b$の大型品で、口縁部はさらに丸く外反する。口径19.6～21.2cm、器高は16cm内外になろう。甕BII$_c$（103、104）は甕BII$_b$と同様の体部に直線的に外反するく字形口縁をもつ。口径19.8～21.8cmで甕BII$_b$とほぼ同法量である。甕BIII$_a$（105～107）は上位でやや内傾する体部に、丸く大きく屈曲する短かめの口縁部がつく。口縁部は外側が肥厚し、端部は丸くなる。口径24.3～27.2cm。107は体部内面上端に一部分横方向のハケ目が残る。甕BIII$_b$（108）は甕BII$_b$がさらに大型になったものである。口径28.1cm、器高は約21cmになろう。体部内面上端から口縁部内面にかけて横方向ハケ目が残る。甕BIV（109）は土師器甕の中では最も大型のもので、わずかに開き気味の体部に丸く外反する短い口縁部がつき、口縁部の上面は平坦となる。口径33.2cm。

(4)黒色土器（Fig. 24 PL. 11）

高台付の碗形のものだけ出土した。杯部の内面だけに炭素を吸着させるいわゆる黒色土器A類（1、3～5、7～9）と内外面黒色のいわゆる黒色土器B類（2、6）がある。完形品は2だけで、全体の形態分類はなし得ないが、口縁部形態の相違と、法量により、黒色土器碗AI、AII$_a$、AII$_b$、B$_a$、B$_b$に分類する。胎土は淡黄褐色であまり砂粒を含まないものが多い。

碗Aはいわゆる黒色土器A類で、AI（4、7）は底部と体部との境より内側に外開きの高い高台がつくもので、小型品である。高台径7.0～7.4cm。AII$_a$（1）は2と類似した同形態と考える大型のもので、底部と体部の境に低い高台をつける。高台径10.0cm、内面ヘラミガキ、外面ロクロナデ、底部外面ヘラ切り離しの後ナデ。AII$_b$（3）は内彎しながら開く体部に外反する小さな口縁部がつくもので口径15.4cm。内面ヘラミガキ、口縁部、体部外面上半ロクロナデ。下半はヘラケズリの後ナデ。AII$_b$類の底部として5が考えられる。他に小さめの高台をつけたも

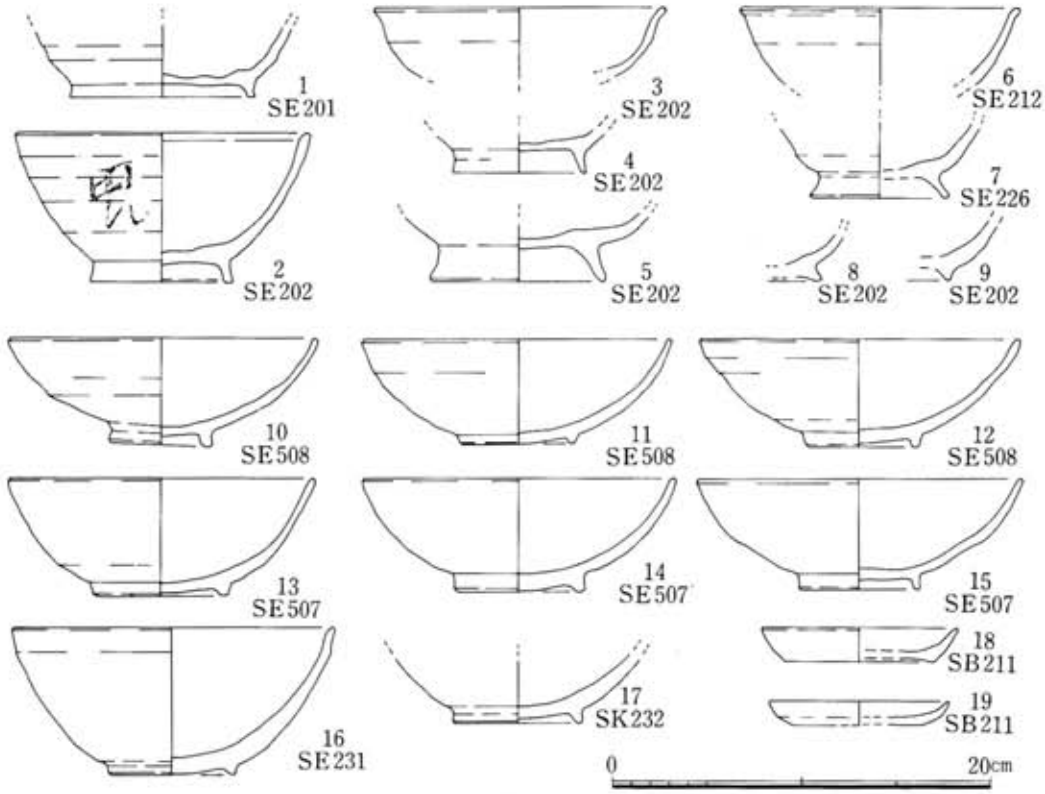


Fig 24　下中杖遺跡出土黒色土器・瓦器実測図

の（8、9）がある。

碗Bは、いわゆる黒色土器B類である。碗B_a(2)は完形品で、内彎しながら上方に開く体部と底部との境に高台をつける。高台端部は面取りするが、口縁端部は丸く、わずかに肥厚している。口径15.8cm、高台径7.6cm、器高7.9cm。内外面ともヘラミガキ、底部外面はヘラ切り離しの後ナデ。体部外面の黒色が薄くなった部分に「毘」とも読める墨書がある。B_b（6）はAII_b類と同じ形態であるが、杯部が深くなる。口径14.8cm、内外面ともヘラミガキ。

(5)瓦器（Fig. 24 PL. 11）

瓦器には碗AⅠ、AⅡ、AⅢと小皿A_a、A_bがある。灰白色～黒灰色で微細な砂粒を含む。

碗A（10～15）　内彎しながら大きく外へ開く体部をもち、先端が丸い口縁部をもつ。高台は径が小さく低い。内外面ヘラミガキ。法量によってAⅠ、AⅡ、AⅢに分類できる。

碗AⅠ（10～12）は口径16.4～16.9cm、器高5.6～5.7cm、高台径5.6～6.0cmで、体部は大きく開く。高台は小さく丸味をもつ。碗AⅡ（13～15）は口径16.4～17.2cm、器高5.8～6.2cm、高台径6.5～7.3cmと口径は碗AⅠとほぼ同法量であるが器高が高いために体部がより内彎し、深くなっている。高台は角張っていて、径は大きい。碗AⅢ（16、17）は口径17.3cm、器高7.8cm、高台径6.8cmで器高が高くなる。高台は低く小さい。わずかに内彎しながら外に開く体部に

直立しわずかに外反する丸い口縁部がつく。器壁は厚くなっている。

小皿A(18、19)　糸切り離しの平底に内彎しながら開く口縁部がつく。形態により小皿A$_a$、A$_b$に細分できる。

小皿A$_a$(18)は底部と口縁部の境がくびれて明瞭となるもので、口径10.4cm、器高1.8cm。小皿A$_b$(19)は底部と口縁部の境が不明瞭なもので、口径9.5cm、器高1.3cm。

(6)須恵器(Fig25. 26 PL. 13)

須恵器には蓋AI$_a$、蓋AI$_b$、蓋AI$_c$、蓋AII、蓋B、蓋C、蓋DI$_a$、蓋DI$_b$、蓋DII、杯A、杯BI、杯BII、杯C、杯D、杯EI、杯EII$_a$、杯EII$_b$、高杯A$_a$、高杯A$_b$、高杯B、皿A$_a$、皿A$_b$、皿A$_c$、皿B$_a$、皿B$_b$、瑞A、鉢A、壺A、壺B、壺C、壺D、甕A、甕B、甕C$_a$、甕C$_b$などがある。青灰色～灰色のものが多いが、皿・蓋D類には灰褐色のものも多い。少量の砂粒を含む。

蓋A(1～5)　わずかに丸味をもつ天井部に下外方へ下がる長い口縁部がつく。口縁端部は内側に段をつくるものと丸くなっているものがある。天井部外面は上面がヘラケズリ、下方へわずかに屈曲する部分より下位はロクロナデ調整を施している。口径の法量により蓋AI、AIIに分類でき、さらに蓋AIは細部の形態の相違により蓋AI$_a$、AI$_b$、AI$_c$、に細分できる。

蓋AI$_a$(1)は天井部に丸味をもち高く、口縁部はわずかに外へ開いている。天井部上面に列点文を2列、下位に櫛波状文を施す。口径12.9cm、器高5.1cm、口縁部高2.0cm。天井部高と口縁部高の比率は3：2となっている。後に述べる蓋AI$_b$、AI$_c$、AII$_a$の同比率は1：1となる。蓋AI$_b$(2)は丸味をもつ天井部と同じ傾斜で口縁部が延び下位で垂直に屈曲する。口径13.0cm、器高4.0cm、口縁部高2.2cm。蓋AI$_c$(3)は天井部は丸く、口縁部は外に開く。口縁端部は短く外反し内側に段をもつ。口径12.4cm、器高4.3cm、口縁部高2.1cm。蓋AII(4)の比較的平坦な天井部は下位で下方へ屈曲する。口縁部は垂直に下がり、口縁端部はわずかに外反するが、内側に段の痕跡と考えられるくぼみがある。口径14.9cm、器高3.9cm、口縁部高1.9cm。

蓋B(5)は天井部と口縁部との境が不明瞭となる。口縁部はわずかに内傾し、口縁端部下方はくぼむ。口径14.2cm、器高4.0cm。

蓋C(6)　丸い天井部から口縁部は下方へ屈曲し、先端は外反する。口縁端部は内側に段がつく。天井部には高い擬宝珠様のつまみがつく。口径13.3cm、器高5.0cm、口縁部高1.8cm、つまみ高1.0cm。天井部外面はヘラケズリ後ナデ。

蓋D(7～11)　低い天井部に先端が下方に屈曲する短い口縁部がつく。口縁端部は丸い。天井部には擬宝珠様の扁平なつまみがつく。天井部外面は中心より約⅔までヘラケズリを施している。口径の法量により蓋DI、DIIに分類でき、蓋DIは天井部がストレートに延びるもの(蓋DI$_a$)と丸味をもつもの(蓋DI$_b$)に細分できる。

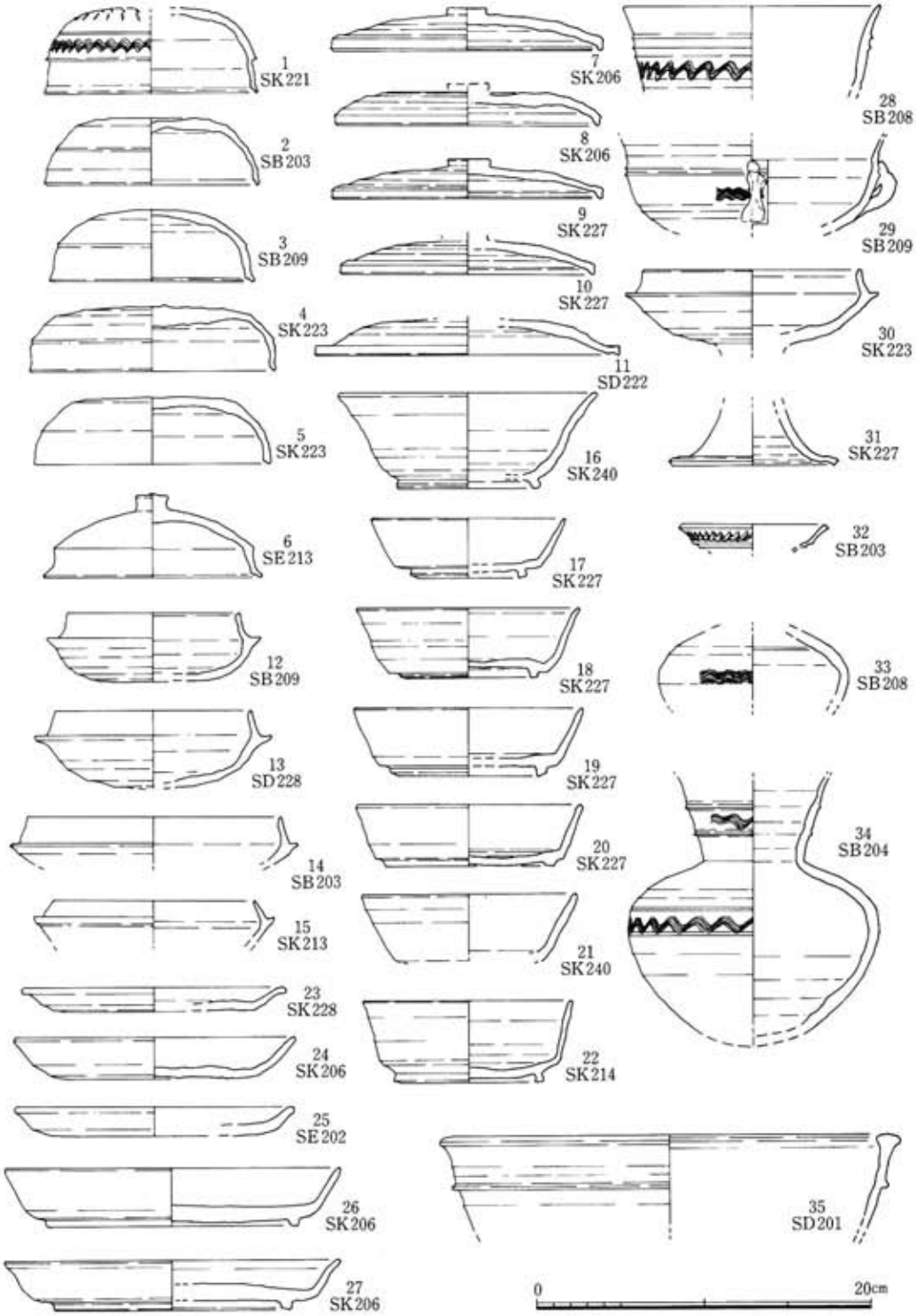


Fig 25　下中杖遺跡出土須恵器実測図　(1)

蓋ＤＩ$_a$（７～10）は口径15.4～16.3cm、器高2.4～2.6cm。蓋ＤＩ$_b$（11）は口径16.0cm、復元器高3.0cmと大型となる。ストレートに延びる天井部から口縁部は上方へ反り端部は下方に小さく屈曲する。皿と組み合う蓋であろう。

杯Ａ（12）　底部は平坦に近いが、概して底体部は丸味をもつ。たちあがりはわずかに外反しながら内傾して上方へ延びる。底部は内側にくぼみをもつ。底体部外面は⅔前後にヘラケズリを施す。口径10.6cm、器高4.1cm、たちあがり高1.5cm。

杯Ｂ（13、14）　丸味をもち外へ開く底体部に内傾する高いたちあがりがつくもので、先端は丸く仕上げている。法量の大、小により杯ＢＩ、ＢIIに分類できる。

杯ＢＩ（13）は小型のもので、口径12.0cm、器高4.8cm、たちあがり高1.5cm。杯ＢII（14）は大型のもので、口径15.4cm、たちあがり高1.6cm。

杯Ｃ（15）　杯Ａ、Ｂに較べ、たちあがりが短くなり、より内傾する。端部は丸い。口径12.3cm、たちあがり高1.0cm。

杯Ｄ（16）　高台がつく杯である。平底から丸味をもって上方へ開く体部は上位でわずかに外反する。高台は底部と体部の境につき小さい。口縁端部は丸い。体部内外ロクロナデ。口径15.6cm、器高5.7cm、高台径8.6cm。

杯Ｅ（17～22）高台がつく杯で、平底から上方へ屈曲する体部は直線的か、わずかに外反する。口縁端部は丸く、高台は底部と体部の境より内側につき、小さい。法量により杯ＥＩ、ＥIIに分類でき、杯ＥIIはさらに体部の開き具合で杯ＥII$_a$、ＥII$_b$に細分できる。

杯ＥＩ（17）は小型の杯で、口径11.6cm、器高3.6cm、高台径7.0cm。杯ＥII$_a$（18～21）は杯ＥＩの大型品で、口径13.0～13.8cm、器高3.7～4.2cm、高台径8.3～10.0cm。杯ＥII$_b$（22）は体部が上方にたちあがるもので、口径12.6cm、器高4.8cm、高台径9.0cm。すべて底部外面にヘラ切り離しの痕跡が残る。

高杯Ａ（28、29）　無蓋の高杯である。形態の相違により高杯Ａ$_a$、Ａ$_b$に分類できる。

高杯Ａ$_a$（28）は深みをもち外にわずかに開く杯体部上半に口縁部がつく。体部と口縁部との境外面に２条の鋭い断面三角形突帯がめぐり、体部上位に櫛波状文を施す。現存する部分は内外面ともロクロナデ。口径15.4cm。高杯Ａ$_b$（29）は丸味をもって開く杯体部から口縁部は外へ屈曲する。体部と口縁部の境に鋭い断面三角形突帯が１条めぐる。体部上位、突帯と体部中位凹線との間には櫛波状文を施す。把手がつくが、対峙する位置に２個あったものと考える。杯体部下半はヘラケズリ、上位から口縁部は内外ともロクロナデ。復元口径16.0cm。

高杯Ｂ（８）　有蓋の高杯である。丸味をもって外に開く杯体部に内傾するたちあがりがつく。たちあがり先端は丸く、わずかに外反する。口径13.2cm、たちあがり高1.4cm。脚として31のような形態が考えられる。

皿Ａ（23～25）　高台がつかない皿で、平底に短い口縁部がつく。底部外面はヘラ切り離し後

ナデ、内面ナデ、口縁部内外ロクロナデ。口径16.0～17.0cm。

皿A$_a$(23)は口縁部が外へ開き、端部が外反するもので、底部と口縁部の境は明瞭である。口径16.0cm、器高1.4cm。皿A$_b$(24)は直線的に外に開く口縁部をもつ。底部と口縁部の境はやや不明瞭となる。口径17.0cm、器高2.4cmと皿Aの中では大型である。皿A$_c$(25)の短い口縁部の先端はわずかに外反する。底部と口縁部の境は不明瞭である。復元口径17.0cm、器高1.7cm。

皿B(26、27)　高台付の大型の皿である。広い平底に短い口縁部がつく。高台は低く、底部と口縁部境の内側につく。底部外面ヘラ切り離しの後ナデ、内面ナデ、口縁部内外ロクロナデ。口縁部の形態により皿B$_a$、B$_b$に分類できる。

皿B$_a$(27)の口縁部は底部から屈曲して外へ開き口縁端部は外反する。口径20.4cm、器高3.0cm、高台径14.4cm。皿B$_b$(26)の口縁部は直線的に外に開くが、底部と口縁部の境は丸くなっており不明瞭である。口径20.4cm、器高3.5cm、高台径15.2cm。

瓶A(32、33)　瓶の体部と考えられる破片が1点(33)出土した。体部中位に最大径部をもち、その部分に櫛波状文を施す。体部径11.4cm。32は瓶の口縁部である。櫛波状文を施す。

鉢A(35)　口縁部のみである。口縁部は内外に肥厚し、下位に先端の丸い断面三角形突帯を1条めぐらす。内外面ロクロナデ。復元口径27.5cm。

壺A(34)　肩の張りが明瞭にみられる体部にわずかに外反する長い口頸部がつく。口頸部外面には細かな断面三角形突帯を2条めぐらせ、その間に櫛波状文を施す。また体部最大径部に細い沈線を2条めぐらせ、その間に櫛波状文を施す。口頸部から肩部内外面ロクロナデ、体部内面ナデ、体部外面下半タタキ。復元口径9.4cm、復元器高16.6cm、復元口頸部高5.4cm、体部最大径15.0cm。

壺B(36)　上位に最大径をもち強く肩が張る体部に、外に開く短い口縁部がつく。口縁端部は平坦に仕上げている。口頸部から肩部内外面ロクロナデ、下位はタタキ。口径9.6cm、体部最大径14.7cm。

壺C(37)　上位に最大径をもつ体部は丸味をもちながら内彎し、肩が張る。口縁部は肩部より屈曲して垂直に立つ短いもので、端部は平坦になっている。底部は欠損するが、高台がつくと考えられる。口頸部から肩部、体部、体部上位にかけてロクロナデ、体部下半は内面ナデツケ、外面ケズリ。口径11.1cm、体部最大径20.0cm、復元器高17.0m。

壺D(38)　口縁部から肩部にかけての破片である。形態は壺Cに類似するが、肩部から立ち上がる口縁部の屈曲はゆるい。口縁端部は丸く仕上げている。肩部下位に把手がつく。口頸部内外面ロクロナデ、下位はタタキ。口径24.2cmと大型品である。

甕A(44)　口頸部のみ残存する。ゆるやかに外反する長い口頸部の上端はわずかに内彎し、外にも3条の鈍い凸線をめぐらせるように肥厚する口縁部となる。口縁部直下に1条、下方2ヵ所に間隔をもってそれぞれ2条の鈍い断面三角形突帯をめぐらし、それらの間に櫛波状文を施

す。櫛波状文は破片下端にも一部残っており、3ヵ所に施されることがわかる。内外面ともにロクロナデ。口径39.8cmと大型である。

甕B（45）　口頸部の破片である。ゆるやかに外反しながら大きく外へ開く口頸部の先端下は肥厚する。口縁部直下に上下に凹線を施すことによって作り出された鋭い断面三角形突帯を2条めぐらせ、破片下端にも同様の突帯がめぐり、その間に振幅の短い櫛波状文を施す。内外面ともにロクロナデ。口径40.4cmと大型である。

甕C（39～43）　すべて口頸部から肩部にかけての破片である。内傾する肩部に外反しながら開く口頸部がつき、口縁端部は肥厚する。口頸部内外面ロクロナデ、肩部はタタキによる調整を施す。口頸部の形態により甕C_aとC_bに分類できる。

甕C_a（39、40）は口頸部の外への開きが小さいもので、基部は厚く、端部の肥厚が上、下、外方3ヵ所にみられる。口径24.7～25.0cm。甕C_b（41～43）は口頸部の外への開きが強いもので、端部の肥厚も上下に小さくなる。口径21.4～26.5cm。

(7)陶磁器（Fig. 27. PL.14,15）

青磁、白磁、褐釉陶器、緑釉陶器などがある。青磁には碗A_a、碗A_b、碗B、碗C、碗D_a、碗D_b、碗E、碗F、碗G、皿A、皿B、皿C、皿D、水注などがある。白磁には碗A_a、碗A_b、碗BⅠ、碗BII_a、碗BII_b、碗C、皿A、皿B、皿Cなどがある。褐釉陶器で器形が明らかなものに水注があり、緑釉陶器には、皿、壺と考えられるものなどがある。

青磁碗A（1～3）　幅の広いいわゆる蛇目高台を削り出すもので、体部はほぼ直線的に外に開き、口縁端部は丸く仕上げる。口径は14.5cm内外である。細部の形態の相違により青磁碗A_a、A_bに細分できる。

青磁碗A_a（1）は体部がわずかに内彎しながら外に開く。高台は畳付部が水平になっており、高台外面と体部との境はあまり明瞭ではない。畳付部はほぼ全面を焼成後砥石状のもので研磨する。胎土は灰白色の精製されたもので釉薬の色調は黄緑色で、胎になじまず剥離した部分が多い。光沢はない。畳付部の研磨した部分を除いて、全面に施釉している。口径14.8cm、器高9.8cm、高台径5.0cm。青磁碗A_b（2、3）は体部が直線的に外へ開くもので、高台畳付部の内側は上がっており、床につかず、外底部高台の内側はもり上がって厚くなっている。高台外面と体部との境は明瞭となり、3の高台は外へひろがる。畳付部は外から7～8mmの幅で焼成後砥石状のもので研磨する。胎土は灰白色の精製されたもので釉薬の色調は黄味を帯びた緑色であるが、3は黄味が強い。2は細かな貫入がある。内外面全面に施釉する。2は口径14.4cm、器高4.6cm、高台径5.2cm。

青磁碗B（4）　底部を欠く。わずかに内彎して外に開く体部は上位で外反し、口縁端部は丸く仕上げる。口縁端部は等間隔に5ヵ所をヘラで切り込み、それぞれの下方体部外面にヘラ状工具でやや右に傾く凹線をひく。胎土は灰白色の精製されたもので釉薬の色調はやや黄味を

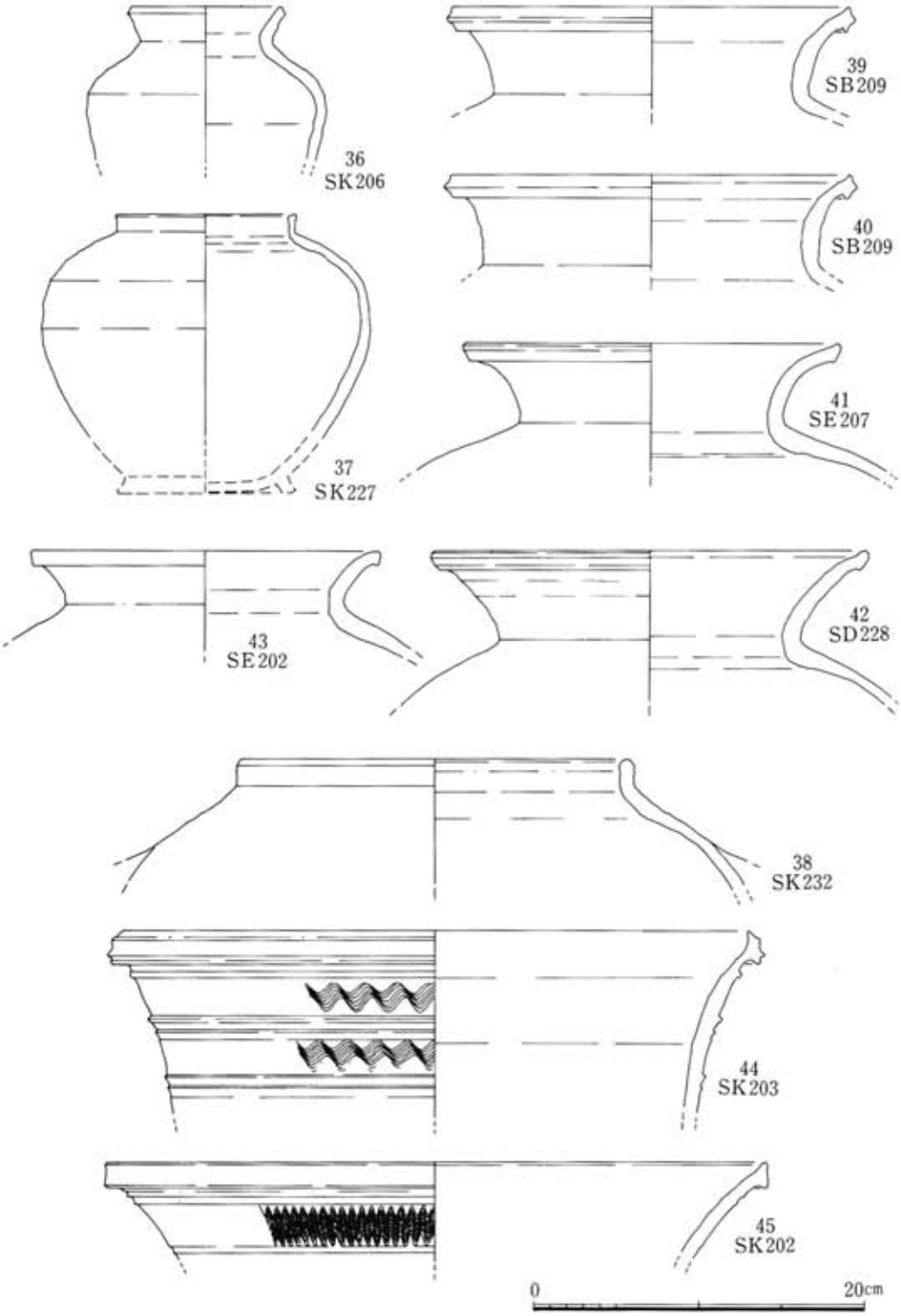


Fig 26　下中杖遺跡出土須恵器実測図　(2)

帯びた灰緑色で、わずかに光沢をもつ。貫入はない。口径19.8cm。全体に器壁は薄い。

青磁碗C（5）　口縁部を欠く。底部と体部との屈曲部に小さめの輪高台がつく。体部は直線的に外へ開き口縁部に至ると考えられる。外底部高台内側に白色砂の目痕が2ヵ所残るが、復元すれば4ヵ所つく。畳付部は砥石状のもので研磨する。胎土は灰白色の精製されたもので、釉薬の色調は灰緑色で光沢がある。内面に小さな貫入がある。高台径9.5cm。

青磁碗D（6、7）　器壁の厚い底部から立ち上がる体部はゆるやかに内彎しながら開き、口縁部はわずかに外反する。外底部には径が小さく、比較的幅の広い高台がつくが、高台の外側を斜めに削り取っている。体部外面の特に下半部には回転ヘラケズリによる稜が数条つく。畳付部から外底部にかけては露胎である。口径は16cm内外。文様を施さないものを碗D$_a$、体部内面および内部見込みに文様を施すものを碗D$_b$とする。

青磁碗D$_a$（6）は口縁直下内面および内底見込みの周囲にそれぞれ沈線を1条めぐらす。また内底部見込みに「金玉満堂」などの吉祥句をスタンプするものもある。6は口径16.2cm、器高6.4cm、高台径6.1cmの完形品で、灰色の強い黄緑色であるが光沢は弱い。口縁部内外に貫入の部分がある。青磁碗D$_b$（7）は口縁部直下内面に3～4条の櫛描様の沈線をめぐらせ、その連結部から下方に同じ施文具で施されたS字状の沈線で体部内面を5分割し、その中に飛雲文を施す。また沈線で画された見込みにも単純な文様を施す。7は口径16.0cm、器高7.0cm、高台径5.8cm。胎土は灰白色の精製されたもので、釉は光沢のある灰緑色だが、部分的に灰色ににじんだ部分が内外面にある。小さな貫入が内外全面にある。

青磁碗E（8）　器壁の厚い底部から内彎しながら外に開く体部がつき、口縁部はかすかに外反する。高台は幅が狭い。外面には蓮弁文を施す。8は鎬蓮弁のもので口径16.6cm、器高6.4cm、高台径5.6cmと碗Dに較べて浅くなる。胎土は灰色。釉はやや灰色がかった深みのある緑色である。

青磁碗F（9、10）　2個体とも底部から体部下半の破片である。厚めの底部からゆるやかに内彎しながら開く体部の外面には沈線による蓮弁文がつく。高台は丸味をもつ比較的高いものである。胎土はやや粗い灰白色で、釉は灰緑色をなし高台内側の下半まで施釉される。全面に貫入がある。体部外面下位に細かな沈線を2条めぐらせ、その上位に蓮弁文を施す。9は内底部見込み中央に径2.1cmの隆起した2圏に囲まれたスタンプ様の文様がつく。高台径5.1cm。外底部中央部は肥厚している。高台径5.8cm。10は内底部見込み中央に不明瞭なスタンプ文様がつく。

青磁碗G（11）　底部を欠く。体部は内彎しながら上方へ開き、口縁端部は丸く仕上げる。器体内外面に文様を施す。外面には口縁部下に雷文、その下位と外面上半にはワラビ状の草花文を描く。胎土は明るい灰色の精製されたもので、釉は灰緑色で厚い。口径22.7cmの大型品である。

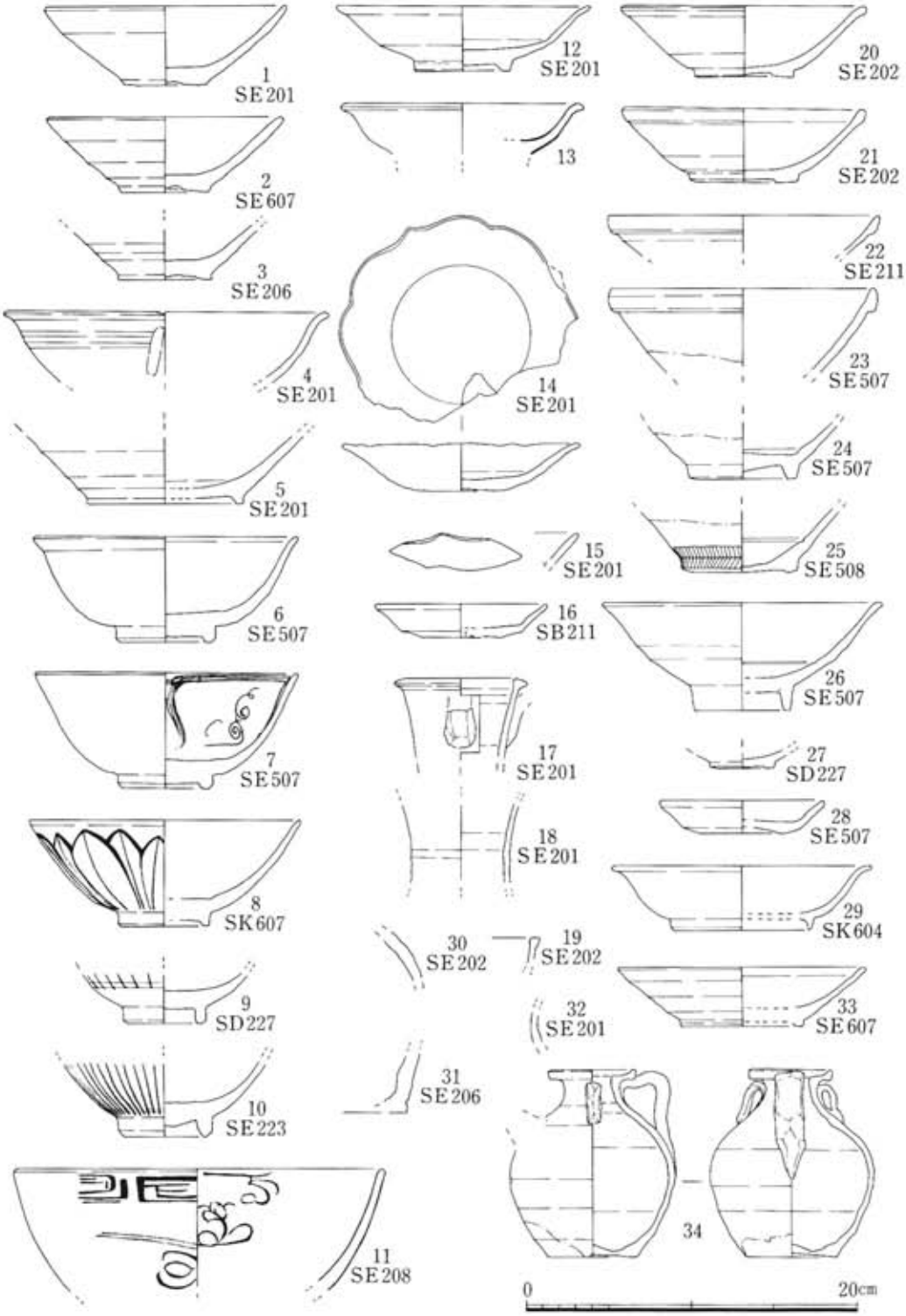


Fig 27　下中杖遺跡出土陶磁器実測図

青磁皿A（12）　短く削り出した輪高台のつく底部から外に開く体部は中央で屈曲して稜をもち、わずかに外反する。屈曲部内面には沈線をめぐらせ、高台内は丁寧に削られている。畳付部以外は全面施釉されているが、体部下半には釉が流れており、露胎の部分がある。胎土は黄褐色気味の灰色の緻密なもので、釉は灰緑色である。畳付部には黄白色砂の目痕が等間隔に6ヵ所つく。口径15.4cm、器高4.0cm、高台径5.8cm。

青磁皿B（13）　底部を欠く。体部は外に大きく開き中位でわずかに屈曲し、口縁部は外反し、肥厚している。先端は丸く仕上げる。丸味をもつ比較的高い高台がつくと考えられる。胎土は灰色で、釉は灰緑色で厚い。口径14.7cm。

青磁皿C（14、15）　高台がつかない輪花形の皿である。輪花は刳り込みを深くした4弁花形のものである。14は体部がわずかに内彎しながら、先端で外反する。内面には沈線を施し見込を画する。底部は上げ底気味で畳付部周辺では釉をかき取っている。外底部におそらく4ヵ所黄白色砂の目痕が残る。胎土はやや黄味のある灰色で精製されたものである。灰緑色の釉は全面に細かな貫入がある。口径14.4cm、器高2.8cm。15の胎土はさらに黄味がつよく、釉は黄緑色となっている。

青磁皿D（16）　小型の皿である。体部中位で屈曲し稜をもち、底部と体部の境にも稜をもつ。内面見込みには櫛状施文具による文様がつく。胎土は砂粒を含む灰色で、あまり質は良くない。釉は青味がかった灰緑色で体部から底部にかけては露胎である。口径10.4cm、器高2.0cm。

青磁水注（17～19）　口縁部から頸部にかけての破片である。17はわずかに外に開く頸部の先端に外側へ張り出す鈍い断面三角形の口縁部がつく。上面はほぼ平坦になっている。頸部には把手がつく。胎土は淡黄色の軟質のもので、釉も黄色味のつよい緑色となっている。全面に細かな貫入がある。口径8.0cm。18は頸部でわずかに外反しながら開く。胎土は黄灰色で、釉は灰緑色となっている。内外面に細かな貫入がある。19も水注の口縁部と考えられる破片で、先端を外へ屈曲させ、外側を面取りする。胎土は白灰色で、釉は灰緑色である。内外面に施釉するが、口縁部上面は釉をかき取っている。外面には細かな貫入がみられる。

白磁碗A（20、21）　いわゆる蛇目高台がつく碗で、体部はわずかに内彎しながら外に開く。口縁部は小さな玉縁状になっている。細部の形態の相違で白磁碗A_a、A_bに細分できる。

白磁碗A_a（20）は高台畳付部の内側が上がっていて床につかず、体部上位はわずかに外反する。口縁部は外側へわずかに肥厚させ玉縁状にしている。底部を除いて施釉するが、外底部に釉が残ることから、外底部、高台畳付部は釉をかき取ったと考えられ、さらに畳付部は砥石状のもので研磨している。胎土は精製された白色のもので釉はわずかに黄味を帯びた白色であり光沢がある。口径14.8cm、器高4.3cm、高台径6.0cm。白磁碗A_b（21）は高台畳付部が水平となり、外底部は丁寧にヘラで削っている。体部は内彎しながら外に開き、口縁部は外側を肥厚させ小さな玉縁としている。白磁碗A_bに較べ体部は丸味をもち深くなる。外底部は元来施釉され

ておらず、畳付部は砥石状のもので研磨する。胎土は精製された白色のもので、釉はわずかに黄味を帯びるが、白磁碗A$_a$に比べると白く、光沢がある。口径14.7cm、器高4.5cm、高台径6.5cm。

白磁碗B（22～25）　口縁部に大きめの玉縁がつくもので、高台は外側を垂直気味に、内側を斜めに削り出したものがつく。体部下位から高台、外底部は露胎である。白磁碗BⅠ、BⅡに分類でき、白磁碗BⅡは底部の形態の相違で白磁碗BⅡ$_a$、BⅡ$_b$に細分できる。

白磁碗BⅠ（22）は玉縁の外側への張り出しが小さく、器壁が薄いものである。部分的に釉が剝離している。胎土は小粒の砂粒を含む灰白色のもので、釉は緑色がかった白色である。口径16.4cm。白磁碗BⅡ(23～25)は白磁碗BⅠに比べると玉縁は大きく、器壁も厚くなっている。23は胎土は灰白色で、釉はやや茶色がかった緑灰色であり、体部下位は露胎である。口径16.2cm。24、25はこのような体部、口縁部をもつと考えられる底部である。24（BⅡ$_a$）は特に内側を斜めに削ったコ字様の高台がつき、内底部と体部との境に段をつけて見込みを画する。外底部は中央が厚くなる。胎土は灰色で、釉は灰白色である。体部下位は露胎。高台径6.5cm。25（BⅡ$_b$）は高台内側の削りが浅く、底部の器壁も薄い。高台外側から体部下端にかけて逆く字状の櫛描状の文様をめぐらす。体部内面下位に細かな沈線をめぐらす。体部下位は露胎。高台径7.0cm。

白磁碗C（26）　細く高い高台からわずかに内彎しながら開く体部は中位でやや上方に屈曲し、口縁部はやや肥厚しわずかに外反する。全体的に器壁が薄い。体部内面下位に細かな沈線をめぐらす。胎土は灰色で、釉は白色で薄い。高台外側中位から外底部にかけては露胎である。口径16.9cm、器高6.6cm、高台径5.8cm。

白磁皿A（27）　外側を垂直に内側を斜めに削った低い高台がつく小型の皿である。胎土は灰色で、釉はわずかに青味がかった白色である。高台から外底部にかけて露胎。高台径4.0cm。

白磁皿B（28）　上げ底気味の平底から開く体部は中位で上方に屈曲し稜をもつ小型の皿である。口縁端部は丸く仕上げる。内底部見込みには草花文を施す。胎土は灰色で、釉は淡い緑灰色である。外底部は露胎。口径9.9cm、器高2.0cm、底径5.0cm。

白磁皿C（29）　径が大きい細い高台のつく底部から体部はゆるやかに内彎しながら開き、口縁部は外反させて丸く仕上げる。胎土は白色で、釉は明るい灰白色。高台下半が内外とも露胎である以外は全面施釉されている。口径15.7cm、器高3.9cm、高台径8.6cm。

褐釉陶器（34）　頸部と肩部の間に対峙して2ヵ所に耳をつけ、それらの中間に対称的に大きな把手と注口をつけた水注である。上げ底気味の平底から内彎する体部は上位に最大径をもち、肩の部分から頸部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部は頸部から水平に外側へ屈曲させ、端部をつまみ上げる。胎土は灰色で緻密である。釉は暗茶褐色である。体部下位から底部は露胎。口径5.1cm、器高11.4cm、体部最大径9.9cm、底部5.4cm。

緑釉陶器（30～33）　30～32は水注か壺かと考えられる。30は肩部で外面に施釉され、内面にも一部釉が流されている。31は底部で、体部との境外面をへこませ底部を顕著にする。内面および底部は露胎である。30、31は胎土がそれぞれ黄褐色、灰黄褐色で小粒の砂粒を若干含み、釉も光沢のあるやや灰色がかったあざやかな緑色であり、同一の胎土、釉である。32は頸部で、胎土は灰色～黄褐色で小粒の砂粒を若干含む。釉はやや灰色がかった緑色で光沢がある。33は高台付皿である。器壁の厚い底部に径が大きく低い高台がつく。体部はわずかに内彎し外に開くが直線的である。口縁端部は丸く仕上げる。胎土は灰褐色できめが細かい。釉は全体にわたって剝げているが、残存する部分は光沢のある黒色に近い緑色となっている。全面に施釉されている。復元口径15.0cm、器高3.6cm、高台径7.3cm。

(8)その他の土器（Fig. 28 PL.15）

甑、擂鉢、羽釜、鉢、火舎などがある。

甑（4）　土師器である。下位が内彎する体部は上半は直立し、口縁端部上面は面取りする。体部中位の対称的な位置に2個の把手をつける。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面はハケ目調整の後ナデ。灰茶褐色で、胎土には砂粒を含む。口径25.8cm、器高26.8cm、底径8.0cm、底部孔は径6.4cm。

擂鉢（1～3）　須恵質土器である。すべて底部を欠く。体部は直線的に上方へ開くが、下位が内彎するものもある。口縁部は肥厚し、上面を面取りする。外面ハケ目、内面は1、2はナデの後、3は横方向ハケ目の後、4～6本単位の櫛目を縦方向に数条施す。口縁部はヨコナデであるが、3はハケ目で上面を面取りする。胎土にはすべて砂粒を含む。1は底径16.4cmで外面灰色で内面は黒ずんでいる。2は口径24.4cm、底径12.0cm、復元器高15.8cmで外面暗灰色、内面はやや明るい。3は口径29.2cm、灰褐色である。

羽釜（5、6）　土師質土器である。5は底部および口縁部を欠く。体部は中位で内傾し、肩が張る。体部中位に鍔がめぐる。内外面ともに器壁が荒れているが、ナデで整形している。本来は灰茶褐色であるが、内面と外面体部下半には黒色の煤が付着する。胎土には砂粒を含む。残存器高11.8cm、鍔部残存径27.2cm。6は底部を欠く。体部上位で肩が張り、口縁部は直立し上面は面取りする。体部中位に鍔をめぐらし、体部上位から肩部にかかる部分に半円形の鈕が対称的な位置に2個つく。口縁部から外面はナデ、内面は上半が、横方向の細かなハケ目、鍔部内面はナデの後指押さえ。内面とも黒色の煤が付着する。胎土は灰黄褐色で細かい砂粒を若干含む。口径15.4cm、器高は16cm内外になろう。

鉢（7～12）　土師質土器である。ほとんどが底部を欠く。体部は直線的に開き、口縁部は折り曲げたり、張り付けて外側へ突出させ体部の開きを補強しており、上面は面取りする。口径44.0cmの11を除けば口径は33.5～37.0cmにおさまる。外面は横方向へのナデつけ、内面はナデか、横方向ハケ目の後ナデ。外面にはすべて黒色の煤が付着する。色調は灰褐色～暗灰褐色

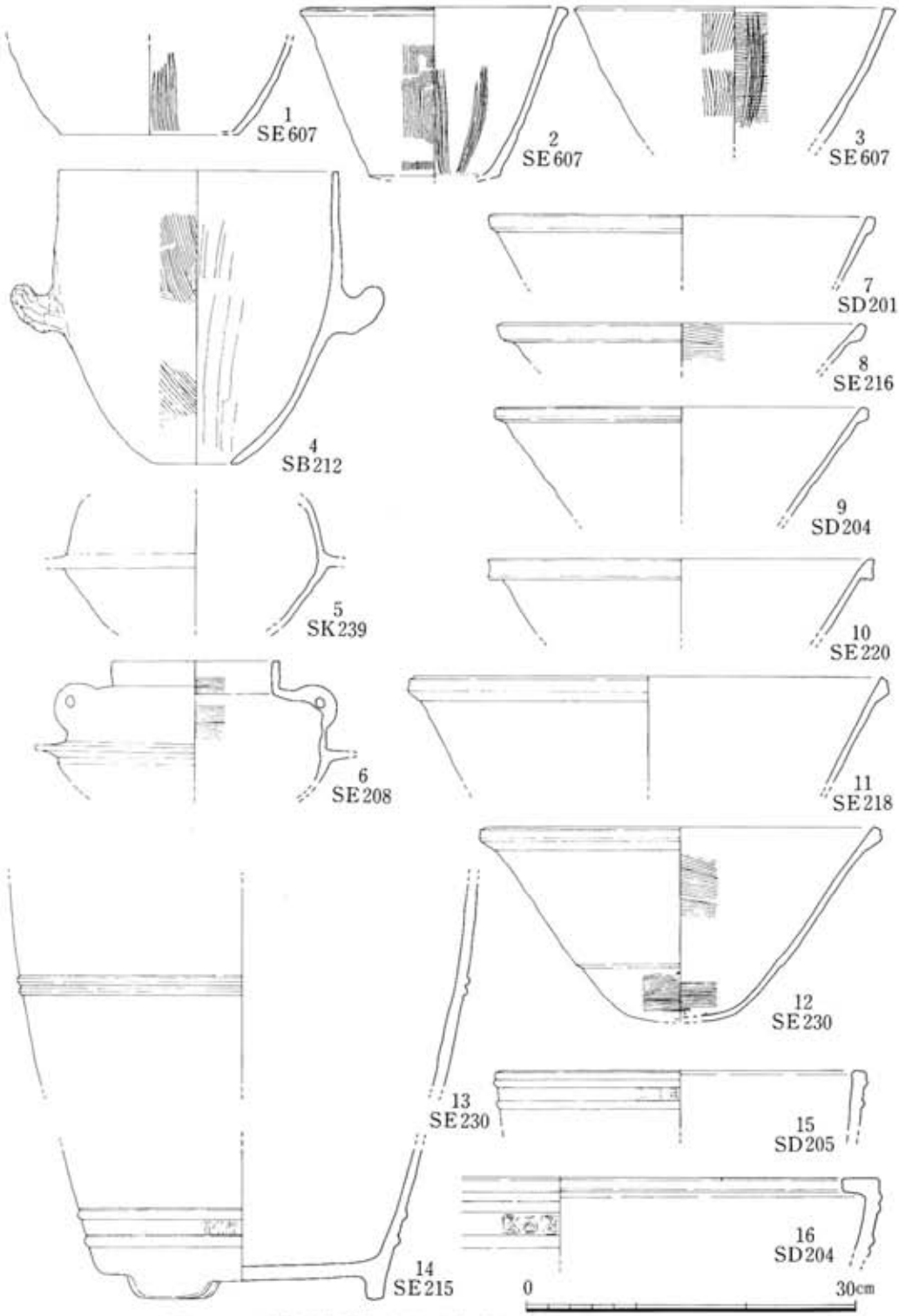


Fig 28　下中杖遺跡出土土器実測図

で、胎土中に砂粒を含む。12はほぼ完形品で、底部は丸底で、底部と体部との境に段をつける。底部は内外とも横方向の細かいハケ目が残る。口径36.8cm、器高17.8cm。

火舎（13～16）　すべて土師質土器である。15は直立する口縁部で、上面は面取りする。口縁直下と、1.2cmの間隔をもって下位にそれぞれ1条の断面半円形突帯をめぐらせ、間に雷文状のスタンプを連続的に施す。内面ナデ、外面は磨きと思われる。淡い黄土色で、胎土には微細な砂粒と雲母片を含む。口径34.2cm。16はL字形に内側へ屈曲する口縁部で、内側は面取りし、上面も平坦にする。口縁直下と、2cmの間隔をもって下位にそれぞれ2条の断面半円形突帯をめぐらせ、間に3重の口に×の入った雷文状のスタンプを連続的に施す。内外面ロクロナデ、黄土色で胎土には微細な砂粒をわずかに含む。口径59.0cm。13は上方へ開く直線的な胴部で、破片の中位に断面半円形突帯が間隔なく2条めぐる。内外面ともロクロナデ。色調は黄灰褐色だが外面は黒ずんでいる。胎土には微細な砂粒と雲母片をわずかに含む精製されたものである。突帯部径41.6cm。14は底部である。径の大きい平底からわずかに外に開きながら上方へ屈曲する体部は直線的である。底部には幅約8cm、高さ約2cmの足が3個等間隔につく。底部と体部の境やや上方に1.6cmの間隔をもって2条の断面半円形突帯が2条めぐり、間にS字状のスタンプを連続して施す。内面ナデ、外面は足の内側までミガキ、外底部は磨耗して不明である。底径26.8cm。

(9)土製品（Fig. 29）

土製品は鏡と錘が出土した。1は手捏ねの模造品で、中央をつまみ出して鈕をつくり、両側から穿孔する。鈕の部分の厚さ1.0cm、復元径3.5cm。2、3、4は管玉状の錘で、縦方向にナデつけて整形している。胎土にはあまり砂粒を含まず、色調は淡い褐色である。1は長さ5.1cm、最大径1.1cm、2は長さ5.2cm、最大径1.25cm、3は最大径1.4cmとやや大きくなる。

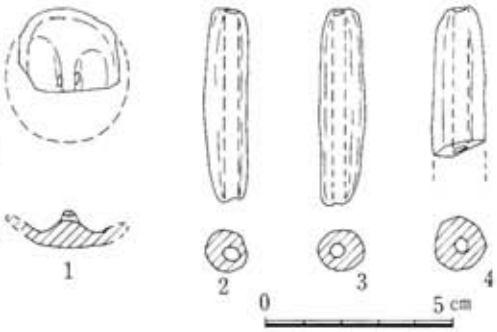


Fig 29　下中杖遺跡出土土製品実測図

(10)石製品（Fig. 30. PL. 17）

砥石、石臼、挽臼などが出土している。砥石はすべて竪穴住居跡から、石臼、挽臼は溝から出土した。

砥石（1～3）　1は硬質の砂岩製で、表裏2面を使用しているが、その片面には径4cmの打ちつけたようなくぼみが見られる。現在長11.4cm、厚さ5.5cm。2は粘板岩製で、上下面を除く4面を使用している。長さ11.2cm、最大幅4.0cm、最大厚2.2cm。3は硬質の砂岩製で、上面を除く4面を使用するが、右側面の砥き跡は幅1.2cmの溝状になっている。

石臼（4、5）　4は砂岩製で口縁部である。口縁端部上面は平坦になる。臼部は浅く、体

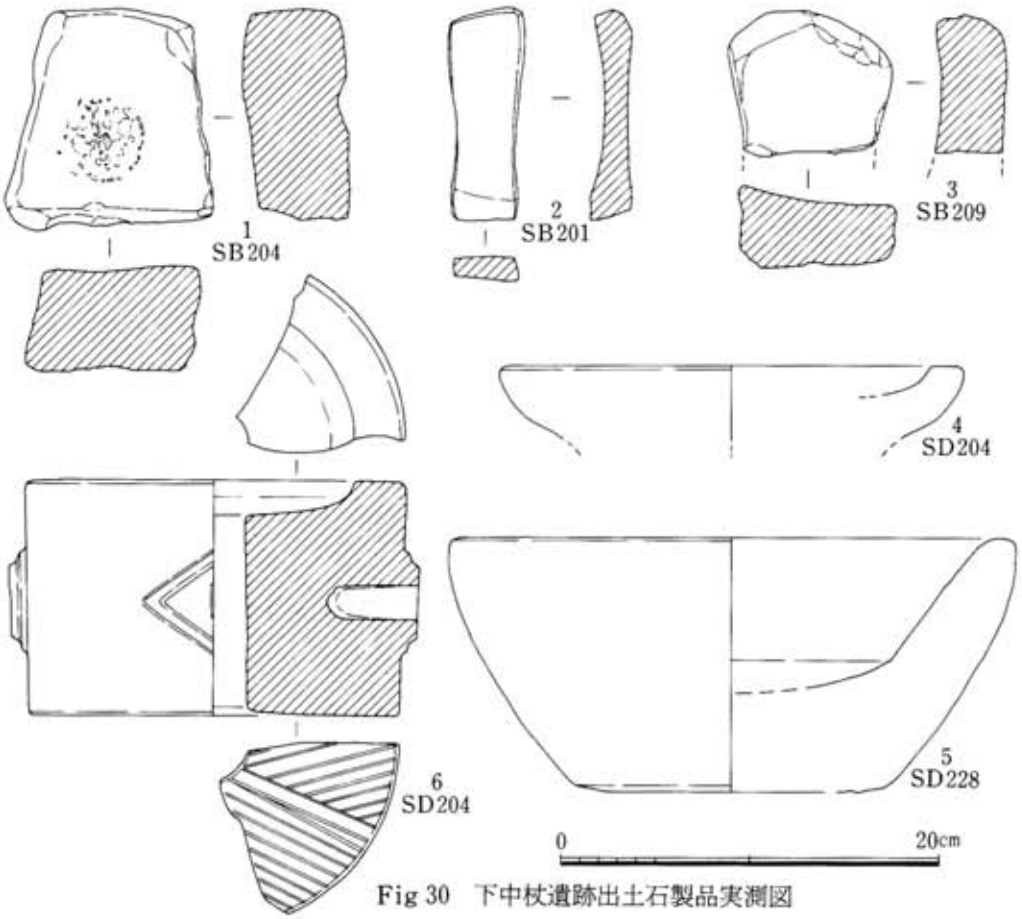


Fig 30　下中杖遺跡出土石製品実測図

部外面は下方へ屈曲するものと考えられる。口径24.6cm、体部の厚さ2.2cm。5は鉢状の石臼で、口縁端部は丸い。砂岩製。口径30.0cm、器高13.4cm、底径16.4cm。

挽臼（6）　砂岩製で円筒形をなす。径20.3cm、高さ12.4cm。外面中央には、浮き彫りされた菱形の座の中央におそらく1辺1.8cm、深さ5.0cmの挽き手を差し込む孔を施す。上面には径15.0cm、深さ2.0cmのくぼみをもち、その中心から線刻を施す下面まで径3.4cmの孔を穿つ。

(11)木製品（Fig. 31～34 PL.16.17）

すべて井戸跡から出土したもので、鞍、漆器碗、鎌など金属器を取り付ける柄、糸車の破片、曲物の底部、櫛、下駄、かんざし、その他用途不明のものがある。

鞍（Fig. 32）　鞍橋の前輪の部分で完形品である。山形の彎曲は少なく、肩がやや張り、雉子股はわずかに外方へ反る。内側には洲浜形をくり込み、雉子股にそれぞれ2個の綏付をくり込む。綏付のわきにはそれぞれ2個ずつ居木を固定するための孔を穿つが、この孔と綏付との間には居木を結束した痕跡が明瞭に残っている。雉子股の下位には綏通孔をそれぞれ2個穿つ。洲浜形、山形から爪先にかけての本来前方へ突出する部分は二次的に削られ、突出の度合いは

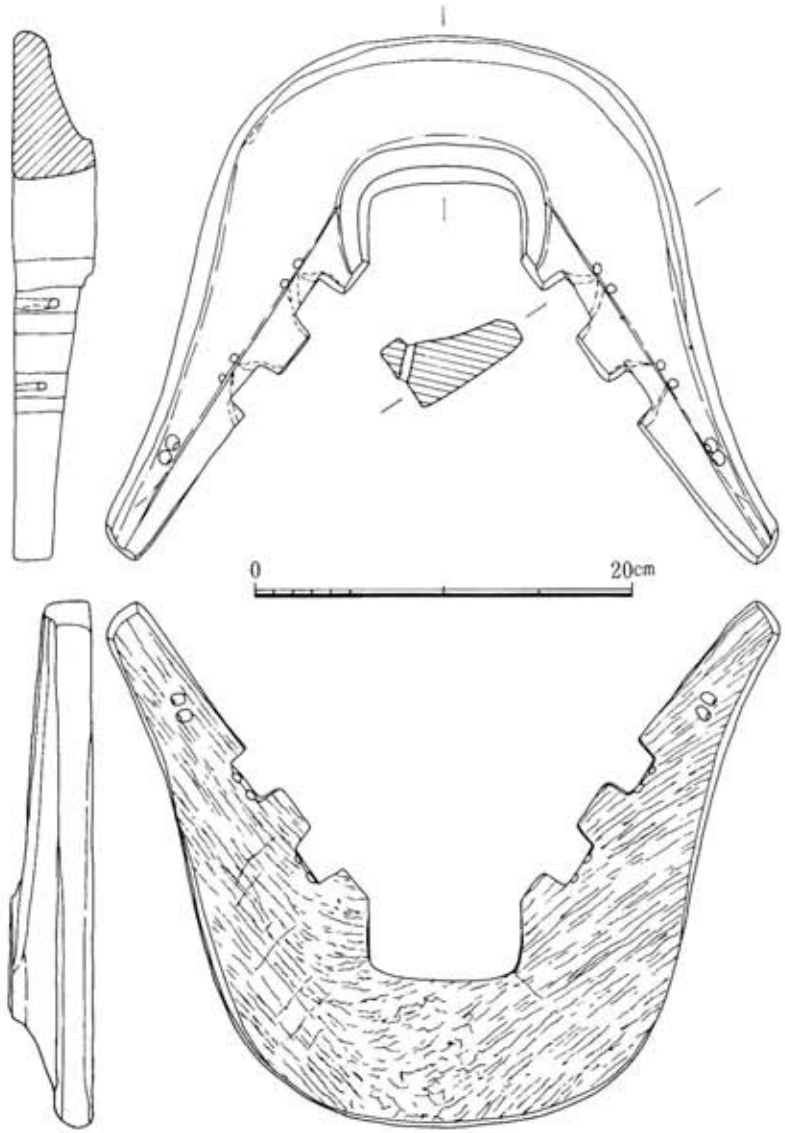


Fig 31　下中杖遺跡SE202出土鞍実測図

小さくなっている。覆輪をつけた痕跡は認められない。前面は黒漆塗りだが、先の削られた部分と裏面は素地が露出する。裏面の木目の方向をみると、磯の部分で屈曲して、それぞれ爪先の方へ走る。このことは枝分かれ(股)の部分を素材として用いたことを示している。高さ27.8㎝、馴目の幅35.5㎝、洲浜形の部分の厚さ4.4㎝。居木先露出型の4枚居木鞍の前輪であろう。

漆器碗（1～4）

高台を削り出した碗で、文様のつくものとつかないものがある。1は外に開く低い高台がつき、体部は高台やや外側から屈曲して上方に開く。口縁部は欠く。器壁は底部が厚く、体部は薄い。黒漆を全面に塗った後体部内外にそれぞれ5ヵ所と、内底部見込みに水仙の花と思われる丸文を赤漆で描く。また外底には8の字状の記号を陰刻する。高台径7.6㎝。2はわずかに外に開く低い高台がつき、体部は内彎しながら開く。口縁部をU字形に削り耳杯状にしている。黒漆塗りだが剝落が多い。外底部中央に8の字と十の字が組み合ったような記号を陰刻する。器壁は底部が薄く、体部が厚い。最大口径14.8㎝、器高7.2㎝、高台径7.9㎝。3は口縁部の破片で、外面は黒漆を塗った後、赤漆で菊と思われる文様を施している。内面は赤漆。4は底部の破片で比較的高い高台がつく。黒漆を全体に塗布する。高台径8.1㎝。

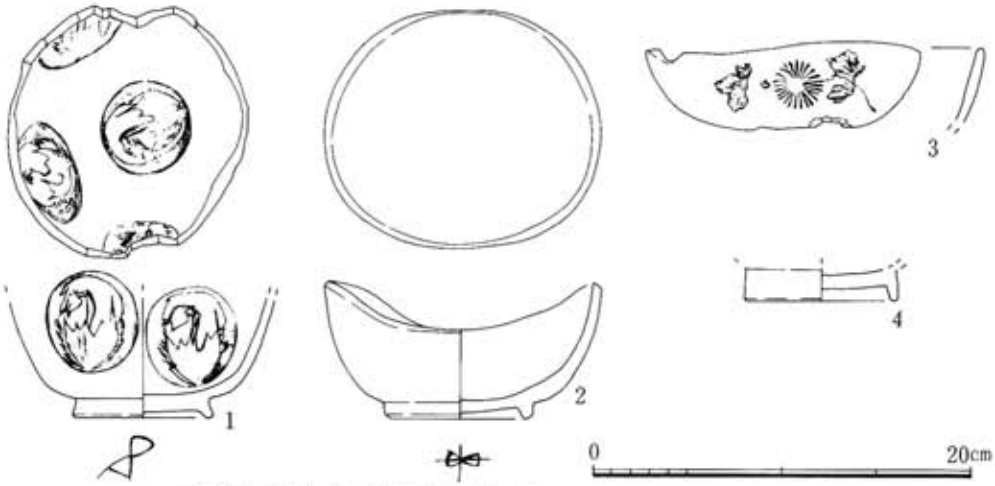


Fig 32　下中杖遺跡出土木製品実測図　(1)

5は人形状の加工品である。上端とやや下位にえぐりを入れる。下位は次第に幅が狭くなる。全長56.8cm、最大幅は上端付近で11.4cm、最大厚は上位で7.6cm。6は鍬状のもので、菱形の鋭角の先端を2ヵ所切断した形状のものである。中央に径6.0cmから4.6cmと一方が狭くなる孔を穿って、柄を差し込むようにしている。片面は平面であるが、一方は孔の付近から両端に向かって削っている。全長44.2cm、中央幅10.4cm、両先端幅4.0cm、中央部厚2.8cm。

7は鎌の柄かと考えられる。丸木の両側を面取り、上端からU字形に切り込みを入れ、利器と柄を固定するための四角形の孔を穿つ。全長21.4cm、最大幅4.3cm、最大厚3.6cm。8も柄と考えられる。丸木を削って柄部を作り、上端は両面を削り、削り面と平行に縦に割れ目に差し込んだと考えられるクサビが入っている。表面には樹皮がそのまま残存している部分がある。全長26.6cm、下端の厚さ3.8cm。クサビは長さ5cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm。

枠（糸巻き）（9～12）　すべて糸巻きの枠木であり、中央部付近で折れている。断面が矩形に近いもの（9、11、12）と扁平なもの(10)がある。側面を山形に残して切り込み、その頂部に横から目釘穴をあける。9は現在長16.7cm、山形部幅2.4cm、最大厚2.6cm。10は現在長12.4cm、山形部幅3.8cm、厚さ1.3cm。11は現在長15.4cm、山形部幅2.2cm、厚さ2.4cm。12は現在長18.4cm、厚さ2.6cm。

13は長さ22.2cm、幅1.6cm、厚さ0.8cmの細長い板で、一方の先端は切り落すように刻みを入れ、折り曲げ、他方は斜めに削っている。折り曲げた側の先端近くと中央にそれぞれ1個目釘穴をあけ、他方の先端近くの一方の側面にはとじ合わせるためか皮が付着している。

曲物底板（14～16）　14は厚さ0.8cm、復元径19.2cm。割れ口と平行に細い溝を入れ、外辺部に目釘穴をあける。15は円形底板の半分で、径18.4cm、厚さ1.1cm。弦の両端やや中心部寄りにそれぞれ2個と1個の小孔を穿ち、2板の半円で1つの底板としたものらしい。16は復元径32.4cmと大型で片面は丸味をもつが、他面は平面で、割れた部分周辺の片面が焼けている。厚さは

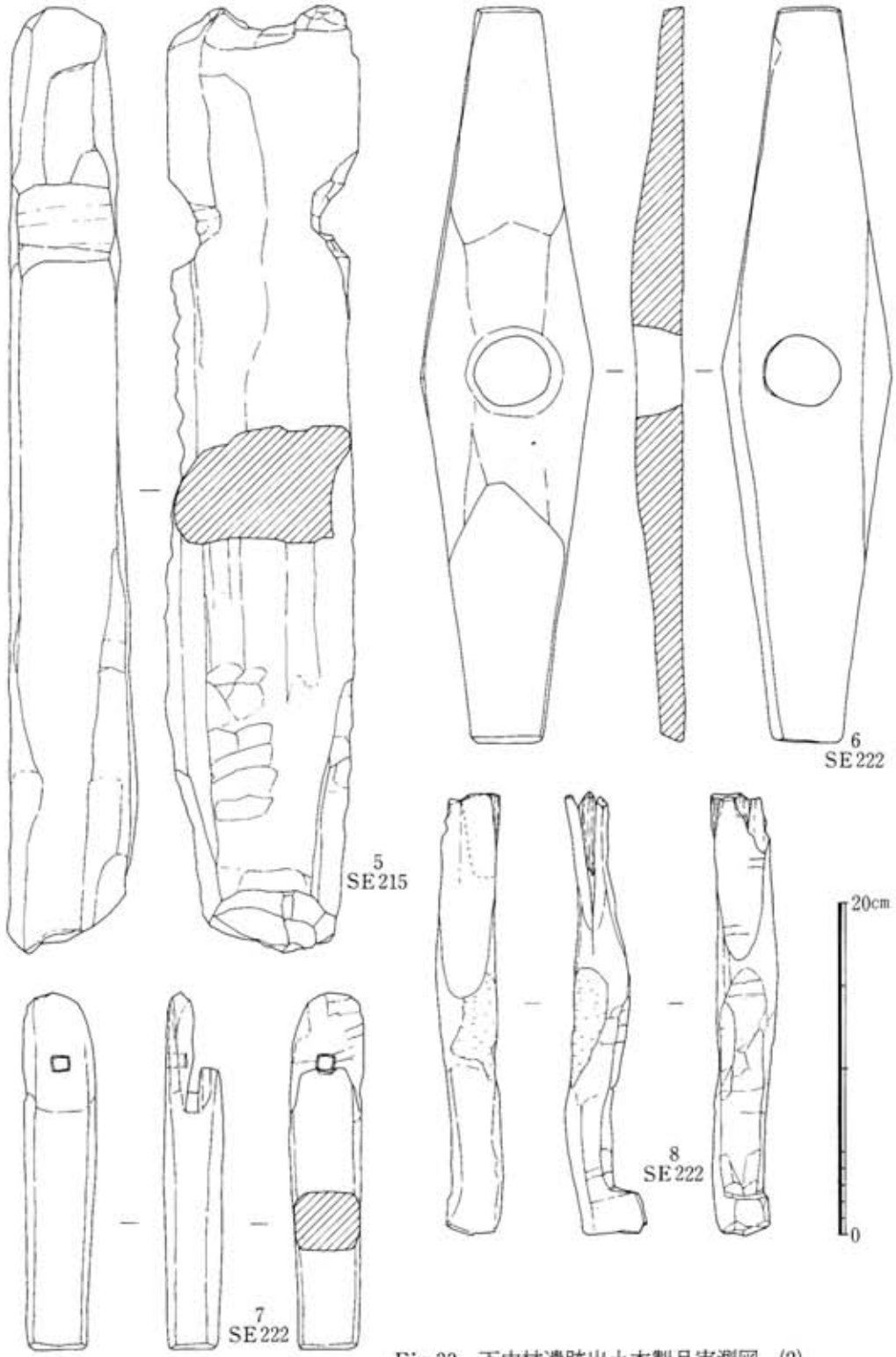


Fig 33　下中杖遺跡出土木製品実測図　(2)

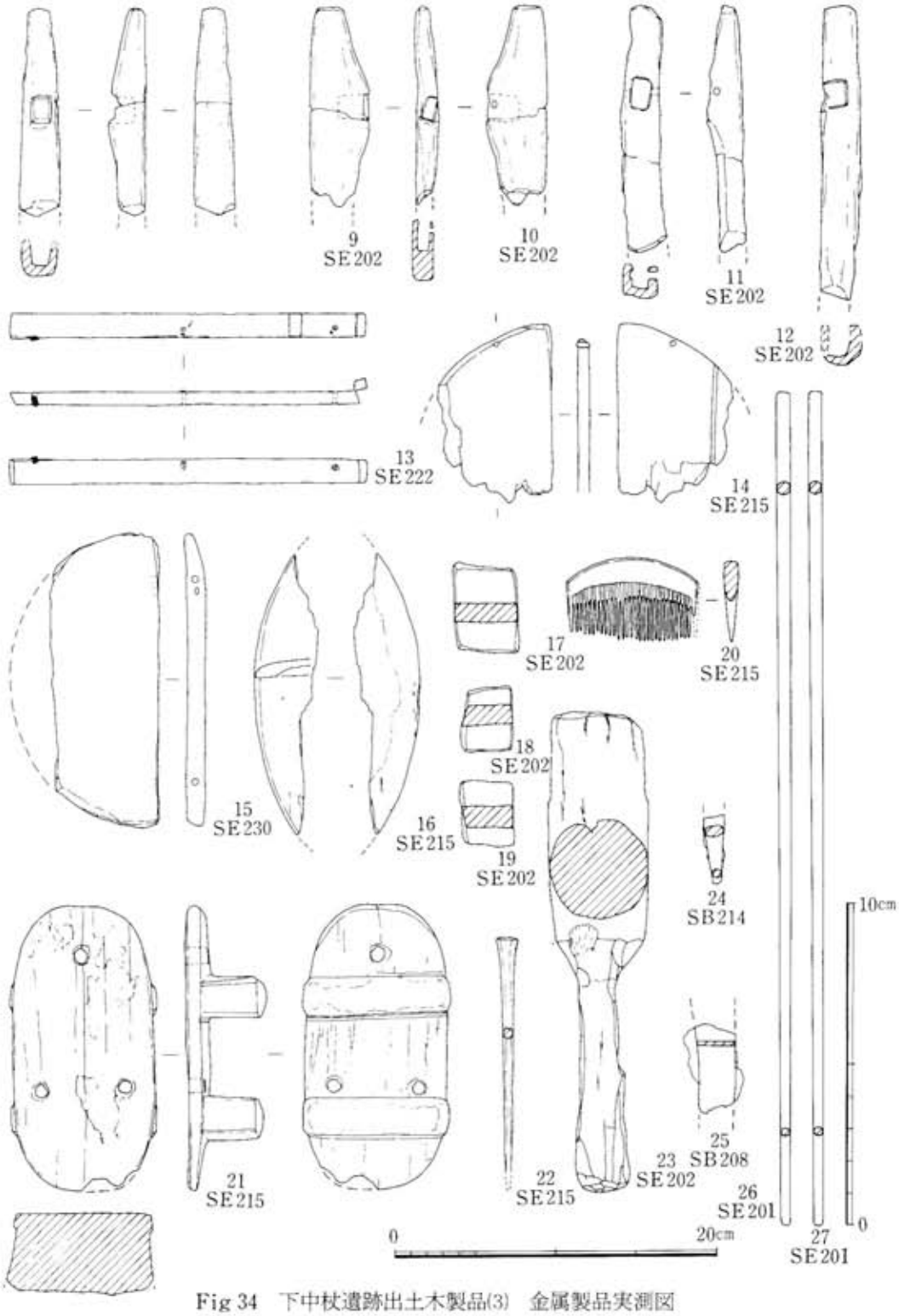


Fig 34　下中杖遺跡出土木製品(3)　金属製品実測図

0.9～1.0cm。

木片(17～19)　用途不明の小さな方形に近い長方形の板である。17は5.4cm×4.0cm、18は4.0cm×3.3cm、19は4.0cm×3.4cmで、厚さはすべて1.2cm前後である。

櫛(20)　背の彎曲がつよい横櫛である。両側は下方へわずかに狭くなる。歯は両側を除いて28本つく。幅8.2cm、高さ5.2cm、厚さ1.0cm。

下駄(21)　長楕円形の台に台形状に下方へ開く歯が2枚つく。歯と台部とのつけ根には歯を切り出す際の刃跡が残る。鼻緒孔の位置は正二等辺三角形をなし、前後とも径0.8～0.9cmで垂直に穿つ。台部は長さ17.8cm、幅9.0cmで下面は丸味をもつ。刃の下端は磨滅しているが総高5.2cm。台部上面には部分的に赤漆が付着する。

かんざし(22)　先端をわずかに欠く。断面円形で頭の径1.1cm、先端へ次第に細くなる。縦方向の丁寧な削りがみられる。現在長14.7cm。頭上面に赤漆が付着する。

砧(23)　径約6.0cm、長さ29.8cmの丸太材のほぼ中央より下位を削り柄にしている。

(12)金属製品(Fig. 34 PL. 17)

鉄製品と青銅製品がある。

鉄器(24、25)　24は刀子の柄部と考えられる。現在長4.2cm。25は利器と考えられるもので、断面は長方形である。現在長4.6cm。

青銅製箸(26、27)　2本まとまって出土した。2本とも同法量でセットになる。基部から先端方向に次第に細くなる。縦方向に研磨し、基部端にも研磨を加えて平面にしている。26はやや黒ずんだ暗緑色、27は金色がかった明るい緑色で、先端付近はどちらも金色にちかくなっており、使用のあとがうかがえる。

銅銭(Fig. 35. PL.17)　SD227溝から洪武通寶5、世高通寶1の計6枚、SP218土壙墓から洪武通寶28、永楽通寶4、宣徳通寶1、大中通寶1、朝鮮通寶1、世高通寶1の計36枚、B区表土中より洪武通寶1、元祐通寶1が出土した。

Tab. 6　下中杖遺跡B区出土銅銭一覧表

番号	銭貨名	外径 水平	外径 垂直	外縁厚	出土遺構	初鋳年	備考
1	洪武通寶	23.10	23.33	1.72	SD227溝	明　太祖　1368	
2	〃	23.48	23.77	1.42	〃	〃	
3	〃	22.86	23.06	1.82	〃	〃	
4	〃	23.40	23.18	1.76	〃	〃	
5	〃	22.78	22.72	1.78	〃	〃	背面に「錢」の鋳印
6	世高通寶	22.50	22.90	1.35	〃	琉球　王徳　1461	
7	洪武通寶	23.48	23.38	1.55	SP218土壙墓	明　太祖　1368	
8	〃	23.16	23.28	1.53	〃	〃	
9	〃	23.03	23.35	1.63	〃	〃	
10	宣徳通寶	25.90	25.57	1.20	〃	明　宣宗　1433	
11	大中通寶	23.20	23.08	1.30	〃	元　朱元璋　1361	
12	朝鮮通寶	24.22	24.02	1.55	〃	朝鮮　世宗　1423	
13	洪武通寶	22.88	23.08	1.72	〃	明　太祖　1368	
14	〃	23.14	23.10	1.68	〃	〃	

15	洪武通寶	23.04	23.00	1.36	SP218土壙墓	明	太祖	1368	
16	〃	23.16	23.32	1.56	〃		〃		
17	〃	23.70	23.04	1.16	〃		〃		
18	〃	23.22	23.20	1.26	〃		〃		
19	〃	23.34	23.26	1.20	〃		〃		
20	〃	22.52	22.55	1.80	〃		〃		背面に「錢」の鋳印
21	〃	23.18	23.32	1.78	〃		〃		
22	〃	23.28	23.22	1.40	〃		〃		
23	〃	23.80	24.10	1.42	〃		〃		
24	〃	23.38	24.24	1.66	〃		〃		
25	〃	24.44	24.20	1.46	〃		〃		
26	〃	23.92	23.98	—	〃		〃		
27	〃	21.46	21.94	1.56	〃		〃		
28	〃	23.62	23.32	1.74	〃		〃		
29	〃	23.20	23.48	1.70	〃		〃		
30	〃	22.44	22.33	1.51	〃		〃		背面に「錢」の鋳印
31	〃	24.23	23.78	1.44	〃		〃		
32	〃	23.91	24.10	1.64	〃		〃		
33	〃	22.42	22.60	1.60	〃		〃		
34	〃	23.04	23.10	1.80	〃		〃		
35	〃	23.50	24.32	1.34	〃		〃		
36	〃	—	—	1.54	〃		〃		
37	洪□□寶	—	—	1.64	〃		〃		洪武通寶
38	永樂通寶	25.52	25.60	1.36	〃	明	成祖	1403	
39	〃		25.14	1.16	〃		〃		
40	〃		25.10	1.28	〃		〃		
41	〃	25.02	24.84	1.20	〃		〃		
42	世高通寶	23.42	23.22	1.52	〃	琉球	王德	1461	
43	不　明	—	—	—	〃				
44	洪武通寶	22.80	22.84	1.52	B区表土中	明	太祖	1368	背面に「錢」の鋳印
45	元祐通寶	—	24.58	1.26	〃	宋	啓宗	1086	

（単位mm）

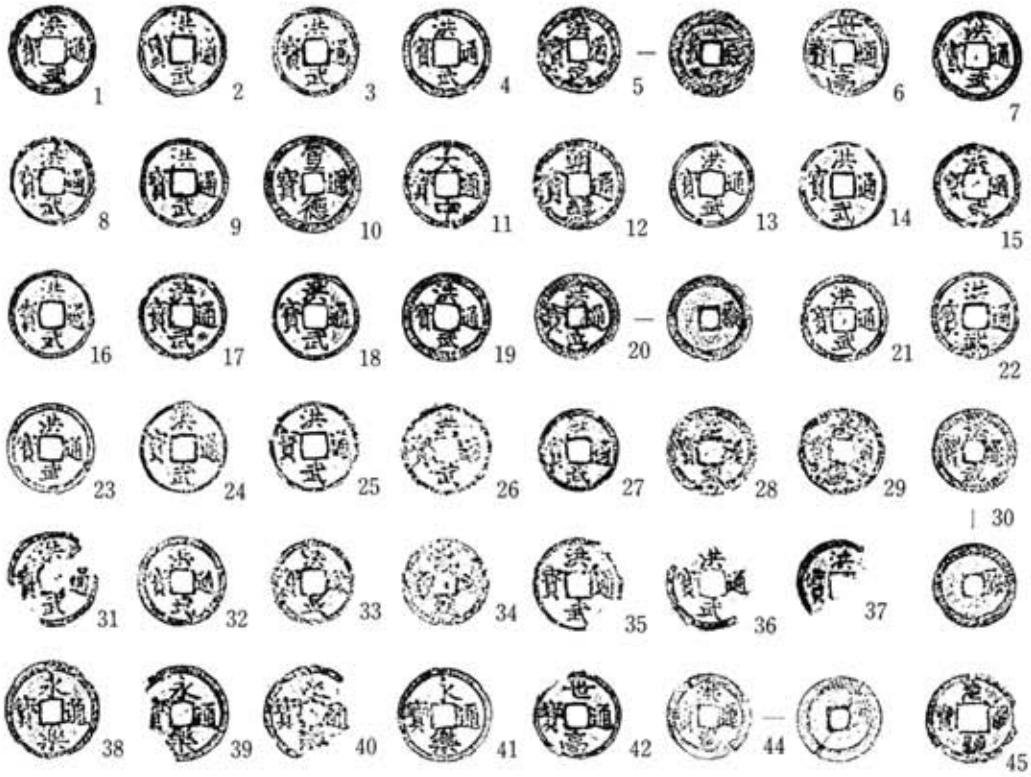


Fig 35　下中杖遺跡B区出土銅銭拓影　(1/2)

Ⅳ、Ｂ区以外の調査

下中杖遺跡では、集落の東側に位置するＢ区以外に、集落の西側Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｈ区の調査を行っている。本項では、これらの調査区の概要を紹介するに留め、詳細については省く。なお、調査区の位置関係から、Ｄ、Ａ・Ｆ、Ｃ・Ｈ区にまとめ、あわせて一括遺物を出土しているＳＫ513土壙、ＳＥ507・607井戸にふれる。

１、Ｄ区の調査（折り込み１）

今調査区のなかでもいちばん北側に位置し、調査面積は約550㎡である。主な遺構は、甕棺墓、土壙、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝、柱穴など、弥生時代～古墳時代にかけてのものが多い。

甕棺墓は７基あり、南東部分に集中している。墓壙および棺上部は削平を受け、形跡を一部残すのみである。時期は弥生時代前期末～中期初頭にかけてのものであり、棺底部に穿孔している甕棺もある。

土壙は26基検出し、主に弥生時代～古墳時代の遺物を出土している。平面は方形、長方形、円形など形が整っているものと不整形なものがあり、数的には不整形なものが多い。ほとんどの土壙が削平を受け、底面までの深さはわずかである。

竪穴住居跡は東側と西側に１軒ずつあり、双方とも調査区の関係で全容を明らかにすることはできなかった。ＳＢ401・402住居跡とも平面は方形で、１辺の長さ4.5ｍ以上、残存壁高は0.1～0.2ｍある。遺物は土師器が出土しており、古墳時代後期のものである。

掘立柱建物跡は、１間×１間の建物で５棟確認している。ＳＢ403（桁行３ｍ、梁行2.4ｍ、棟方向Ｎ―Ｗ62°）、ＳＢ404（桁行3.3ｍ、梁行2.4ｍ、棟方向Ｎ―Ｗ47°）、ＳＢ405（桁行2.5ｍ、梁行2.3ｍ、棟方向Ｎ―Ｗ38°）、ＳＢ406(桁行2.7ｍ、梁行2.1ｍ、棟方向Ｎ―Ｗ71°)、ＳＢ407(桁行3.1ｍ、梁行2.4ｍ、棟方向Ｎ―Ｗ48°)建物跡の５棟であるが、柱穴よりの出土遺物が少なく、時期は不明である。

井戸跡は、ＳＥ401井戸がひとつだけで、調査区西端に位置する。平面は円形で、直径約２ｍ、深さ約２ｍの素掘りの井戸である。土師器の壺が出土しており、古墳時代後半のものであろう。

溝は、調査区西端に位置し、２条検出している。ＳＤ401(幅約1ｍ、深さ約0.5ｍ)、ＳＤ402(幅約１ｍ、深さ約0.3ｍ）溝は、北東から南西へかけて並行している。

２、Ａ・Ｆ区の調査（折り込み１）

Ａ・Ｆ区は集落の西側に位置し、Ｆ区は南北方向、Ａ区はＦ区から派生する東西方向の水路部分にあたる。調査区の面積は、Ａ・Ｆ区合わせて約2,040㎡である。主な遺構は、甕棺墓、土

壙墓、土壙、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝などである。

甕棺墓は、A区の中央部に2基あり、いずれも墓壙および棺上部は削平を受けている。SJ101甕棺墓は甕を倒置している単棺で、弥生時代前期末のものである。また、A区の北側では工事中に2基の甕棺墓が露出し、その他に甕棺墓の墓壙が数基確認されており、墓域はA区から北側にかけて広がっていると考えられる。露出した2基の甕棺は中期前半のものである。

土壙墓は、SJ101、102甕棺墓の南東に位置し、B区以外での土壙墓はこの1基のみである。

土壙は35基あり、大半は上部の削平を受け全体的に浅い。D区の場合と同じく、平面形が整っているものは少なく、不整形な土壙が多い。SK511、513土壙は、弥生時代中期の土器が一括して出土している。

竪穴住居跡は、A区で2軒検出しているが、2軒とも調査区域にはその一部分しかかかっていない。平面方形の住居跡であろう。床面直上から古墳時代後半の土師器の甕が出土しており、この時期に相当する住居跡である。

掘立柱建物跡は10棟あり、2間×1間と1間×1間の建物である。2間×1間の建物は、A区のSB103(桁行5.1m、梁行1.8m、棟方向N—W45°)、SB104(桁行2.5m、梁行1.5m、棟方向N—W49°)建物跡2棟と、F区のSB501(桁行4.8m、梁行1.8m、棟方向N—E70°)、SB502(桁行4.2m、梁行2.7m、棟方向N—E70°)、SB504(桁行3.6m、梁行2.6m、棟方向N—E50°)、SB505(桁行4.6m、梁行3m、棟方向N—W46°)、SB506(桁行4.2m、梁行2.7m、棟方向N—E45°)、SB507(桁行3.6m、梁行3.4m、棟方向N—E47°)、SB508(桁行2.7m、梁行1.8m、棟方向N—E33°)建物跡7棟の計9棟である。1間×1間の建物は、F区のSB503(桁行2.8m、梁行2.1m、棟方向N—E49°)建物跡の1棟のみである。これらの建物跡の多くは、鎌倉時代前後のものと考える。

井戸跡は、A・F区合わせて17ヵ所あり、すべて素掘りである。一段掘り、二段掘り、三段掘りの3形態がみられ、二段掘りの井戸が大半を占める。二段掘りのなかには、いわゆる漏斗状のものと、はっきりとした段をもつものの2通りがある。特にSE507、508井戸からは土師器、瓦器、輸入陶磁器などが一括して出土している。SE507井戸は12C中項～13C初め、SE508井戸は12C中項に比定できる。

溝は、A・F区合わせて11条あり、ほとんどが幅0.7m前後、深さ0.3m前後のものであるが、SD501・502・506溝は他の溝に比べ幅が広い。特にSD501溝は幅が3mを超え、調査区を東から西へ横切っている。調査区が水路幅と狭く、これらの溝と他の遺構との関連は摑み得なかった。

3、C・H区の調査（折り込み2）

C・H区は集落の南西側に位置する。現況は畑、雑木林で、水田面に比して微高地となって

いる。この地区は工事削平部分の約2,950㎡の調査を行った。

主な遺構は、土壙、掘立柱建物跡、井戸跡、溝、その他に規模の大きな土壙があり、池の跡ではないかと考える。

土壙は38基あり、調査区全体に広がっている。平面は円形、方形など整っているものが多い。時期は弥生～鎌倉時代までと様々だが、他の区域に比べ弥生時代の土壙が多く、ＳＫ603・605土壙などは中期の貯蔵穴であろう。

掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱の建物が3棟、2間×2間で庇のつく建物が1棟、2間×1間が1棟、1間×1間が3棟の計9棟である。2間×2間の総柱の建物は、ＳＢ302（桁行3.4m、梁行3m、棟方向N—W 10°）、ＳＢ601（桁行4.2m、梁行3.6m、棟方向N—E 90°）、ＳＢ603（桁行4.2m、梁行3.6m、棟方向N—E 88°）建物跡である。ＳＢ601・603建物跡は、両建物間が約5mで、規模、棟方向も同一に並んでおり、倉庫跡と考えられる。ＳＢ604建物跡は2間×2間の身舎の西側に庇をもつ建物である。身舎の桁行は3.9m、梁行は4.8m、庇は幅1.6m、棟方向はN—W 88°である。2間×1間の建物は、ＳＢ305（桁行3.6m、梁行1.5m、棟方向N—E 88°）、ＳＢ602（桁行3.3m、梁行1.9m、棟方向N—E 11°）建物跡の2棟、1間×1間の建物は、ＳＢ301（桁行2.4m、梁行1.8m、棟方向N—W 84°）、ＳＢ303（桁行2.4m、梁行2.1m、棟方向N—E 72°）、ＳＢ304（桁行2.4m、梁行1.8m、棟方向N—W 75°）建物跡の3棟である。

井戸跡は、すべて素掘りのもので31ヵ所検出している。A、F区同様二段掘りが圧倒的に多い。ＳＥ309・312・313・318・604・607井戸からは、土師器、輸入陶磁器などが一括して出土している。ＳＥ607井戸は9Ｃ後半、ＳＥ309・318井戸は10Ｃ初～中頃、ＳＥ312・313井戸は12Ｃ中頃、ＳＥ604井戸は13Ｃ中頃に比定でき、平安～鎌倉時代に至るものが多い。ＳＥ603井戸は、他のものに比べその規模がはるかに大きい。平面は円形で、直径約5.4m、深さ約3.7mの二段掘りである。上面より約1m付近には礫石、輸入陶磁器などが集中し、下駄も出土している。同じ高さで焼土や灰を検出している。さらに1mほど下がったところでは、壁を掘って杭を挿入し、それを交互に組み合わせており、杭の一番長いもので2.44mを測る。この遺構を一応井戸として取り扱っているが、別の用途に使われた可能性もあり得る。時期は室町時代であろう。

溝は11条あるが、幅は1m前後で浅いものが多い。

池跡と考えられるＳＫ301遺構はＣ区の中央に位置する。長さ約8m、幅約4.5m、深さ約1.5mあり、人頭大の石が多く混入している。

柵は、ＳＤ311溝の西約2mのところにあり、ＳＤ311溝に沿っている。柱穴は一辺の長さが約1m、柱穴間は約2.7m、中央付近で3.6mのところがある。柵方向はN—E 24°である。

4、ＳＥ 507 井戸跡と一括遺物

(1)遺構

(Fig.36

PL. 8)

Ｆ区南部に位置する素掘りの二段掘井戸である。平面は円形で、直径2.83ｍ、深さ2.21ｍ、底より 0.7ｍ上で段をもち、径は1.17ｍある。遺物は井戸東側に広がり出土している。特に底より 0.4 ～ 0.5ｍ上で出土している青磁碗２個体は完形品である。

(2)遺物

(Fig. 37)

ＳＥ 507 井戸からは、土師器、瓦器、青磁、

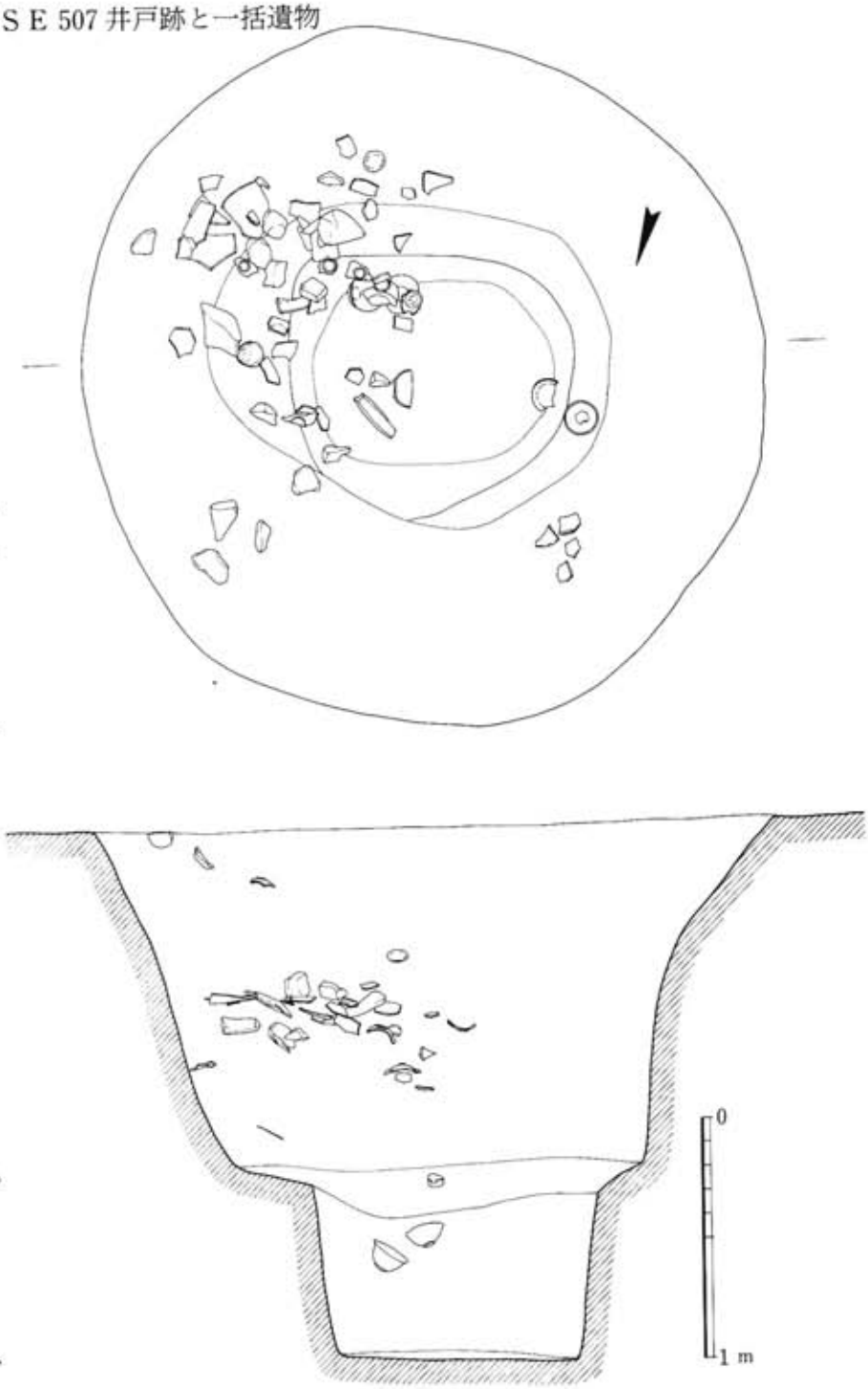


Fig 36　下中杖遺跡ＳＥ507井戸跡実測図

白磁、陶器、須恵質土器、土師質土器が出土している。

土師器（1～8）

杯（5～8）　いずれも底径が大きい平底で、口縁部がやや内彎しながら外に開くCⅣ$_b$類である。口径は13～14.3cm、器高は2.3～3.2cmあり、底部外面は糸切り離しで、板状圧痕（5、7）もみられる。内面は指による不定方向のナデ、口縁部は内外面ともロクロナデ調整である。

小杯（1）　口径8.6cm、器高1.6cmである。底部は平底で、口縁部は短く直線的に開いている。器壁は口縁部に比べ底部が数段厚い。底部外面は糸切り痕と指頭圧痕が残り、内面はナデ、口縁部内外面はロクロナデ調整である。

小皿（2～4）　上げ底気味の平底で口縁部が短く開いているもの（2、3）と、底部と体部の境がくびれているもの(4)がある。2、3はBⅠ類で口径8.5cmと8.6cm、器高は1.1cmと1.4cm、4はD類で口径8.6cm、器高は1.5cmある。底部外面に糸切り痕が残る。

瓦器（9～12）

いずれもAⅡ類の碗である。高台は角張り、体部は内彎しながら開き、口縁端部は丸味を持っている。口径16.4～17.2cm、器高は5.9～6.7cm、高台径は6.5～7.3cm、内外面ともヘラミガキを施している。

青磁（13～20）

碗（15～20）　いずれもD類のもので、体部内面及び底部見込みに文様を施すD$_a$類（17・18）と文様を施さないD$_b$類がある。15は見込みに「金玉満堂」の吉祥句を刻印している。削り出し高台で、畳付部および底部外面に釉はかからない。釉は灰緑黄色で、貫入が極めて細かく入る。口径15.8cm、器高6.7cm、高台径は6cmある。17は櫛描き文の沈線を口縁部にめぐらし、同じ櫛描き文によって5分割して飛雲文を施している。口径は15.9cm、器高7cm、高台径5.8cmある。18は体部内面に蓮華の葉を横から見た文様に入れている。口径16.4cm、器高7.3cm、高台径6.1cm。19、20は底部破片で、高台畳付部、底部外面に釉はかかっていない。

皿（13、14）　13は口縁部破片で、釉は淡灰緑色である。14は底部が丸味をもち、口縁部は直線的に短く開いている。釉は灰白黄色、復元口径10.8cm、残存器高は2.1cmある。

白磁（21～30）

碗（23～30）　口縁部にやや大きめの玉縁をもつBⅡ類（23・24）とわずかに外反するC類（25）がある。25は体部内面下位に沈線をめぐらしている。26、27はC類の底部片で、高台は細く高い。体下半部から底部にかけては露胎である。28～30はBⅡ類につく底部で、28はコ字形高台をもち、底部と体部の境は段がつく。見込み部分には目跡が残っている。29、30は高台内側の削りが浅い。

小皿（21、22）　22は、上げ底気味の平底から口縁部は直線気味に開く。復元口径9.8cm、器高2.0cm、復元底径2.1cmある。

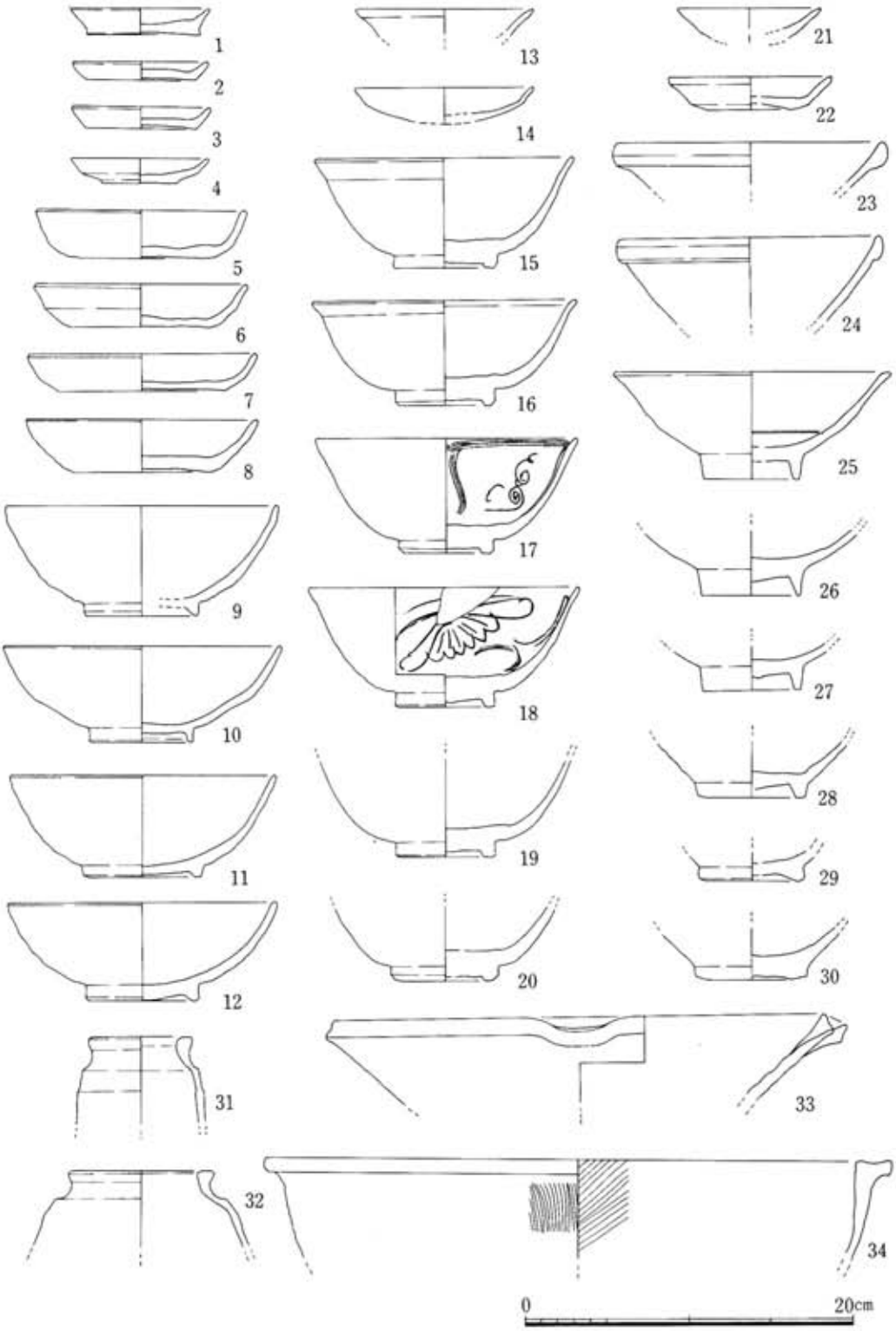


Fig 37　下中杖遺跡SE507井戸跡出土土器・陶磁器実測図

陶器（31、32）

小型の壺である。31は口縁部が肥厚し短い。肩部はやや丸味をもち、体部は直線的に伸びる。口縁部内外面と体部外面に釉がかかり、暗褐色である。復元口径5.9㎝、残存器高5.3㎝。32は体部がやや内傾し、口縁部は肥厚する。口縁端部には目跡が2ヵ所残る。釉は淡灰褐色で、復元口径8.4㎝、残存器高4.7㎝ある。

須恵質土器（33）

片口鉢である。復元口径は30㎝、口縁部および体部内面はヨコナデ、体部外面はナデである。

土師質土器（34）

土鍋である。口縁部は貼り付けて突出させている。口縁部外面はナデ、体部内外面はハケ目を施している。復元口径は38.6㎝あり、外面には煤が付着している。

5、SE 607井戸跡と一括遺物

(1)遺構（Fig. 38 PL.8）

H区南側に位置し、付近には柱穴が密集している。素掘りの二段掘り井戸で、平面は円形である。直径1.94m、深さ1.74m、底より0.5m上で段をもち、径は0.65mある。遺物は井戸上部に多くみられる。

(2)遺物（Fig. 39）

SE 607井戸からは、土師器、陶磁器、須恵器が出土している。

土師器（1～17、24）

杯（1～12）　いずれもCⅠ類に属するものである。その中でも1～6は体部と底部の境が明瞭なCⅠ$_a$類で、口径は12.4～13.0㎝、器高3.4～4.2㎝、底径は6.9～8.2㎝ある。ロクロ整形で、底部はヘラ切り離し、ヘラ切り離しのあとナデ、板状圧痕のついているもの（4）がある。7～11は体部と底

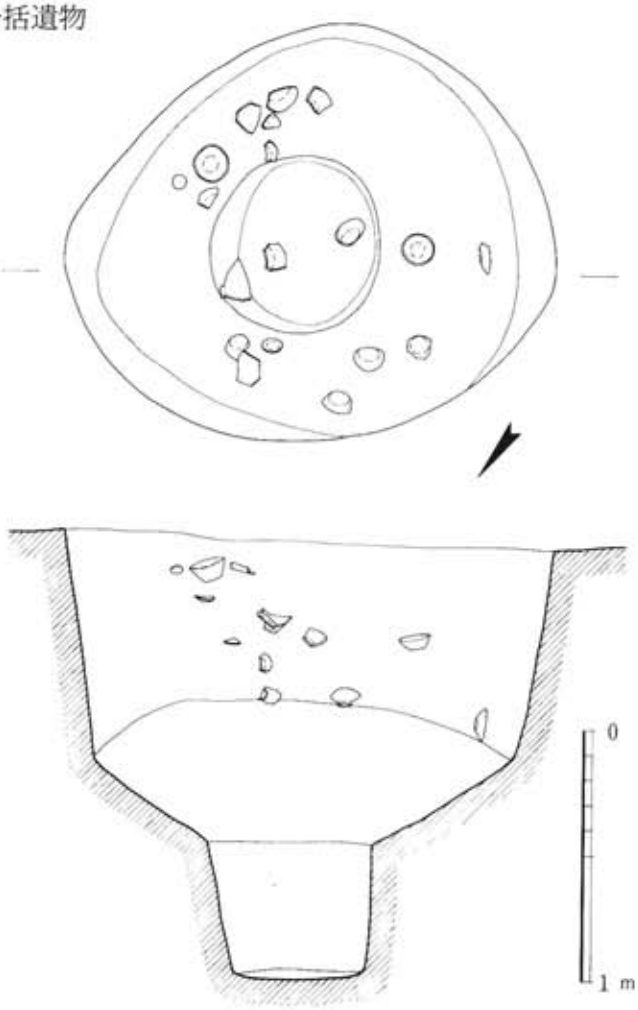


Fig 38　下中杖遺跡SE607井戸跡実測図

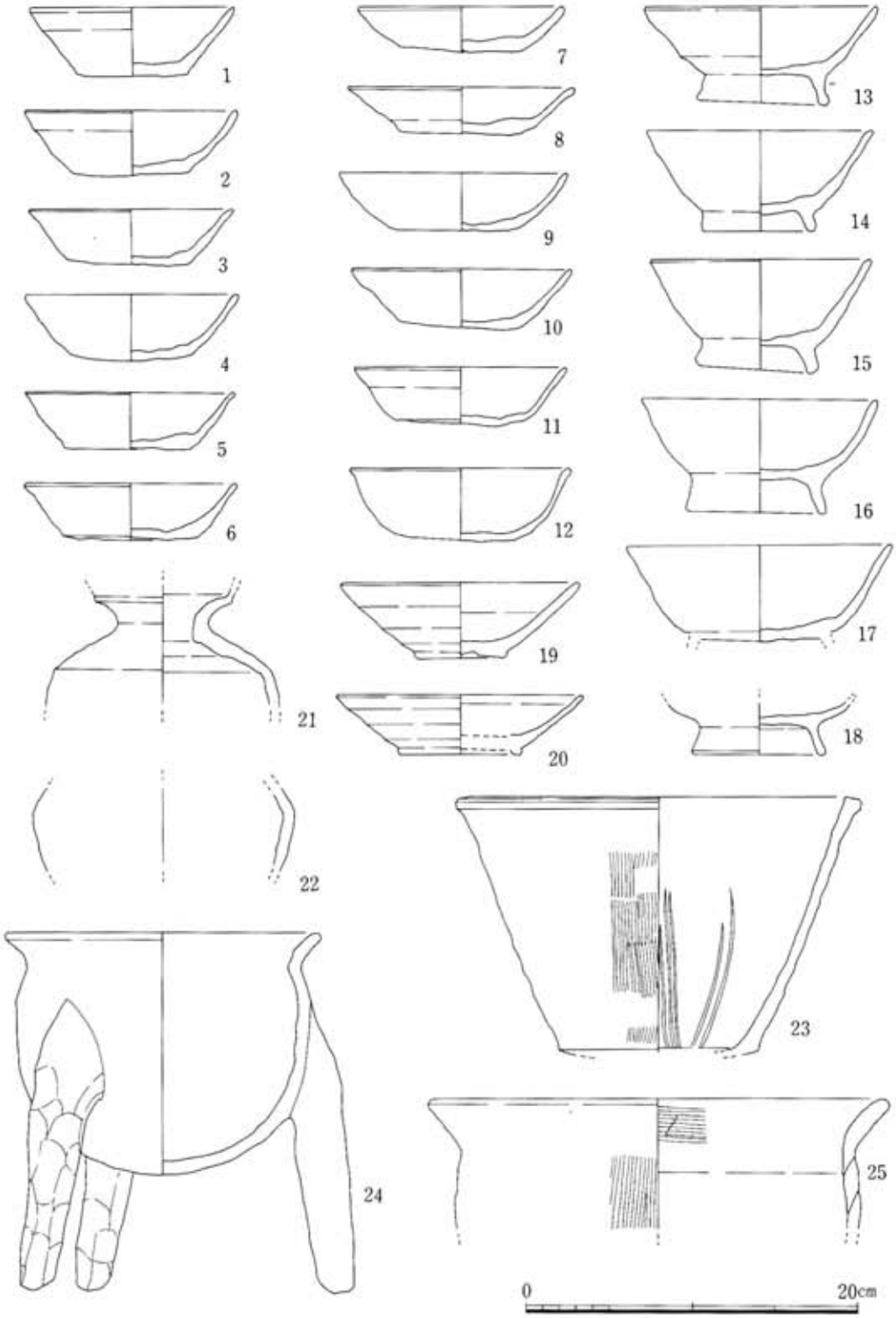


Fig 39　下中杖遺跡SE607井戸跡出土土器・陶磁器実測図

部の境が丸味をもつCI$_c$類で、口径12.3～13.8cm、器高2.8～3.6cm、底径7.4～7.9cmある。底部はヘラ切り離しで、9は板状圧痕がつく。12は、体部と底部の境は不明瞭で、体部は丸味をもちながら開いている。口径13.4cm、器高4.4cm、底径7cmあり、CI$_d$類にはいる。

碗（13～17）　高台のつくもので、いずれもAII$_b$類にはいる。高台は高く外に開き、体部はやや内彎しながら開いている。底部外面はヘラ切り離しのあとナデ、内面はナデ、体部内外面はロクロナデ調整である。口径13.2～15.8cm、器高5.8～6.9cm、高台径6.8～8.6cmある。

甕（25）　体部はやや内傾し、口縁部は丸く外反する。口縁部は外面ヨコナデ、内面はヨコナデの後ハケ目、体部は外面ハケ目、内面ナデ上げ。復元口径28.0cm。

鼎（24）　口径19.0cm、器高21.8cmで、口縁部は外反し、体部から底部へ丸味をもつ甕に脚をつけている。口縁部はナデ、体部から底部にかけては外面がハケ目、内面はヘラケズリである。脚部には指頭圧痕が残る。

黒色土器（18）

内黒の碗で、底部のみ残存している。高台は高く、外側に傾いている。外面はナデ、内面はヘラミガキである。

須恵器（21、22）

小型の壺である。21は口縁部がやや外に開き、頸部との境は明瞭である。頸部は器壁が厚い。黒灰色で、胎土は砂粒を含む。内面ヨコナデ、外面ヨコナデとナデである。22は体部破片で、内面ナデ、外面はヨコナデとナデ調整を施している。

土師質土器（23）

鉢である。底部は欠損する。体部は直線的に開き、口縁部外面は貼り付けて突出し、上面は面取りしている。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ目、体部下位ではハケ目の後ヨコナデ、内面はヨコナデのあとハケ目を部分的に施している。口径24.5cm、器高15.2cmある。

青磁（19）

A$_b$類に属する碗で、体部が直線的に開く。高台は蛇目高台、畳付部は内側へ上がる。高台外面と体部の境は明瞭で、畳付部は焼成後研磨している。胎土は精製され、釉は暗緑灰色である。復元口径14.0cm、器高4.6cmある。

緑釉陶器（20）

体部は直線的に開くもので、胎土はやや粗い。釉は暗緑灰色、部分的に黒褐色である。復元口径15cm、器高3.6cm。

V　総　　括

1、弥生時代の下中杖遺跡

弥生時代の遺構としては、B調査区南半部の北東隅を占めて墳墓群が構築されているが、ＳＪ201甕棺墓やＳＰ201土壙墓およびＳＲ205遺構の検出状況から判断すれば、墓域はさらに東と北に広がる可能性がある。

甕棺墓については、墓壙は平面長方形のものが多いが正方形に近いものも認められる。その幅の狭い側の壁に横穴を深く掘り込んで下甕を埋置している。今回検出した17基はすべて複式棺であり、上下に用いる棺はほとんど大型甕と大型甕、あるいは小型甕と大型甕の組み合わせである。上甕に用いる大型甕は口縁部あるいは器体上半部を打ち欠いて覆口式となる。接口部には粘土目張りを施さないのが通例である。棺の埋置傾斜は45°～50°前後に集中する。小児棺については小規模の平面長方形の墓壙に同形の小型甕同志を組み合わせて埋置する。この場合も墓壙の一方の狭い壁に横穴を掘っている。傾斜角度は45°～60°である。

甕棺墓の主軸方位については、すべておおよそ東西方向を向いて構築されている。土壙墓・木棺墓にも主軸をほぼ東西方向にとっているものが比較的多く、墳墓の方向を決定づける何らかの要因があったものと考えられる。

土壙墓はすべて墓壙のなかに棺を掘り込む二段掘りのものである。墓壙の平面形態は長方形を基調とし、その中軸位置に棺を掘るものがほとんどであるが、墓壙の長辺を棺の一部として用いるものも2例ある。棺の平面形態は隅丸長方形のものと長楕円形のものがあるが、後者は少ない。蓋の有無については石材を残すものが1基あるのみで失蓋のものが多い。しかし、棺の上部周囲に目張り用の粘土を残すものが2基認められる。

木棺墓の発見例はこれまで県内において報告されておらず、今回検出された6基は貴重な資料である。特にＳＰ203木棺墓はその板材こそ残っていないが、掘り方が比較的明瞭に判明した。木棺のつくり方は、墓壙中央部に直接木棺を組み立て、まわりを埋め込む方式であるが、ＳＰ216木棺墓については、まず墓壙を掘り、中央部に棺を組み立てるための壙を掘り込む二段掘りとなっている。墓壙の平面形態、墓壙と棺の位置関係などは土壙墓とほぼ同じ様相を示している。築造年代は共伴する遺物がなく、不明である。また土壙墓のなかに二段目の壙が非常に浅いものがあり、木棺の可能性が強いが、木棺埋設の痕跡がはっきりしないため、ここでは土壙墓としてとり扱った。

つぎに、下中杖遺跡の甕棺の編年的位置づけを森編年[(1)]および高島編年[(2)]に対応させると次のようになる。

	立岩式・Ⅶ式	桜馬場式・Ⅷ式
大型甕	ＳＪ 204（下）	ＳＪ 201（下）
	ＳＪ 211（下）	ＳＪ 203（下）
		ＳＪ 206（下）
		ＳＪ 210（下）
中型甕		ＳＪ 203（上）
小型甕	ＳＪ 202（上・下）	
	ＳＪ 208（上・下）	
	ＳＪ 212（上・下）	
壺		ＳＪ 201（上）

このように埋葬に使用された棺の形態的一面から見れば、弥生時代中期後半から後期初頭頃までの通有の甕棺のタイプとしてとらえられると思う。

下中杖遺跡の周辺には、中原町姫方遺跡[3]、上峰村切通遺跡[4]、上峰村・東脊振村にまたがる二塚山遺跡[5]などの巨大な甕棺埋葬遺跡をはじめとして数多くの甕棺墓が分布しているが、二塚山遺跡の編年序列によると、下中杖遺跡の甕棺墓は二塚山Ⅲ期からⅣ期の頃とほぼ並行して営まれている。

土壙墓には時期決定の手がかりとなる遺物がなく、わずかに１基の土壙墓から中期後半頃の高杯片が発見されただけである。甕棺墓との切り合い関係ではＳＰ 207 土壙墓がＳＪ 207 甕棺墓を切っている。このような点から、土壙墓の造営開始の上限は少なくとも甕棺墓のそれより溯ることはないと考える。

祭祀遺構出土の土器はその所産を中期後半に求められ、甕棺墓が営まれた時期とほぼ対応すると考える。これらの高杯、壺は入念な丹塗りがなされており、日常雑器とは性格、用途を異にするものであることがうかがえる。最も多くの土器が出土したＳＲ 202 祭祀遺構では、高杯、壺、鉢、甕など器種も豊富で、しかもそれらが破壊されずに意図的に供献されたという様相を示している。特に大型甕の口縁部のみを打ち欠いて土壙底に据え置くという例が、二塚山遺跡や神埼町利田柳遺跡[6]、さらに北茂安町宝満谷遺跡[7]の祭祀遺構にも見られることは興味深い。

弥生時代の墓地で問題となるのは、墳墓と祭祀遺構の関連性である。最近、祭祀と考えられる遺構が二塚山をはじめとして利田柳・宝満谷などの甕棺遺跡に伴って発見されているが、下中杖遺跡の個々の祭祀遺構は二塚山や宝満谷のそれほど規模は大きくなく、土器の出土状況についても単に投げ込まれたものではないように思う。また、祭祀遺物のセット関係では、他の遺跡が丹塗りの高杯と壺・大型器台が組み合わさっているが、下中杖遺跡では大型器台は供献されず、高杯と鉢・甕、壺と鉢、あるいは甕のみという具合に性格を異にする。

なお、1ヵ所ＳＲ204遺構から出土した土師器は5世紀前半頃のものである。この土壙は位置関係および造営年代を考えるうえで甕棺墓と結びつけるのはやや困難であり、祭祀という性格も希薄であるが、ここでは一応祭祀遺構としてとり挙げた。

2、古墳時代以降の下中杖遺跡

(1)遺構

今回の調査で検出した遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙、溝、柵などであるが、遺跡の中心をなす掘立柱建物については、その柱穴からの出土遺物が少なく、年代決定、また、集落跡全体の変遷や性格の把握を困難にしている。

竪穴住居跡は奈良時代に属するＳＢ214住居を除けば、すべて古墳時代の所産である。すべて平面方形か、方形に近い長方形で、特別に規模が大きいものは存在しない。竪穴住居跡は5世紀末から6世紀前半に属するＳＢ204・ＳＢ208・ＳＢ209住居から6世紀後半のＳＢ201住居まであり、時期的に幅がある。Ａ区やＤ区で検出された竪穴住居跡も同様である。

掘立柱建物跡は全調査区で検出したが、Ｂ区以外では調査面積も小さく、全体の確認は困難である。Ｂ区については、柱穴より出土した土器のうち最も新しいものの時期を建物存在の時期と考えると、ＳＢ222・ＳＢ227・ＳＢ234建物が平安時代に属する。特にＳＢ222建物の柱穴からは土師器杯ＣⅠを多数出土した。この建物は全体の規模も柱穴の規模も最も大きく、平安時代前期における中心的な建物であった可能性が強い。鎌倉時代に属するものとしてＳＢ225・ＳＢ226・ＳＢ228・ＳＢ247建物があげられる。ＳＢ225建物とＳＢ247建物は隣接して同時に存在した規模の大きな建物と考えられる。室町時代に属するものとしてはＳＢ223建物があげられるのみで、大規模な建物は検出できなかった。

時期が不明なものの中にＳＢ220・ＳＢ244建物など大規模なものがある。また2間×1間の建物はＳＢ219建物のように庇がつくものがあり、住居と考えられ、1間×1間の小規模なものは倉庫のような用途が考えられよう。総柱をもつ建物の中でＨ区に存在するＳＢ601建物とＳＢ603建物は規模、棟方向、柱筋が同一方向であり、建物間隔が5ｍあるが、東大寺文書の東大寺領摂津国西成郡荘の記録などにみえるような双甲倉の可能性がある。

Ｂ区については各時期とも大規模な建物が集中するのは北半部の西寄りの区域であり、さらにその西側の現在水田となっている部分を含めた区域が下中杖集落の中心的な区域であったと思われる。

井戸跡についてはほぼ一時期の遺物が一括して出土することから、使用された年代が判明する。古墳時代に属するものとしてＳＥ207・ＳＥ228・ＳＥ229井戸、奈良時代に属するものとしてＳＥ213井戸があげられる。平安時代になるとＳＥ201・ＳＥ202・ＳＥ206・ＳＥ210・ＳＥ211・ＳＥ212・ＳＥ226井戸などその数を増す。またＳＥ201・ＳＥ202井戸からは土師器などとともに

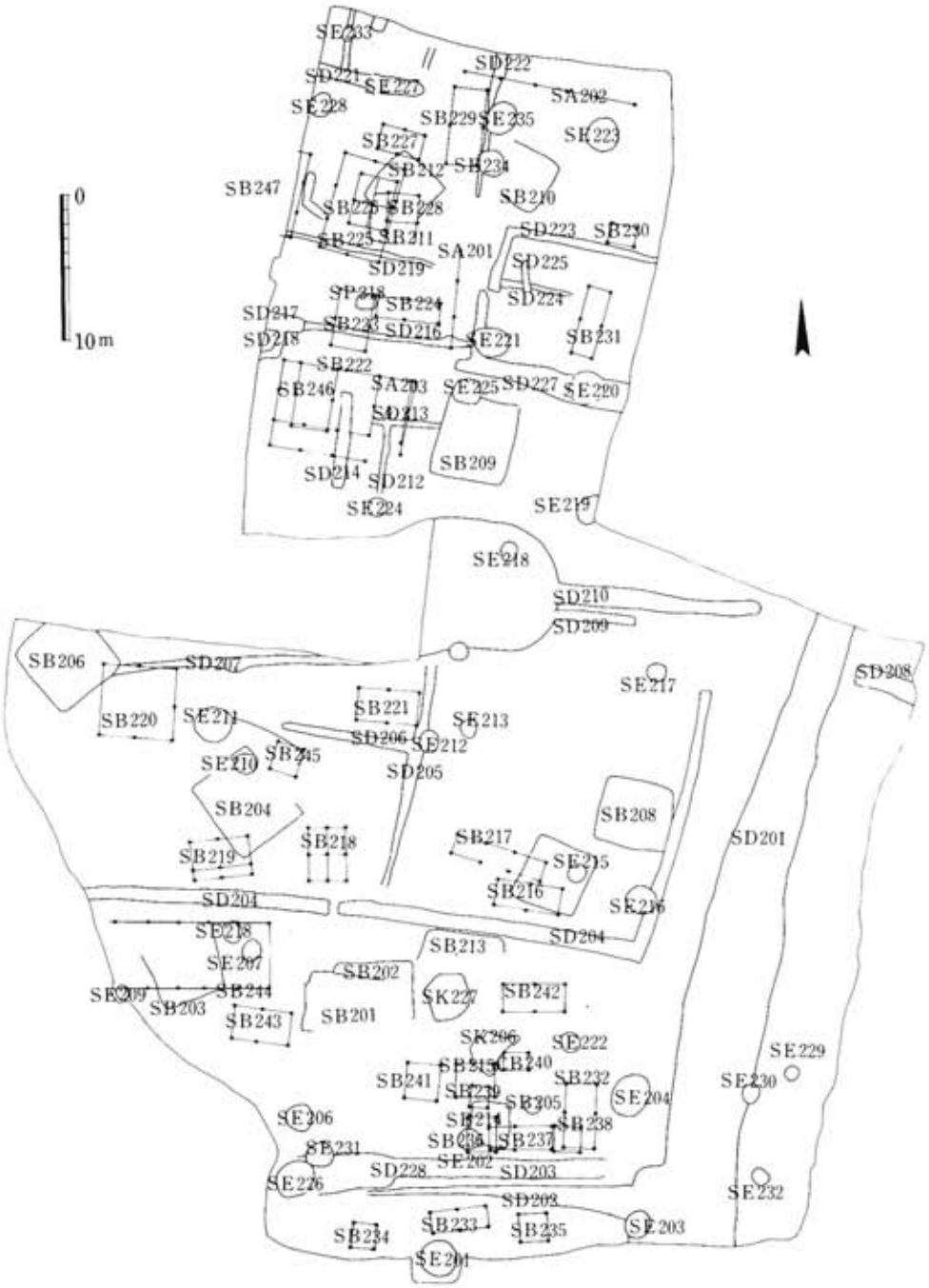


Fig 40　下中杖遺跡B区主要遺構配置図

多数の越州窯青磁、白磁、緑釉陶器などを一括して出土したことは注意をひく。平安時代の井戸からは木製品も出土する。鎌倉時代に属するものとしてはＳＥ208・ＳＥ218・ＳＥ220・ＳＥ231井戸があげられ、室町時代に属するものとしてＳＥ204・ＳＥ215・ＳＥ216・ＳＥ230井戸がある。これら鎌倉～室町時代の井戸からは、龍泉窯系青磁を中心とする輸入陶磁器とともに漆器碗や他の木製器が出土する。

井戸と建物との配置は、建物の時期が明確でないので、同時に存在したものを指摘できない。Ｂ区において年代が明らかなものについて、その形態や規模の時期的な変化をながめると一定の傾向がうかがえる。井戸の掘り方は一段掘りと二段掘りに大きく分かれ、後者は一段目の底が平面となるもの（Ａ）と漏斗状に斜めになるもの（Ｂ）に分類できる。Ｂ区で年代が明らかなもの16基についてみると、一段掘りのものは全時期を通じて存在するが数は少ない。二段掘り（Ａ）については奈良、平安、鎌倉時代各１基に対して室町時代には３基となる。これとは逆に二段掘り（Ｂ）は古墳、平安、鎌倉時代それぞれ２、４、１基に対して室町時代のものは存在しない。規模については平面規模は古墳、奈良、平安時代のものが径１～２ｍ内に集中し、鎌倉、室町時代には３ｍに近いものもいくつか現われる。深さは各時期の地下水位とも関連すると思われるが、平安時代までのものは約1.1～1.8m、鎌倉時代以降のものは約2.1～2.8mに集中し、中には３ｍを越えるものまで出現する。

土壙は古墳時代に属するものがほとんどで、奈良時代に属するものとしてＳＫ206・ＳＫ234土壙が、平安時代に属するものとしてＳＫ204・ＳＫ228土壙があげられるにすぎない。

溝跡は奈良時代のＳＤ222溝を除いて、時期が明らかなものは、鎌倉時代のＳＤ223・ＳＤ224溝以外のほとんどは室町時代に属する。

(2)遺物

遺物については弥生時代から室町時代、一部江戸時代のものが出土したが、注目すべき資料としてはＳＫ206・ＳＫ227土壙から出土した奈良時代の須恵器、ＳＥ201・ＳＥ202・ＳＥ607井戸から出土した平安時代の土器、陶磁器の一括遺物、ＳＥ507井戸から出土した鎌倉時代の土器、陶磁器の一括遺物がある。Ｂ区には他の時期の遺物でまとまったものがない。Ｆ区、Ｈ区にはこれらの間の空白な時期を埋める資料があるが、未整理のためここではふれない。

ＳＫ206土壙からは土師器甑とともに須恵器蓋ＤＩ$_a$、ＤＩ$_b$、皿Ａ$_b$、Ｂ$_a$、壺Ｂが、ＳＫ227土壙からは土師器杯とともに須恵器蓋ＤＩ$_a$、杯ＥＩ、ＥII$_a$、高杯、皿Ａ$_b$、甕などが出土した。従来周辺では奈良時代の須恵器の出土はあまりなく、好資料となる。

ＳＥ201・202・607井戸出土遺物は、ＳＥ607井戸上部に切り込んだ部分より出土した中、近世の遺物を除けば、すべて平安時代前期のものであり、それぞれの間にわずかな年代差があると考えられる。

ＳＥ201井戸出土品は土師器28以上、黒色土器数点、青磁８、白磁３、緑釉陶器１、土錘数点、

青銅製箸１組などである。それぞれの器種は土師器(杯14以上、碗11以上、甕３以上)、黒色土器（碗)、青磁（碗３、皿３、水注？２)、白磁（碗３)、緑釉陶器（壺？）である。黒色土器は２、３点と少なく、土師器と陶磁器の比率は約２：１と陶磁器の占める割合が大である。ＳＥ202井戸では土師器88以上、黒色土器７以上、須恵器数点、青磁１、白磁１、緑釉陶器１、鞍、砧、糸車などの木製品、牛、鹿などの獣骨[8]などが出土したが、それぞれの器種は土師器（杯59以上、碗12以上、脚付皿２～３、甕14以上)、黒色土器(碗７)、須恵器(皿、甕)、青磁(壺？)、白磁（碗)、緑釉（壺？）となっている。土師器と黒色土器の比率は約13：１（碗については約２：１）となっており、土師器と陶磁器の比率は約30：１と土師器の占める割合が大である。ＳＥ607井戸出土品については残りが良いものだけについてみると土師器16（杯12、碗４)、黒色土器１（碗)、須恵器２（壺)、青磁１（碗)、緑釉陶器１（皿）となり土師器の占める割合が大きい。

この３基の井戸から出土した土器、陶磁器には形態などに細かな差異が認められる。まず土師器の杯については、すべて底部はヘラ切り離しで、口径12.2～14.0cm、器高2.7～4.4cmにおさまるが、口径12.5～13cm、器高3.5cm内外のものが最も多い。皿状の杯ＣⅡ、ＣⅢは前者がＳＥ201井戸、後者がＳＥ202井戸出土で器壁の厚さ、法量に差異が認められる。杯ＣＩ類についてはＳＥ201井戸から杯ＣＩ$_a$、ＣＩ$_c$、ＳＥ202井戸から杯ＣＩ$_a$、ＣＩ$_b$、ＣＩ$_c$が、ＳＥ607井戸から杯ＣＩ$_a$、ＣＩ$_c$、ＣＩ$_d$が出土している。大宰府を中心とする編年において、９世紀前半に考えられているＳＥ400井戸出土土師器から10世紀前後と考えられているＳＫ674土壙出土土師器への変化[9]にみられるように、底部と体部との境が丸味を持つことなどから杯ＣＩ$_a$から杯ＣＩ$_c$さらにはＣＩ$_d$へと変化する傾向がうかがえる。また土師器碗についても、ＳＥ201出土のものは高台のつけ根から、体部は直線的にのびるもので、ＳＥ202井戸出土のものにも、同様な形態のものも混るが、体部がやや内彎しながら開き、杯部が浅くなり、高台が高くなるものが多くなる。ＳＥ607出土のものはすべてこれらと同様な形態をとる。

これら３基の井戸から出土した土師器は、大宰府出土土師器の編年[10]によると９世紀のうちにおさまるものであり、ＳＥ201出土土師器を９世紀前半、ＳＥ202出土土師器を９世紀中頃、ＳＥ607出土土師器をその直後に位置づけたい。

次にこれら３基の井戸から出土した陶磁器の変化によってもある程度年代差が認められる。ＳＥ201・ＳＥ202井戸から出土した白磁碗Ａ類については最近全国で越州窯青磁に伴う白磁としてその出土例を増しているものだが、前者のものが器高が小さく、口縁部の玉縁も小さい。釉の色調も黄味がつよく晩唐～五代の白磁でも古手の感がある。

ＳＥ201・ＳＥ202・ＳＥ607井戸から出土した磁器類と同形態のものを出土した遺跡のうち比較的年代が推定できるものとして、平城京東三坊大路東側溝（ＳＤ650溝Ａ[11])、広隆寺[12]などがあげられる。両遺跡とも９世紀前半に推定されている。平城京では下中杖の青磁碗Ａ、青磁皿

Aを、広隆寺では下中杖の青磁皿Aを出土している。下中杖遺跡出土の越州窯青磁のうちＳＥ201出土のものは器種も豊富で、輪花皿など珍しいものも含まれる。これらを実際に観察した故宮博物院の馮先銘は五代まで下らない晩唐の作であると明言している。[13]

緑釉陶器についてはその産地は比定し難いが、ただＳＥ202井戸出土の壺の肩部かと思われるものと胎土、釉調など全く同一のものが北野廃寺から出土したということで、10世紀まで下らないということである。[14]

ＳＥ507井戸からは土師器小皿Ｂ、土師器杯ＣⅣb、瓦器碗ＡⅡ、青磁皿、青磁碗Ｄa、青磁碗Ｄb、白磁皿Ｂ、白磁碗ＢⅡa、白磁碗ＢⅡb、白磁碗Ｃ、褐釉陶器壺、片口、土鍋などを一括して出土した。土師器に瓦器、青磁、白磁が多数共存する時期の好資料である。

土器、陶磁器以外の遺物としても貴重なものがいくつか出土している。ＳＥ201井戸から出土した青銅製箸やＳＥ202井戸から出土した木製馬鞍などである。前者は全国で未だ出土例を聞かない。非常に精巧なつくりで、本例には使用のあとがうかがえておもしろい。木製鞍については、古代木製鞍の出土例としては４例目であり、最近佐賀県武雄市都遺跡[15]から出土した中世木製鞍を含めて、全国で５例しか出土していない。山形県嶋遺跡[16]、大阪府陵南遺跡[17]、佐賀県石木遺跡[18]のものは古墳時代に属するもので、平安時代の出土例としてはこの下中杖例が初めてであり、また伝世品としても平安時代前期のものはない。古代鞍として著名なものに正倉院の素地牟久木鞍や手向山神社の漆塗四枚居木鞍などがあるが[19]、下中杖例はこれらに類似した形態をとる。また裏面に顕著な木目からは、素材の選定や木取りが理解できて興味深い。

(3)遺跡の性格

下中杖遺跡では弥生時代前期末から中期にかけて遺跡内の数ヵ所で墳墓が営まれ、その後６世紀に竪穴住居が出現する。８世紀からは掘立柱建物を主体とする集落が営まれ、中世へと存続する。

さて、特に平安時代前期においてＳＢ222建物を中心とする集落内では、越州窯青磁や白磁、緑釉陶器など貴重な文物が土師器や須恵器とともに多数使用され、また馬鞍や青銅製箸などにみられる生活水準の高さから、遺跡の性格として官衙的な色彩が強く感じられる。豊富な輸入陶磁器や漆器碗などからこのような性格は鎌倉時代に至っても持続すると考えられる。しかし、建物の構造、柱穴の規模や形態などは現在までに明らかになっている郡衙など定型的な配置関係を持った官衙とは異質なものである。遺跡の性格として郡衙以外に考えられるものに、官人の館、荘園関係の施設などがあげられよう。特に後者については、豊富な輸入陶磁器の出土と相俟って関連づけができそうな文献、古記録がある。下中杖周辺は古代末期以降、「神崎荘」[20]と呼ばれる皇室（院）領荘園となっている地域の一部にあたると考えられる。時期はやや下るが、「御堂関白記」長和四年（1015年）７月15日の条に、藤原道長が宋僧念救の帰国に際して、天台山大慈寺に作料物を送ろうとしたことが記されており、その時念救は神崎御荘司豊嶋方人

が下向するのについて下向したとある。おそらく神崎荘から貿易船に乗り帰国したものと考えられる。また、「長秋記」長承2年（1133年）8月13日の条には宋の貿易船が神崎荘に来着したが、平忠盛は自ら院宣と号して貿易を独占したことが記されている。これらの事実から、少なくとも平安時代中期において、すでに神崎荘が宋との貿易港となっていたことがわかる。このことは肥前風土記三根郡の条に海部直鳥という人名が見えるように、以前より周辺には水運の担い手としての海人がいたことと無関係ではなかろう。前にも述べたように、大宰府から離れた肥前国神崎郡で、時期的にも古い晩唐時代の陶磁器を一括して出土した事実は、大宰府管内ではあるにしろ、唯一の貿易管理機関である大宰府鴻臚館を経由しない貿易ルートの存在を物語っているのかも知れない。

（註）

(1) 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』1968

(2) 高島忠平「甕棺の編年」『立岩遺跡』1977

(3) 佐賀県教育委員会「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集　1974

(4) 金関丈夫、金関恕、原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』1961

(5) 佐賀県教育委員会「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集　1979

(6) 1979年～1980年　佐賀県教育委員会調査

(7) 1979年～1980年　北茂安町教育委員会調査

(8) 獣骨についての鑑定は九州大学農学部畜産学第二教室の高原斉による。

(9) 横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」九州歴史資料館研究論集2　1976年

横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」九州歴史資料館研究論集4　1978年

(10) 註(9)に同じ

(11) 「平城宮跡発掘調査報告Ⅵ」奈良国立文化財研究所　1974年

(12) 「峰岡寺跡の発掘調査」古代文化25－1　1973年

(13) 昭和54年3月27日佐賀県立博物館へ来館の際、教示を得た。

(14) 京都市埋蔵文化財研究所の教示による。

(15) 1979～1980年武雄市教育委員会調査

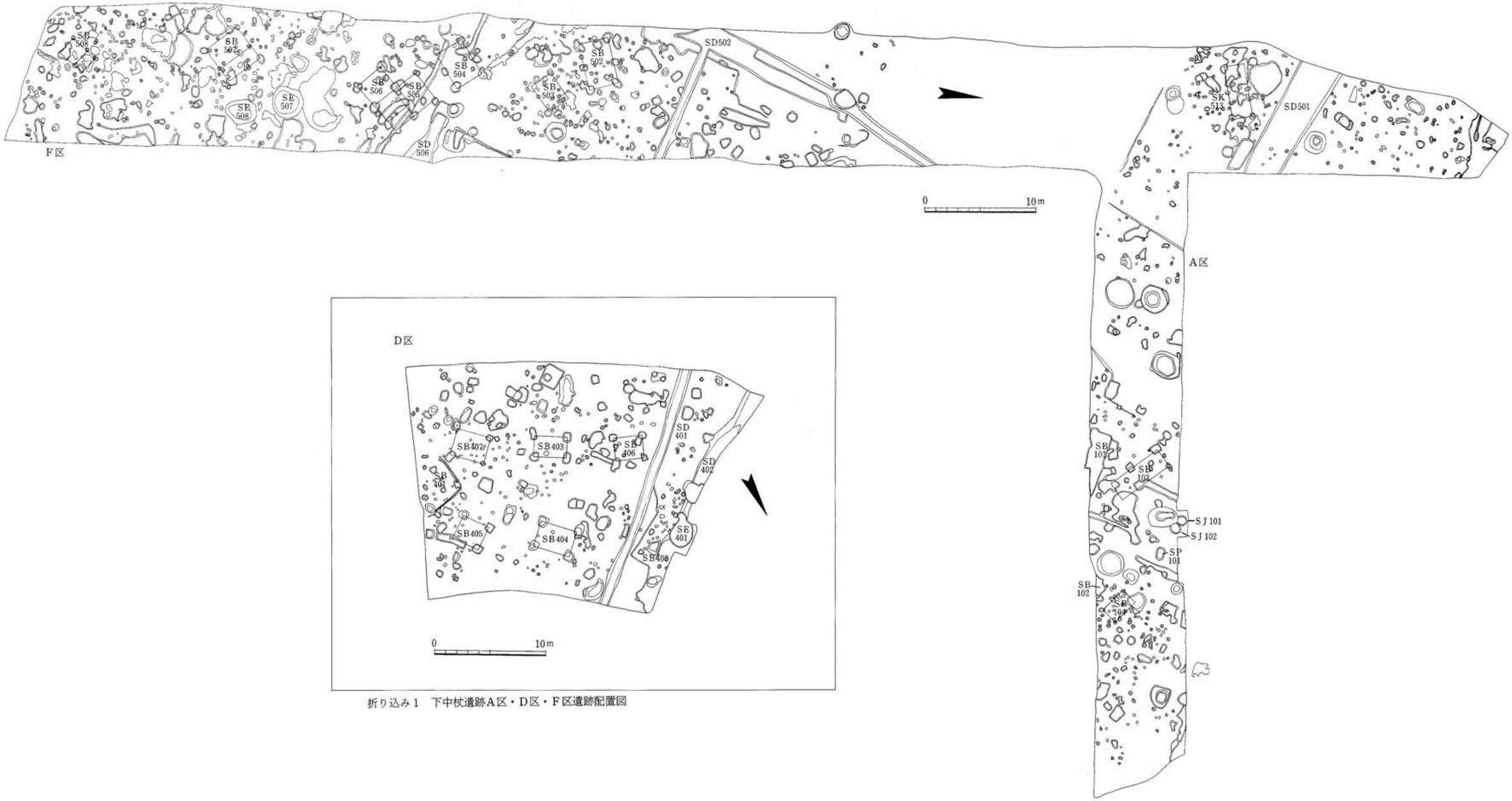
(16) 「嶋遺跡」山形市史別巻　1968年

(17) 「陵南遺跡現地説明会要旨」堺市教育委員会　1974年

(18) 佐賀県教育委員会「石木遺跡」佐賀県文化財調査報告書第35集　1976年

(19) 小松大秀「和鞍の形成に関する一試論」『ミュージアム』81号　1976年

鞍については、東京国立博物館の小松大秀から多くの教示を得た。



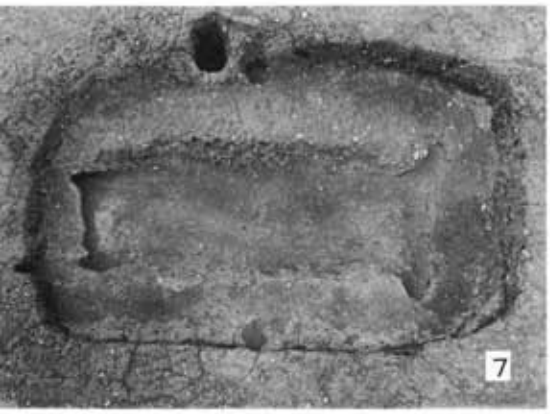
折り込み1　下中杖遺跡A区・D区・F区遺跡配置図

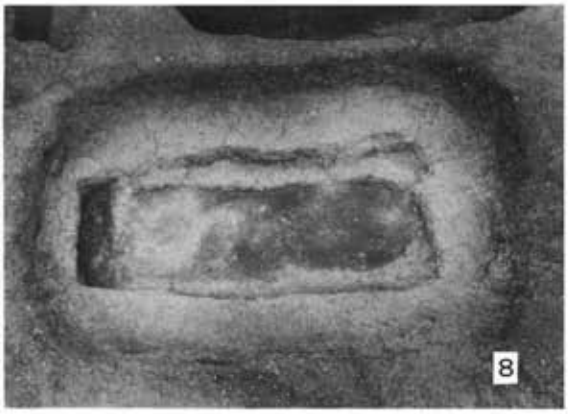
折り込み2　下中杖遺跡C区・H区遺構配置図

折り込み３　下中杖遺跡Ｂ区遺構配置図

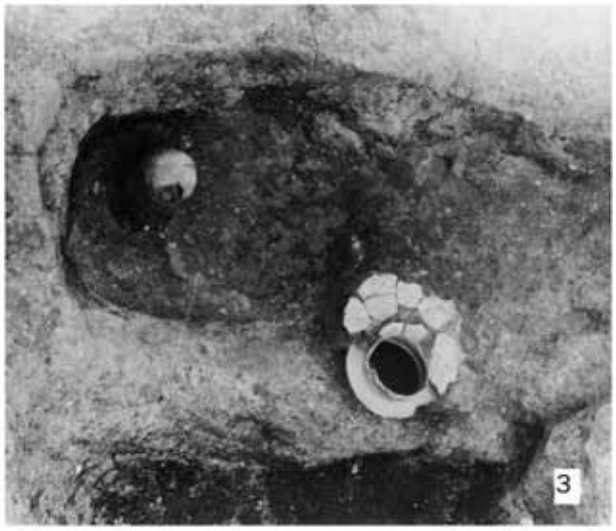
図　　版

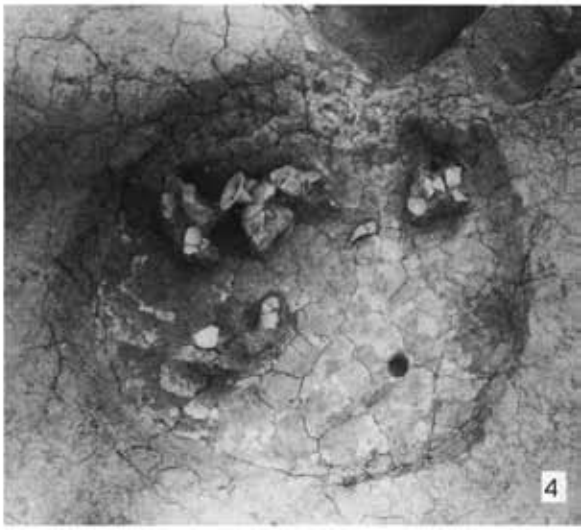
1、B区北半部〈南から〉
2、B区南半部西部〈北から〉
3、B区南半部墳墓群〈北から〉



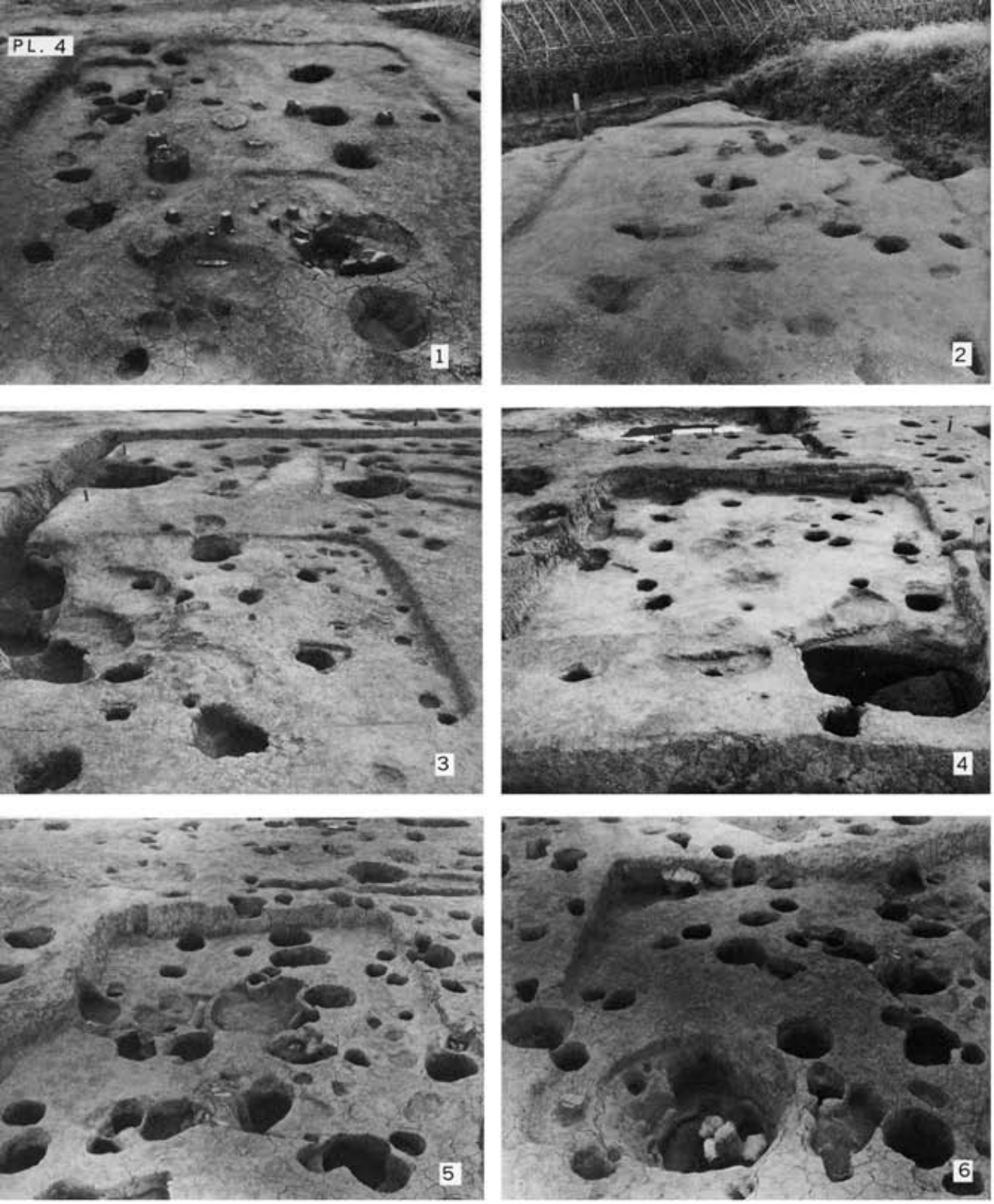


1、ＳＪ203甕棺墓　　5、ＳＰ202土壙墓
2、ＳＪ206甕棺墓　　6、ＳＰ204土壙墓
3、ＳＪ208甕棺墓　　7、ＳＰ203木棺墓
4、ＳＪ210甕棺墓　　8、ＳＰ205木棺墓

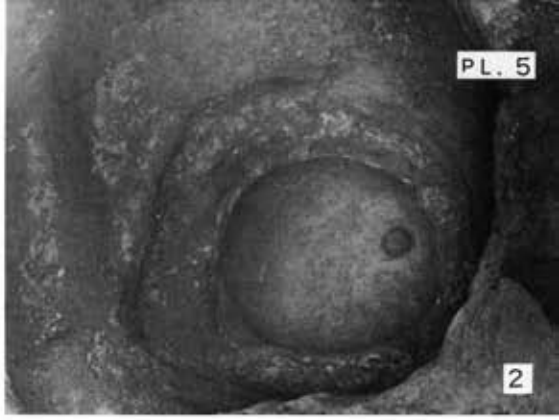


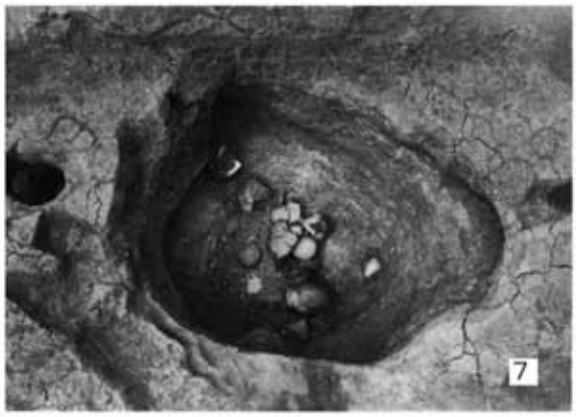


1、SR202祭祀遺構
2、同遺物出土状況
3、SR203祭祀遺構
4、SR204祭祀遺構
5、SR205祭祀遺構



1、SB203竪穴住居跡
2、SB206竪穴住居跡
3、SB208竪穴住居跡
4、SB209竪穴住居跡
5、SB211竪穴住居跡
6、SB212竪穴住居跡



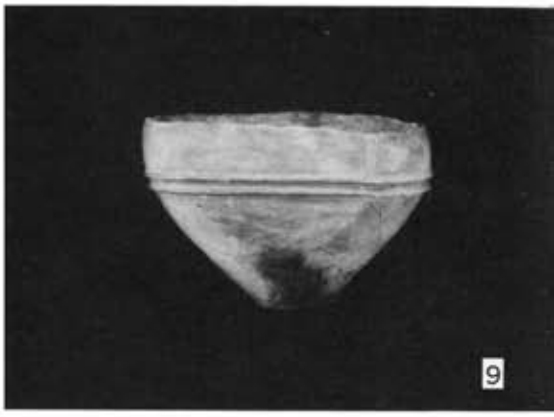


1、SE201井戸
2、SE225井戸
3、SE202井戸
4、同鞍橋出土状況
5、SE215井戸
6、同漆器椀出土状況
7、SE228井戸
8、同遺物出土状況

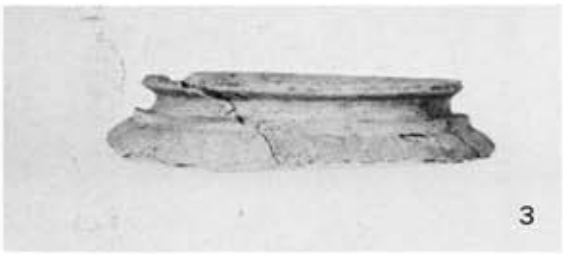
1、SD201溝〈南から〉
2、SD226溝・SD202・203溝〈西から〉
3、SD204溝〈北から〉
4、　同　〈西から〉
5、SP218土壙墓
6、同銅銭出土状況

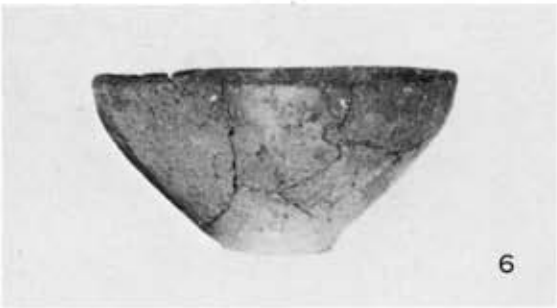
1、D区全景〈東から〉
2、A区全景〈東から〉
3、F区全景〈北から〉

1、C区全景〈北西から〉
2、H区全景〈西から〉
3、SE507井戸
4、SE607井戸



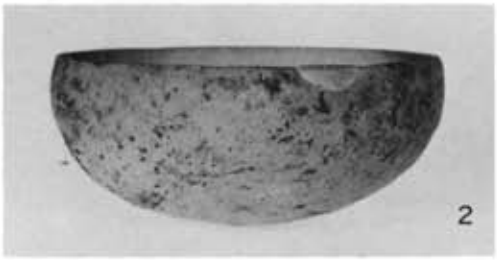
1、SJ211甕棺(下)
2、SJ210甕棺(下)
3、SJ206甕棺(下)
4、SJ208甕棺(上)
5、同　甕棺(下)
6、SJ203甕棺(上)
7、同　甕棺(下)



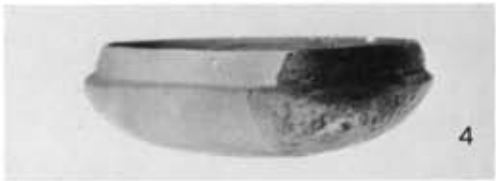


1、SR201祭祀遺構出土　　5、SR203祭祀遺構出土
2、SR202祭祀遺構出土　　6、　同　　遺構出土
3、　同　　遺構出土　　7、SR204祭祀遺構出土
4、SR205祭祀遺構出土　　8、　同　　遺構出土

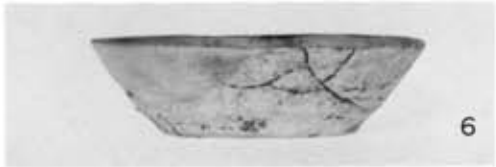
1


2

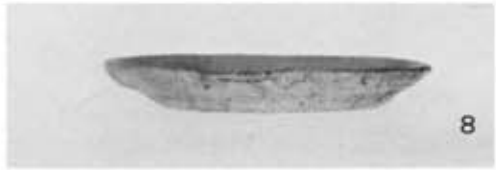
3


4

5


6

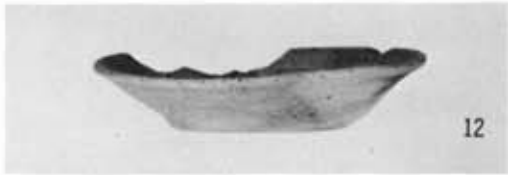
7


8

9

10

11


12

13

14

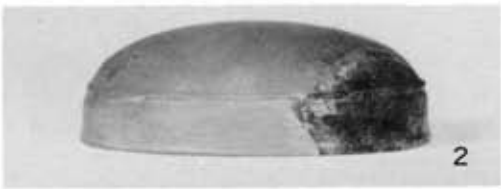
15

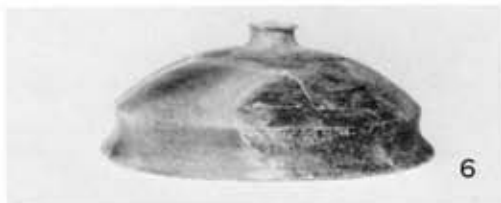
16

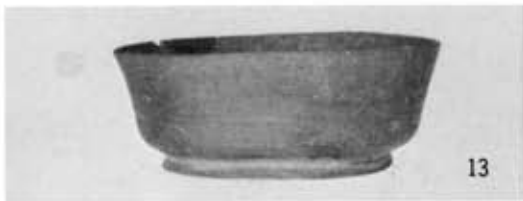
17

1、SB209住居出土
2、SE228井戸出土
3、　同　井戸出土
4、SK223土壙出土
5、SE202井戸出土
6、SE201井戸出土
7、　同　井戸出土
8、SE202井戸出土
9、SB211住居出土
10、SE216井戸出土
11、SE230井戸出土
12、SE607井戸出土
13、　同　井戸出土
14、SE202井戸出土
15、　同　井戸出土
16、　同　井戸出土
17、SE201井戸出土

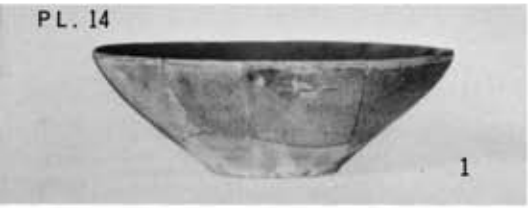
1、SK217土壙出土
2、SK203土壙出土
3、SK202土壙出土
4、SB209住居出土
5、SB201住居出土
6、SE228井戸出土
7、　同　井戸出土
8、SE229井戸出土
9、SE607井戸出土

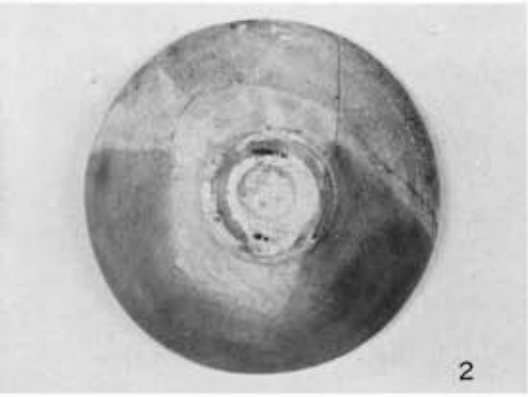


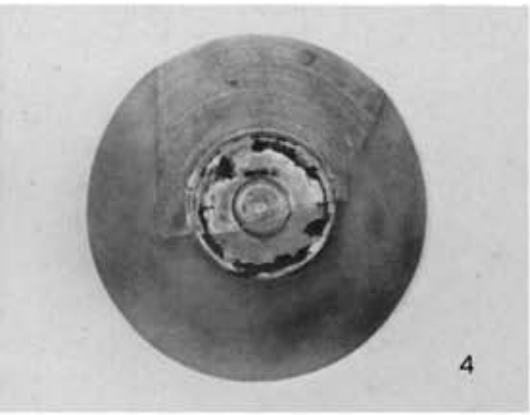


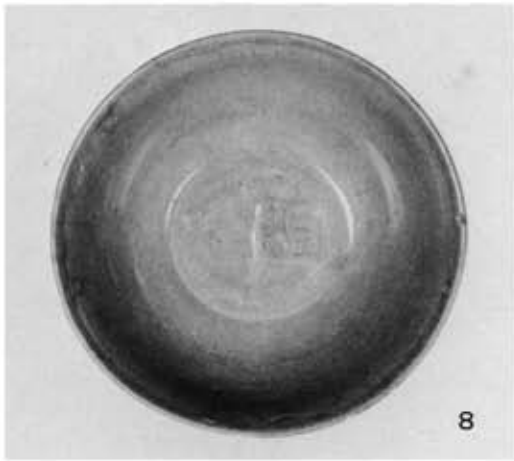


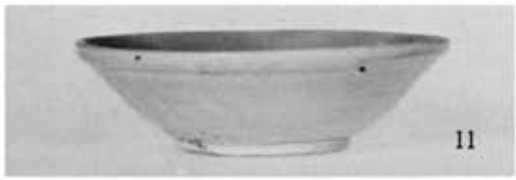
1、SK221土壙出土
2、SB209住居出土
3、SB203住居出土
4、SK223土壙出土
5、　同　土壙出土
6、SE213井戸出土
7、SK206土壙出土
8、SK227土壙出土
9、　同　土壙出土
10、SB209住居出土
11、SK240土壙出土
12、SB213住居出土
13、SB214住居出土
14、SK228土壙出土
15、SK206土壙出土
16、　同　土壙出土
17、SB204住居出土



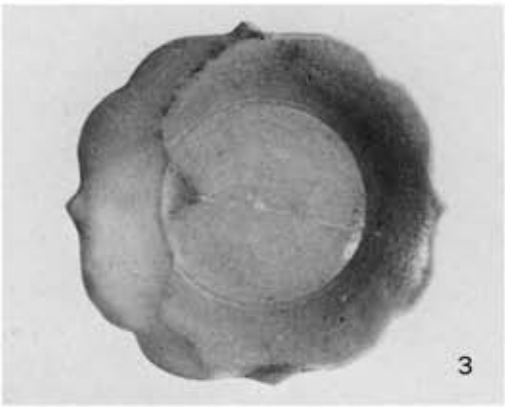


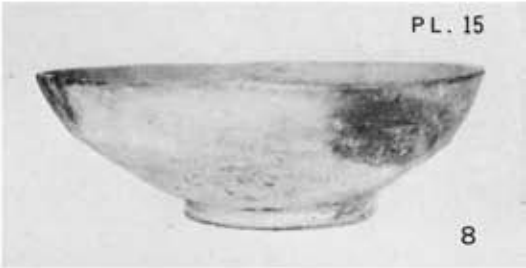


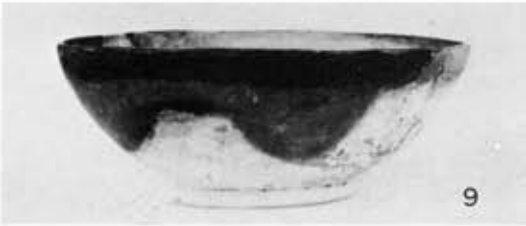




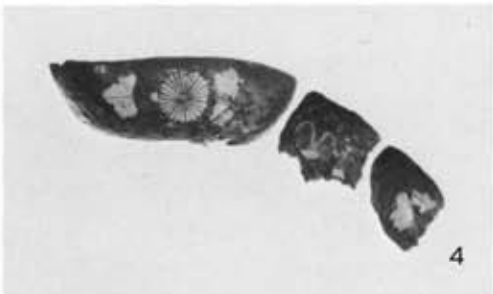
1、SE201井戸出土
2、　同　底部
3、SE607井戸出土
4、　同　底部
5、SE507井戸出土
6、　同　出土
7、　同　出土
8、　同　見込み
9、　同　出土
10、SE223井戸出土
11、SE202井戸出土
12、SE201井戸出土
13、SE507井戸出土

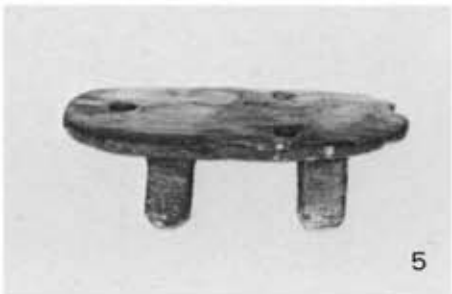




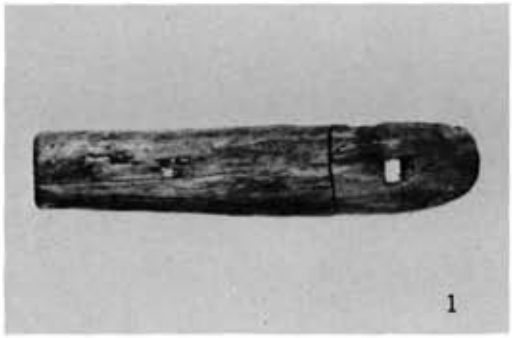


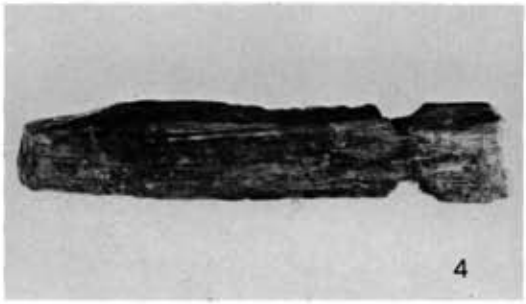
1、SE201井戸出土
2、　　同 井戸出土
3、　　同　見込み
4、SE507井戸出土
5、SE607井戸出土
6、SE202井戸出土
7、下中杖遺跡出土
越州窯陶磁器
緑釉陶器(下一段)
8、SE507井戸出土
9、　同　井戸出土
10、SB212住居出土
11、SE230井戸出土
12、SE208井戸出土
13、SE215井戸出土

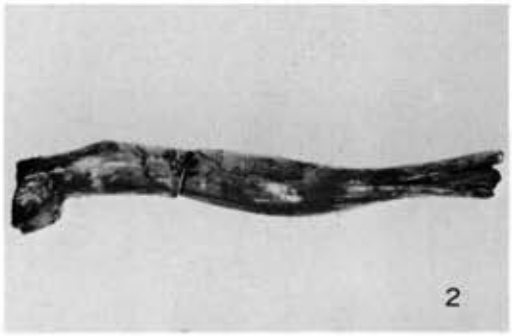


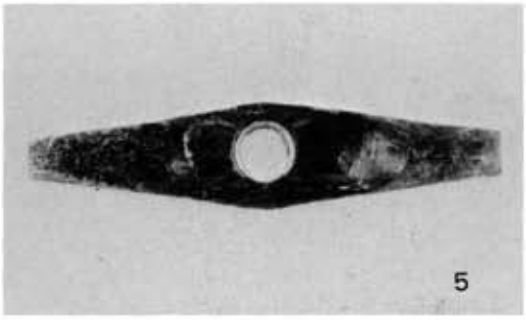


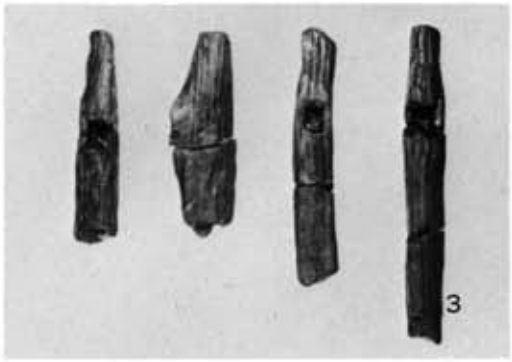
1、SE202井戸出土　　5、SE215井戸出土
2、　同　部分拡大　　6、　同　井戸出土
3、SE215井戸出土　　7、　同　井戸出土
4、　同　井戸出土

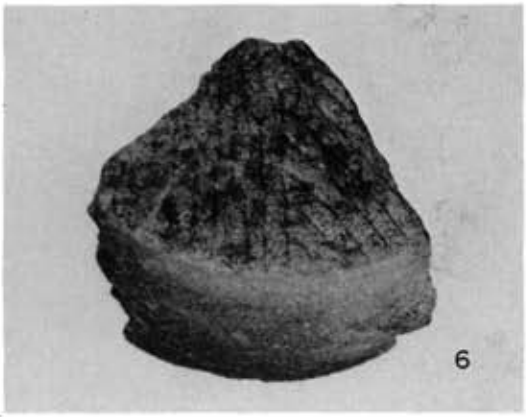


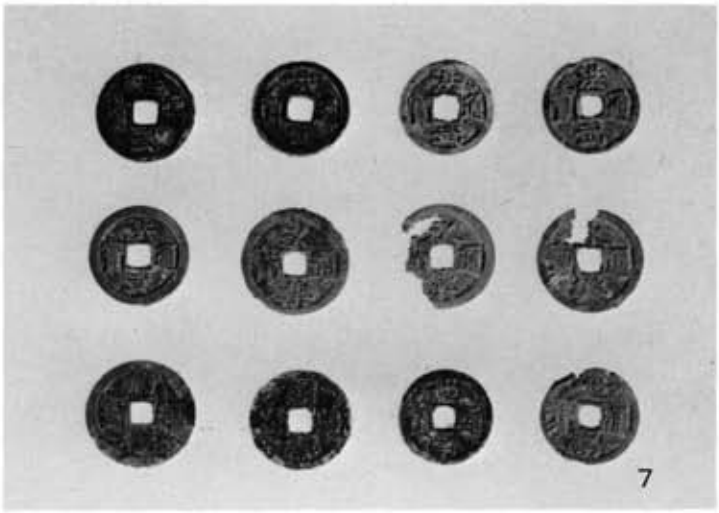


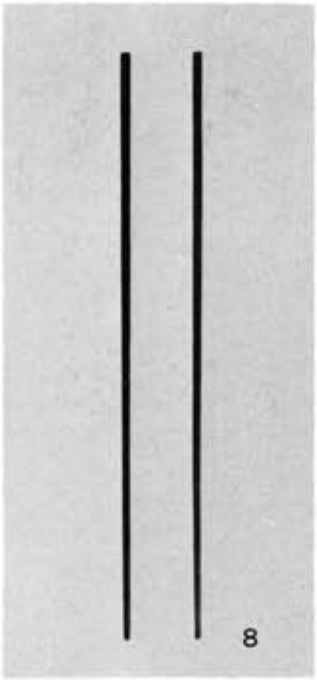












1、SE222井戸出土
2、　同　井戸出土
3、SE202井戸出土
4、SE215井戸出土
5、SE222井戸出土
6、SD204溝出土
7、B区出土銅銭
8、SE201井戸出土

下中杖遺跡

昭和55年3月20日印刷
昭和55年3月31日発行

発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内1丁目

印刷　佐賀印刷社
佐賀市高木瀬町長瀬1136－54